

K2A-27 Z32-B88

金の星



国立国会
8. 3. 26
図書館

第六卷 第五号 第五號

大正三十五年五月一日發行

大正三十五年五月一日發行



OSAMA

本品の矜り
 各宮殿下御嘉納品
 全國男女高等師範
 學校。全國師範學
 校。全國一萬八千
 餘校。
 南滿州鐵道會社
 御指定品

新學期には!!!

最大 多數の實際圖畫教育家よりの
 信頼と御愛用を蒙り居れる

王様印製品の御使用を奨む

王様 水彩繪具 七色、十二色、十四色
 見本七色五十錢

王様 クレイヨン 八色、十二色、十四色、
 十六色、二十色、二十四色、
 三十色見本小型八色十
 七錢、八色二十五錢

キングクレイヨン 十色、十四色、二十
 六色見本十色三十三錢

注文殺到!!! 送品御申込順

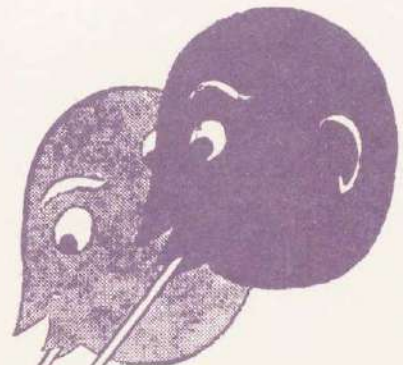
全國有名文具店書籍店にあり
 見本||振替又は郵券御利用下さい

製造元 合名 王様商會
 東京

發賣元 東京工業株式會社 總店 東京市本町一丁目二九番地 支店 東京市本町一丁目二九番地 支店 東京市本町一丁目二九番地

カルピス

めづかしいうまい 滋強飲料



（國産物産集）
 カルピス 衛生飲料
 糖に 婦人・少年
 結核素質者の
 營養と慰安

酒店・食料品店・雜店にあり

丸善インキ

丸善インキ
アテナインキ

私の好きな
お人形さん
ハイお手紙!!
ほーら随分
綺麗でせう
丸善インキで
書いたのよ、



(すまりあもに店具文もに店書のこど)

繪入童話集 ブウ太郎鍛冶屋

武井武雄先生著並書

四六判箱入美本 定價金壹圓五拾錢
本文約三百頁 送料金十五錢

(目次)

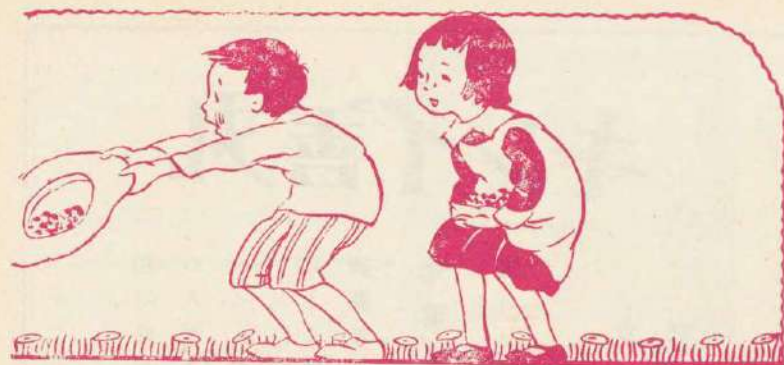
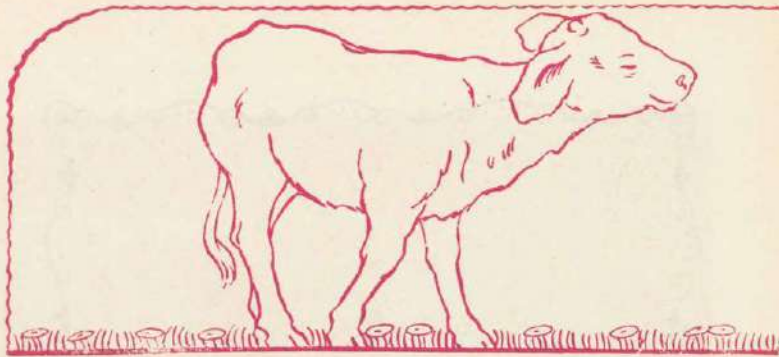
ブウ太郎鍛冶屋
蜂の着物の物
竹の着物の物
陸軍の大將
流石の将
眼の花
不朽の花
世間の花
又取つたよう
木取つたよう
其他の童話

武井武雄先生くらの面白い畫とお話を書く方はあります。い。こんな特色のある畫とお話を作る作家は、廣い世界を探し廻つても先づ無いでせう。全く日本の童話界の大きな誇です。その武井先生の最初の繪入童話集ですから、全くすばらしい本です。お話も畫も面白いこと面白いこと。全くの面白いもの揃です。箱入のそれはくきれいな本で、お話の外に美しい繪が澤山に入つてゐます。武井先生の畫とお話の好きなお方には是非読んでいただきたい本です。

振替東京東五九五六番
電話小石川三五八七番

金の星社

東京市外 一五三端



目次 第六卷・第五號

小鳥よ歌 (表紙・原色版) 寺内萬治郎
 魔女の住家 (口繪・三色版) 泰西名畫
 雲雀の水汲み (童話) (一) 野口雨情
 同作 (童話) (二) 小松耕輔
 疎忽の殿様 (童話) (六) 小島政二郎
 孫悟空と牛魔王 (童話) (四) 楠山正雄
 赤い靴 (童話) (五) 馬場孤蝶
 猿と海月 (見演劇) (三) 小寺融吉
 決死の使者 (長篇) (四) 西條八十
 ひよどり (推薦童話) (五) 立花信夫
 化けの皮を賣る人 (童話) (五) 柳井正夫
 ラム王の一生 (童話) (四) 武井武雄
 小船 (童話) (四) 若山牧水



獅を曳いて來た馬の話 (童話) (六) 中島孤島
 ホシローヒルム (蜂取りの巻) (漫畫) (六) 寺内萬治郎
 片目の猿 (推薦童話) (七) 久保一馬
 桃太郎後日譚 (童話) (七) 豊島百合子
 十五年漂流物語 (長篇) (八) 霜田史光
 水滸傳 (童話) (九) 宮島資夫
 姉と弟の唄 (童話) (四) 宇野浩二
 蝶々のお家 (童話) (三) 野口雨情
 火打箱 (童話) (三) 加藤朝鳥
 あまだ (童話) (三) 野口雨情選
 冬木 (童話) (三) 若山牧水選
 大根 (童話) (三) 山本鼎選
 唐津より大月まで (講演だより) (三) 齋藤 佐次郎選
 (金の星誌上演) (三) 沖野岩三郎

どちらが偉い? (三) 沖野岩三郎





魔女の住家
(泰西童話名畫その三)

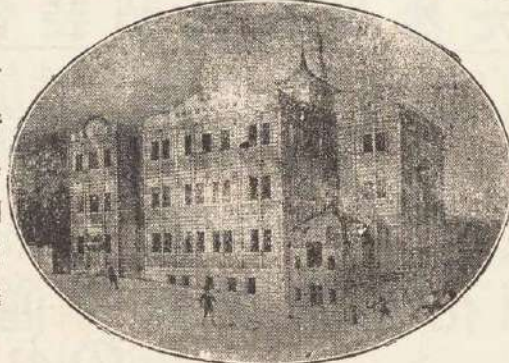
夜が明けても二人の子供がさやく眠つてゐるので、
魔女が口をモク／＼させ乍ら「これは美味さうだとい
つてるところ。」(グリム作「ヘンゼルとグレーテ」より)

◀ 良内書容は装禎常に良に書燦然あたる ▶

西條八十先生著	西條八十先生著	吉屋信子先生著	吉屋信子先生著	下田惟直先生著	水谷まさる先生著	西條八十先生著	水谷まさる先生著	吉屋信子先生著	落谷虹兒先生著	西條八十先生著	編樂報會十三年版
新し	虹兒畫譜	散文集	少女詩集	小曲集	詩集	詩集	詩集	詩集	詩集	詩集	年十三卷
詩の味ひ方	睡蓮の夢	憧れ知る頃	詩の作り方	靜かなる眉	寶石の夢	胸より胸に	花物語	花物語	噫	東京	音樂年鑑
苟も詩を讀み文學を語る者の机上に無くてならぬ書である	天才獨歩の版畫家として吾國に並ぶ者著者の第一版畫集	女流文壇のスターとして名聲高き女史の若き日の思ひ出集	初めて詩を作り小曲を書かむとする若き人々の爲めに生る	悲々想痕永遠に盡さざる優情典雅なる先生の處女小曲集	純情無垢なる乙女の真情を著者が獨特の麗筆にて歌へる者	少女畫報の主筆として名聲ある著者の第一詩集の哀艶書	女學生の讀まねば恥と迄評されてある天下唯一女性文學書	美しき文體と涙多き情操とは知らず誰人の袖をも濡さむ	百億の富と十數萬の人命とを失ひて得たる血と涙の結晶	尙も音樂を味ひ得る者の机上缺く可からざる至便至寶有	送料金十一圓
送料金十五錢	送料金十五錢	送料金十三錢	送料金十三錢	送料金十一錢	送料金十一錢	送料金十三錢	送料金十五錢	送料金十五錢	送料金十三錢	送料金十一圓	送料金十一圓

東南市保京神區六 行發社蘭交

■ 門龍登の年少青下天 ■



(圖計設所務事會本)

會長、正三位 尾崎行雄
 學監、理學博士 山内繁雄
 文學博士 遠藤隆吉

目下新學期開講中
 入會の最好期は今也!!
 講義録見本つき會則
 一申込次第無料進品す

大日本國民中學會あり!!

少年諸君意を強てし可也

諸君は學校萬能の迷夢より醒めなければならぬ、中等教育を受けるには必ずしも中學校に入るを要しない、諸君は居残りして中學校に學ぶことが出来るのである。
 大日本國民中學會の最善をつくせる講義録は學校以上の學校、教師以上の教師として諸君に臨むであらう。

本會十二年の試練と經驗とはこゝに次の如き
 独自の特色を獲得せり。

- 講義の新しいこと……模範的通信教授法として推展せらる。
- 會費の廉いこと……全科の學費一ヶ月分の遊學費にも達せず。
- 學制の正しいこと……正確に中學校令に従ひ全く中學校と同様也。
- 指導の良いいこと……通信教授に永き經驗を有するを以て指導懇切を極む。
- 教師の善いこと……中等教育者として名実ある實業家を選ぶ。
- 卒業の早いこと……僅か一ヶ年半の短日月にて卒業の榮光を得らる。
- 基礎の固いこと……創立以來二十二年國家的事業として一般に認めらる。
- 成功の確なこと……本會の門より出でたる成功者の多きこと詳ふを用ひず。

東京神田 大日本國民中學會
 振替 東京四二〇〇番 電話神田三〇〇二番 三〇〇三番
 口座 名古屋四二八〇番 特設牛込五〇九五番

刊新の社眉白

著生先豊尾長



△學校の補助教材としても、家庭の副讀本としても、面白い劇的な讀み物。
 △學校の學藝會、唱歌會、お伽會を初め、お誕生日やお休みに家庭で演出できる小さい劇。
 △教室演出にすぐ役に立つ、簡單で興味のある脚本。

曲譜、及び教室劇 (讀本教材の戯曲化) 演出しかた附

第一編 小 子 部 (小田島樹人先生曲)
 第二編 アルカスと熊 (小田島樹人先生曲)
 第三編 白うさぎ (近刊)

各册 金四十錢 送料四錢

草川信先 作曲 百田宗治先生歌

草川信童謠曲集第一集

定價 金五十錢
 送料 四錢

震災の爲めこの品を切るとこの出版を來

子供達の歌

第一編 赤い橋
 第二編 七色鉛筆
 第三編 脊くらべ

各册 金五十錢
 送料 四錢

發行所 東京市外下目黒町四六八
 振替 東京五四五九八
 白眉社



圖書館のない學校は眼玉の無い學校ほどつまらない學校です。子供に山ほどの良書を與へて下さいませ。秀才教育に絶対に必要なものは……オストワルド
本と暗示である

4	3	2	1
黄 金 島 (四版) 一八〇	小川未明著 飴チヨコの天使 (六版) 二〇〇 スチヴンソン著 赤阪清七譯	吉田助治譯 弓 張 月 (四版) 一八〇	赤阪清七著 星 の 國 (六版) 二二〇 (定價)
8	7	6	5
おたまじやくし (近刊)	水谷まさる著 マツチの兵隊 (印刷中)	河野伊三郎編著 童 銀 草 (印刷中)	吉田助治譯 西 遊 記 (印刷中)

野口雨情先生著作集 [近刊]

木の葉の使ひ

目下印刷中です。
四月下旬には各地書店にて賣つて居ます。

東京成城學校主筆 文學士 小原國芳著

版四十

自由教育論

四六判二八〇頁
定價一圓八十錢
送料十二錢

「自由教育」の主張は現代の日本教育を救ふべき何かを必ず有してゐる。ルツンネでも、エレンケイでも、ニーチェでも、グルリットでも、モンテッソリーでも、實に貴いものがあるでないか。何時までも、何時までも、古い固苦しい教育論に沈溺してゐては、子供達がホントに可哀さうでたまりませぬ。世の父兄の方、そして學校の先生方に本書を心からおすすめていたします。

野口雨情著 教育問題叢書 第五編

版九忽

童話と兒童の教育

頁廿百二版六四
錢十五圓一價定
錢八料送

次目
一 童話の使命 外國に於ける童話の一瞥 一七頁
二 童話の正風と正風とは何か 一八頁
三 童話の正風と正風とは何か 一八頁
四 童話の正風と正風とは何か 一八頁
五 童話の正風と正風とは何か 一八頁
六 童話の正風と正風とは何か 一八頁
七 童話の正風と正風とは何か 一八頁
八 童話の正風と正風とは何か 一八頁
九 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十一 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十二 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十三 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十四 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十五 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十六 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十七 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十八 童話の正風と正風とは何か 一八頁
十九 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十一 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十二 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十三 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十四 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十五 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十六 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十七 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十八 童話の正風と正風とは何か 一八頁
二十九 童話の正風と正風とは何か 一八頁
三十 童話の正風と正風とは何か 一八頁

發行所 東京市牛込區 山伏町一四 日達區 代書院 振替 口座 仙臺六一九二

◆ 版出院書アデイ ◆

雨情選作叢書

各大家の作曲入・定價各冊五十錢・送料各冊二錢

- 本居長世先生作曲
◇帝都復興の歌(童謡)
(帝都復興の歌・アンデルセン)
 - 中山晋平先生作曲
◇須坂小唄(民謡)
(須坂小唄・かなしい海)
 - 大和田愛羅先生作曲
◇雀遊(遊技唄)
(雀遊・南風北風)
 - 佐藤千夜子女史作曲
◇野の唄・海の唄(子守唄)
(野の唄・海の唄)
 - 藤井清水先生作曲
◇矢車草の咲く村(民謡)
(矢車草の咲く村・機織り虫)
 - 宮崎琴月先生作曲
◇二つの蝶々(童謡)
(二つの蝶々・皆さん明日また)
- 雨情選作叢書は野口雨情先生の童謡民謡中より素材、優麗の作品を撰ぎ、作曲大家の作曲を付して連続出版いたします。童謡と民謡の新しいパンフレットです。

野口雨情先生著 童謡教育論

定價四十錢
送料二錢

「童謡の正風」とはどんなものか、教育上だけの効果があるか、といふ事を正確に知るには童謡教育の創始者である野口先生の述べられた本書に依るより外にありません。四六版七十頁の小冊子であるが、極めて平易に誰にもわかる様に一々實例を擧げて説かれて有ります。

野口雨情先生著 童謡作法講話

定價四十錢
送料二錢

童謡はどんなふうにつつたらよいかといふことを、尤も親切に、尤も判り易く説かれたもので、直接先生の御話を目のあたり何ふ様な感じがする。

大庭三郎先生著 勤王の志士

定價五十錢
送料四錢

日本が今日こんなに盛く大きくなったのは、みんな維新當時の勤王家達の賜である。本書はその勤王家達がどうして働いたか、史実に基いて書いたもので、今日の思想問題からして是非みなさんに読んで貰うべきです。

島崎藤村著 第三十版 童話集 幼きものに (佛蘭西土産)

「父さんは自分の子供等のことを思出す度に、何か外國の方で見たり聞いたりした話を書いて、それを太郎や次郎に送りたいと思つて居ました。これがそも／＼この小さな本を——「幼きものに」を作らうと思ひ立つたはれです。幸に父さんも無事で三年目になつかしい日本へ歸つて來ました。よ、どつこいしよ。」と言はなければ持上らないほどの大きな旅の鞆の側で、二人の子供を前に置いて父さんはいろ／＼さまざまなお話を聞かせました。」(はしがきから)

この話が即ち本書です。どんなに面白く、ためになることが多いか、こんなに良い童話集を読むことが出来る皆さんは本當に幸福です。

佛蘭西式装幀 定價壹圓 郵税四錢

東京 東 南 東京 佛 蘭 西 街 町 實業之日本社發行 三 二 六 番 京 東 佛 蘭 西 街 町

發行所 東京 神田 錦町 一丁目 三三九 米本書店



金の星
五月號

すばらしい六月號の執筆諸先生(イロハ順)
 竹久夢二先生(繪畫)
 武井雄先生(繪畫)
 松政次郎先生(繪畫)
 森和虹先生(繪畫)
 小内治郎先生(繪畫)
 寺内萬治先生(繪畫)
 耳野三郎先生(繪畫)
 清水良雄先生(繪畫)
 鈴木徳先生(繪畫)
 鈴木徳先生(繪畫)
 山沖野虎市先生(童話)
 賀川豊彦先生(童話)
 野口雨情先生(童話)
 陶山篤太郎先生(童話)
 達崎龍先生(童話)
 小松耕輔先生(作曲)
 弘田龍太郎先生(作曲)



美し
お子様の方のおともだち
お母様方には
無くてならぬ
コンパニオン



△「ミソラ」には純真無垢な子供の軟かな心性にエンゼルのがやうな清い品性を植ゑつけんが爲につくられた子供雑誌。
 △「ミソラ」は言葉にも判の大ききにも影にも文字にも判の大ききにも一つ一つの細心な注意を拂つて編み込まれた子供雑誌

大阪市西區土佐堀二丁目二三
 ミソラ社
 毎月一回一日發行
 毎冊六分(六冊)前金二圓三十錢
 一ヶ年分(十二冊)前金四圓五十錢(郵税共
 一冊定價金四十錢(郵税一錢五厘))

雲雀の水汲み

小松耕輔作曲

J-138

First system of music on page 10. It consists of a vocal line in treble clef and a piano accompaniment in grand staff (treble and bass clefs). The key signature has two sharps (F# and C#), and the time signature is 2/2. The piano part includes a *p* dynamic marking and a series of asterisks under the bass line.

Second system of music on page 10. It continues the vocal line and piano accompaniment. The piano part includes a *p* dynamic marking and asterisks under the bass line.

Third system of music on page 10. It continues the vocal line and piano accompaniment. The piano part includes a *p* dynamic marking, a *dolce* marking, and asterisks under the bass line.

First system of music on page 11. It continues the vocal line and piano accompaniment. The piano part includes a *mf* dynamic marking and asterisks under the bass line.

Second system of music on page 11. It continues the vocal line and piano accompaniment. The piano part includes a *p* dynamic marking and asterisks under the bass line.

Third system of music on page 11. It continues the vocal line and piano accompaniment. The piano part includes a *f* dynamic marking and asterisks under the bass line.

雲雀の水汲み

野口雨情

雲雀の水汲み

お日さま高いぞ

さつさと

水汲め

水なし畑に

畑がなるまで



さつさと

水汲め

お日さま高いぞ

お日さま高いぞ

さつさと

水汲め

水なし畑に

畑がなるまで

さつさと

水汲め





疎忽の殿様

小島政二郎

昔、大層疎忽な殿様がお出でになりました。ところが、家老に田中三太夫といふ侍がりましたが、その方も至つて疎忽者でした。

或日のこと、殿様はお庭を眺めながら、ボカ／＼と春の日の當つてゐる築山、泉水、芝生の有様に目を慰めて入らつしやいました。

「こりや三太夫、築山の脇に松があるであらう。近頃枝ぶりも整ひ葉も茂つて形が面白くなつてまゐつたが、どうも秋の月見の節には折角の月を隠して興を殺ぐ。泉水の傍に引きたいと思ふが、いかがなものであらうな。」

「一段とお庭が引き立つことと存じます。しかしながら、あの松はお父上様が御秘蔵の一つでござりました。若し移し植ゑましたるため、枯れるやうなことがござりますると、お父上に對し御不幸の罪は逃れられまいと存せられます。一應植木屋を呼び出し聞き糺した後がよろしからうと存じます。」

「尤もぢや。早速尋ねて見よ。」

「はつ。實はこの兩三日お庭のお手入れに植木屋が詰めてをります。」

「さやうか。然らば予が直々に尋ねるであらう。植木屋をこの庭先へ呼べ。」

その日は、植木屋の八右衛門といふのが病氣のため、悴の八五郎といふのが代つて大勢の弟子を連れて仕事に來てゐました。早速この八五郎がお庭先へ呼び出されました。

「どうぢや、八五郎、枯れるか枯れぬか。」

かういふ殿様のお尋ねに、八五郎が答へようとする、三太夫が傍から

「これ／＼八五郎、直に申し上げるのは甚だ恐れ多い。手前が取り次いで申し上げるから、思ふ旨を申せ。」

殿「これ／＼三太夫、取り次ぐに及ばん。直に申せ。」

三殿様の御意ぢや。さあ、お答へ申し上げる。丁

寧に申し上げるのだぞ。」

「へ、宜しうございます。一生懸命にやります。」

さて申し上げ奉ります。お築山のお松様を、お泉水様のお脇へ、お引き奉りまして、お枯れ遊ばすかお枯れ遊ばさぬかとの仰せ様でございますが、それはその、手前の方でお掘り申して、お太い所へはお錫様をお巻き申しまして、お引き遊ばしますれば、お泣き遊ばす氣遣はございませんでござります。へえ、恐れ入り奉ります。」

殿「なんだかさつぱり分らん。三太夫、その方が兎や角申すからいかん。それではかう致せ。苦しいないから、仲間と話す時のやうな言葉で勝手に申して見よ。」

八「恐れ入り奉ります。お分りにならないのは御尤もで……。云つてゐる當人にさへ分らないのですから……。ぢや御免蒙りまして、ござり奉るは抜きにして申し上げます。」

殿「よし、申して見よ。」
 八「私の方も商賣でございます。枯らすまいと思へば幾らでも枯らさないやうな工夫がございます。一月も前から油柏の五六升も入れてまして、小太い處へ



は鯛を巻き附けてまして、それからこつちへ引きます。これなら大丈夫枯れる氣遣いませぬ。きつとお受け合ひ致します。」
 殿「うん、枯れぬか。よい。愛い奴ぢや。引け引け。」
 八「よろしうございます。確にお引き受け致しますた。」
 殿「時に八五郎、その方はさゝ(酒)はどうぢや。」
 八「なんでございますか。」
 殿「さゝは食べる(飲む)か。」
 八「へえ、私は植木屋ですが、まだ笹は食べたことございませぬ。」
 殿「さうではない。酒を飲むかと云ふのぢや。」
 八「酒ですか。酒なら目があります。」
 殿「酒に目のないのは當り前ではないか。」
 八「イエ、さうではございませぬ、酒なら大好きだと申し上げましたので…」



殿「大好きといふことを、下々では目がないと申すか。ところで、お前一人ではあるまいな。」
 八「へエ、あつちで大勢丸くなつてをります。」
 殿「八五郎皆を呼べ。三太夫、皆の者に酒を取らせよ。」
 三太夫はびつくり仰天して、
 「恐れながら申し上げます。かやうな輩を大勢お招きになつて御酒宴などは、以ての外のことと心得ま

す。」
 八「構はん構はん。捨て置け。今日は無禮講ぢや。予もここにて皆と共に一獻致さうと思ふ。用意をせよ。」
 三太夫が幾らお留め申してもお聞き入れがなく、とうとう大名の殿様が植木屋相手にお酒宴をお始めになりました。
 ところへ、三太夫の家から急な用事が出来たからと云つて迎ひの使者が来ました。で一應殿様に伺ふと、
 「苦しうない、急いで行つてまわれ。用済み次第、すぐ引き返して来いよ。」と、お許が来ました。で、急いで歸つてみると、國表から急飛脚で赤紙附きの書面が届いてゐました。
 「何事であらう。」と、急いで開いて見ましたが、「どうもこれは變だ。文字が少しも分らん。」
 すると、奥さんが傍から

「あなた、それは裏ではございませんか。」

「成程、裏であつた。うん、これなら讀める。ナニ？
一つ、火急の事、前文御容赦下さるべく候。お國表に於て、殿様御姉上様御死去遊ばし、此段御報申上げ……。こりやア大變なことぢや。それにも拘はらず、殿様には植木屋共を集めて御酒宴などを催して入らつしやる……。早返御答へ申し上げねばならん。それにしてもこの姿では出られん。服を改めて出る。奥、何を出してくれ。」

「なんでございますか。」

「その何ぢや。これでは出られんと云ふに、分らん奴ぢやな。それ、これぢや、これぢや。」

手真似でやつと分つた奥さんが

「結、でございますか。」

「それ……。早く出せ、早く。」

大慌てに慌てて支度もソコソコに、三太夫は改めて殿様の御前へ出ました。

「ハハツ、申し上げます。お國表より飛脚がまゐりましたにつき、人前にては申し下げ兼ねます儀がございます。憚りながらお人拂ひを願ひたう存じます。」

「さやうか。これ……。皆の者遠慮をせい。」
三植木屋共、立て立て。

みなく、へえ。」

折角仕事が出来てお酒の飲めるのを喜んでゐた植木屋共は、残惜しさうにお庭を出て行きました。

「三太夫、近う進め、心許ない、飛脚といふはなんぢや。」

「ハハツ、なんとも申し上げやうもございません。

お悲しみお察し申し上げ奉ります。」

「悲しみとはなんぢや。」

「只今申し上げました儀で……」

「まだ何も云ひはせんではないか。」

「あ、さやうで。成程、まだ申し上げませんでし

た。外のことではございません、この度お國表に於

てお殿様お姉上様御死去遊ばされたといふ書面が届きました。」

「なんぢや。姉上御死去ぢや。さやうか。成程、これは悲しいことぢや。知らぬこととは云へ、酒宴などを催してゐて相濟まんことをした。」

「お悲しみの段お察し申し上げます。この上は皆の者に申し渡して、この上屋敷は勿論のこと、中屋敷、下屋敷へも停止を申しつけませう。」

「憤み且つ質素にしろと申せ。」

「ハハツ。」

「時に三太夫、姉上は何日の何の刻に御死去であつた。」

「ハハツ。」

「何日の何の刻であつた。」

「餘り慌てましたものですから、ついその所を見る暇もなく罷り出でましてございます。」

「白痴者め。早々調べてまわれ。」

「ハハツ、面目次第もございません。」

冷汗をかくて我家へ歸つて見ると、さあ大變、今度は肝腎の書面がどこへ行つたか分らなくなつてしまひました。

「奥、先刻の書面はいかに致した。」

「私は存じませんが……。あなたがお出ましになつてからここを片附けましたが、書面らしいものは見當りませんでした。」

「あれがないと大變だ。そこらを探して見てくれ。」

「どうもございません。」

「戸棚をあけて見ろ。」

「いえ、戸棚へ入れる譯はございません。あなた懐にでも入れていらつしやりはしませんか。」

「ナニ懐？ あ、あつた、あつた。——一つ、火急の事、前文御容赦下さるべく候。お國表に於て御貴殿お姉上様……。オヤ、お國表に於て御貴殿……」

…御貴殿…こりやア大變なことが出来た。」
奥さん「どうなされました」
「これ見い。お國表に於て御貴殿お姉上様とあるのを、殿様お姉上様と申し上げた。」
「それは飛んでもない疎忽をなさいましたもので：



「疎忽では濟まん。と云つて、只今となつて、貴殿を殿様と讀み違へたとは申し上げられん。この上は潔く切腹して申し開きを致さう。用意してくれ。」
「はい、しかし、私考へまするに、こゝは慌てるどころではないと心得ます。無闇に御切腹を遊ばして、大死になるやうなことがあつてはなりません。これはやはり正直に、あなたがいつもの疎忽で間違へたと申し上げた方がよいと存じます。間違は百日位の御盤居で済みます。また殿様が御立腹のあまり、切腹とかお手討とかいふことになれば致し方がございません。その時こそ、潔く命を召しませ。」
「成程、それに違ひない。では、一つきまりの悪いのを我慢して一應殿様に申し上げて見よう。」
「それがよろしうございます。」
奥さんに勧められて三大夫は、もう一度御殿へ出ましたが、今度はノロノロイヤ〜といふ歩き方で



した。殿様はお待ち兼ねで
「見てまゐつたか。何日であつた。」
「私儀非常なる疎忽を致しまして、なんともお詫の申しあげやうもございません。」
「なんと致したのだ。」
「實は書面をつくつて見ましたところ、殿様御姉上様ではなく、貴殿お姉上様と認めてございました。」

「ナニ、貴殿お姉上様とあつたと、明いた口がふさがらぬわ。無禮者め。外のことには違ふぞ。武士が左様なことを取り違へて相濟むと心得をるか。」
「なんとも申し開きの言葉もございません。このヒはお手討なりとも切腹なりとも仰せつけ下さいませう。」
「憎い奴ぢや。その方の如き奴は手討には致さん。切腹申し附ける。」
「ハハッ、有り難き仕合せに存じます。」
お受けをして三大夫が立上らうとすると、殿様は「こりや〜、私宅へ立ち歸るな。予が面前に於て切腹いたせ。」
三大夫名譽に思つて
「ハハッ。」
と、暫く何か考へて入らした殿様が、ふいに「三大夫、待て待て。切腹には及ばんぞ。よく〜考へて見たら、手には姉がなかつた。」(をはり)



孫悟空と牛魔王

楠山正雄

一四

前説の櫻機。孫悟空は芭蕉扇をかりに羅刹女のところへ行つて、漸く借りて来たところが、にせ物だったので、それで煽ぐと火焰山の火は却つて大きくなつてしまひました。と其處へ、山の神が現れて、大力王のところへ頼みに行けと教へてくれました。

さて山の神が火焰山の火を静めるには、大力王の力を借りなければならぬといつた、その大力王といふのは誰のことでしょうか。よく／＼聞いてみるとやはり牛魔王のことをいふので、何でも火焰山のまはり八百里は牛魔王の領分のやうになつてゐて、山

の神でも川の神でも人間でも虫けらでも獸でも、牛魔王の威勢にかなふものはない有様でした。それでみんな大力王と崇めて、ひたすら御機嫌を損はないやうにびく／＼してゐるものゝ、ほんたうは火焰山の火と一しよに牛魔王の威勢の衰へることを、誰一人望んでゐないものはないといふのです。

孫悟空はその話を聞いて、

「するとこの山の火も牛魔王がまいなひや貢ぎ物をみんなから取り立てるために、わざとつけた火だらう。」とたづねますと、山の神はおそる／＼、

「ところがどうも申し上げにくいのですが、これは悟空さん、もとあなたがおつけになつた火ですよ。」と、いひました。

悟空は真赤になりました。

「でたらめをいふな。このよばよばぢいめ。」

「まあきつとおおこりになるだらうと思つて遠慮してゐたのですが、でたらめではない、ほんたうにこの火は五百年昔あなたが天空の上の天宮へ上がつて太上老君が不老不死の靈藥を練つてゐるところをのぞかうとした時、そゝつかしく火の真赤におこつてゐる爐を足にひつかけて、ひつくりかへしたことがあるでせう。その火が下界へ飛んでこの山の上に着ると、みる／＼こんなに燃えひるがつて八百里の火の山になつてしまつたのですよ。わたしはその時分太上老君に使はれてゐた下僕でしたが、爐の番をして居眠りをしてゐる間にあなたに爐をひつくりかへされたお蔭で、天宮を追ひ出されてこの山の神に

なつてゐるのです。」

かういはれると、悟空も思ひ當ることがあるので、半信半疑ながら、

「そんなこともあるかも知れないが、それをまたどうして牛魔王がこの山の王さまのやうな顔をしてゐばつてゐるのだ」といひました。

「これは牛魔王が芭蕉扇といふ不思議な寶物を持つてゐて、火焰山の火を消したりつけたり自由自在にする大威力があるので、爲方なしにみんな大力王と崇めてゐるのです。」

「その芭蕉扇ならもう牛魔王の上さんの羅刹女のところへ借りに行つたのだが、とんだ偽物をつかまされてひどいめに會つた。どうかして本物を手に入れる工夫はないか。」

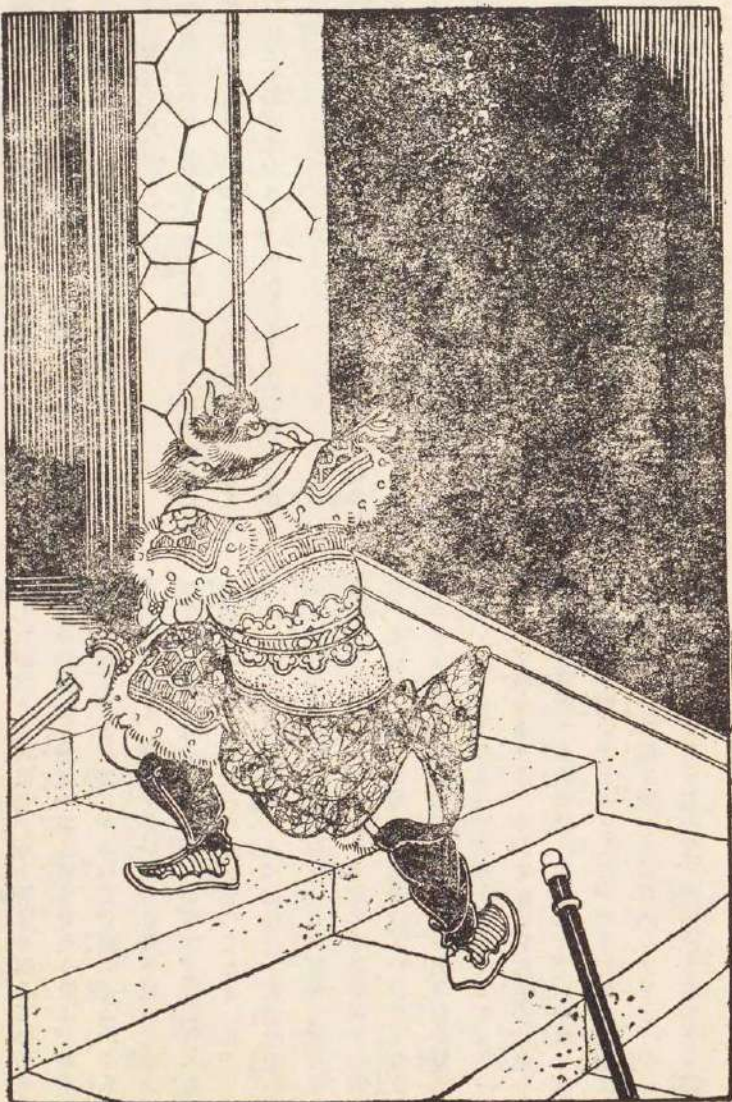
「ですから大力王の牛魔王に頼まなくてはならないといつたのはそこですよ。あなたは牛魔王とは昔義きやうだいの好みを結んだ事もある仲だといふでせ

う。これは牛魔王によく頼んで、その手で芭蕉扇を出して貰ふやうにしなければ、どうしてあの氣強い羅刹女が、一通りな事で貸す氣づかびがあるものですか。」

そこで悟空は、ちかに牛魔王にぶつかつてみる決心をして、三歳のことは山の神に頼むと、すぐ勦斗雲に乗つて出かけました。

二

山の神に聞いたところでは、牛魔王はこの節では始終こゝから南へ三千里離れた積雷山摩雲洞といふ所に玉面公主といふ若い牝狐の精と一しよに住んでゐるので、めつたに羅刹女の所へは歸つて來ないといふ話でした。そこで教へられたとほり三千里たゞ一飛びに積雷山へとんで行つて、雲をおりて青々と深い松林を入つて行きますと、その奥に石の門があつて、なるほど「積雷山摩雲洞」の六字が額にかいてありました。見ると門の前に若いきれいな女が手



に花籠を持つて蘭の花を折つてゐました。悟空が傍へ寄ると、女は何氣なく振り返つて見ました。すると恐しい辨面の和尚がそこにぬつと立つてゐたのでびつくりして、花も何もはふり出したまゝ中へ駆けこんでびたりと門をしめてしまひました。

女がはひると間もなく牛魔王は太い鐵の棒をひつさげて洞の外へ出て來ました。そして悟空の挨拶も碌々聞かずに、例の息子の紅孩兒を殺した恨みをいひ出して、いきなり鐵の棒をふりまはして打つてかかりました。これを悟空がやつとなだめて、そのすきにやつと芭蕉扇のことをいひ出しますと、こんどは悟空がこの山を奪ひにでも來たと思つたのでせうよけいひどくおこり出して、遮二無二打つてかゝります。悟空もしかたがないので諦めて相手になつてわたり合ひましたが、小半時間戦つても勝負が見えません。お互にこのをさまりをどうつけたものかと持てあましてゐますと、洞の上の山で聲がして、

「牛魔王、大王がお待ちかねです。どうかお早くお越し下さい。」といひ、した。

牛魔王はこの聲が耳に入ると、急に鐵の棒を引いて、悟空に向ひ、

「おい悟空、おれは友達のところへ呼ばれてゐるのだ。ちよつと行つて来るからその間待つてゐてくれ。」といひすてたまへ、石門の中へ入つてしまひました。

さて悟空は相手に逃げられたので爲方なしに勝負をやめて、その山にのぼつて様子を見てゐますと、間もなく牛魔王は乗りつけの碧水金睛獸に跨がつて、西北の方向に向つて風のやうに飛んで行きます。

悟空は上で、

「はてな、あいつの友達といふのはどんなやつたか見てやらう。牛の友達では熊か猪位なものだらう。」と思ひながら、自分もやはり一陣の風に化けて跡を追つかけて行きました。間もなく高い山の上に着き

はありません。その時どこからともなくねむいやうな音楽が聞えました。

悟空はそろ／＼座敷に上がつてみると、正面の床の間には牛魔王があぐらをかいて、お酒を飲んでゐました。それに向ひ合つて坐つてゐる主人は何かと思ふと、これは年を取つた龍王でした。そのまはりには老龍王の息子だの娘だの孫だのが、腰元の水へびや、大小の龜などの間に交つて、お酌をしたり、歌をうたつたり、踊りををどつたりしてゐました。悟空は一通り見てしまふと、さつ／＼と見つからない中に引き返さうとしました。するとその時そこにゐた小さい龍の子供が、

「やあ、へんな蟹がゐるよ。」といひました。龍王はこれを知ると、振り返つて、

「うん、見慣れない蟹がゐる。あいつをおさへろ。」と大きな聲でいひました。その聲で大せいの龍の子供たちがばら／＼と追つかけて來ました。

ましたが、そこにはしいんと静まり返つていつどこへはひつたか牛魔王の影も形も見えません。おやと思ひながらもとの姿にかへつて、山の中ふかく入つて行きますと、碧玉を砕いたやうなきれいな水が溜つて深い淵になつてゐる所があつて、その岸に「亂石山碧波潭」とはつた石の柱が立つてゐました。

「は、あ、やつこの中へ入つたな。」と悟空は呟いて「牛魔王の友達といふのはどんな仲間かと思つてゐたら、水の底に住む古龜か水蛇の手あひひであつたのだ。とにかく入つて見てやらう。」といひ／＼呪文を唱へると小さな蟹になりました。そして身を踊らすのが早いか、ばちやんと水の中にとびこんですん／＼もぐつて行きますと、やがて水の底に近く水晶のやうにすき通つた高樓の前へ出ました。門の外には碧水金睛獸が驚いておりました。こゝだなど悟空はうなづき／＼門の隙き間からはひ込みますと、中にはもう水はまるでなくなつて、陸の上とちつとも違ひ

悟空はあわて／＼にげ出して、門の外まで來ると、ほつと息をつきました。そして

「どうもいたづら小僧につかまるのもいゝが、うつかり正體を現すと厄介なことになるからな。」といひながら、ふと見ると、さつ／＼の碧水金睛獸がまだそこにつながられてゐました。悟空はその時ふと思ひついたことがあるやうに「妙、妙。」と叫んで胸を叩きました。そしていきなり金睛獸の背中に跨がつて水の外まで乗り出すと、すぐとこんどは牛魔王の姿に變つて、まつ／＼に羅刹女のゐる翠雲山芭蕉洞を指して走らせました。

三

羅刹女はめづらしく牛魔王が來たといふ腰元の知らせを聞いて、半分は喜び半分は疑ひながら急いで出て見ました。するとなるほど牛魔王がおなじみの金睛獸に乗つてゐるので、安心すると一しよに大元氣で手を取らないばかりにして奥へ連れこみまし

た。そして坐るとさつそく。

「まあ、お久しぶりですね、今日はどういふ風の吹きまはしでお出でになったのですか。」と、いひました。

するとにせ牛魔王の悟空は、おちつき拂つて

「いや来よう来ようと思ひながら、つい毎日のやうに方々の友達に呼ばれておそくなるので来られなかつたが、話で聞けばこの頃悟空のやつが唐の三藏法師のお供をして、火焰山の近くへ来てゐるさうだ。ところで火焰山を越えるにはどうしても芭蕉扇を借りに来るに違ひない。もし来たらすぐ知らせせておくれ。ひつつかまへて伴の紅孩児の仇を打つてやらなくてはならない。手おくれにならないやうと思つて、それでじつはげふやつて来たのだがね。」

羅刹女は聞くと、急に涙をばろくこぼしながら、さもなくやしさうに、實はきのふその悪猿がもうやつて来て、芭蕉扇をねだつた上に、貸さないといふとおこつてうつつかゝつて、もう少しで命もあぶない

所であつた。こんなとがあるから、牛魔王のゐないのがよけい心細い。」といふ話をしました。

悟空のにせ牛魔王はさも驚いたやうに、

「そしてどうした、芭蕉扇はあの悪猿に取られやしまいね。」とさも心配さうにたづねました。すると羅刹女は得意らしく笑つて、

「まさかいくらあなたがお留守でも大事な寶物を取られやしません。その代りにせ物をくれてやつて、やつと追ひ返したのですよ。ほら本物はこのとほりちやんとしまつてあるから御安心なさいまし。」といつて、自分の口に手を當てて見せました。

すると、にせ牛魔王は不思議さうな顔をして、

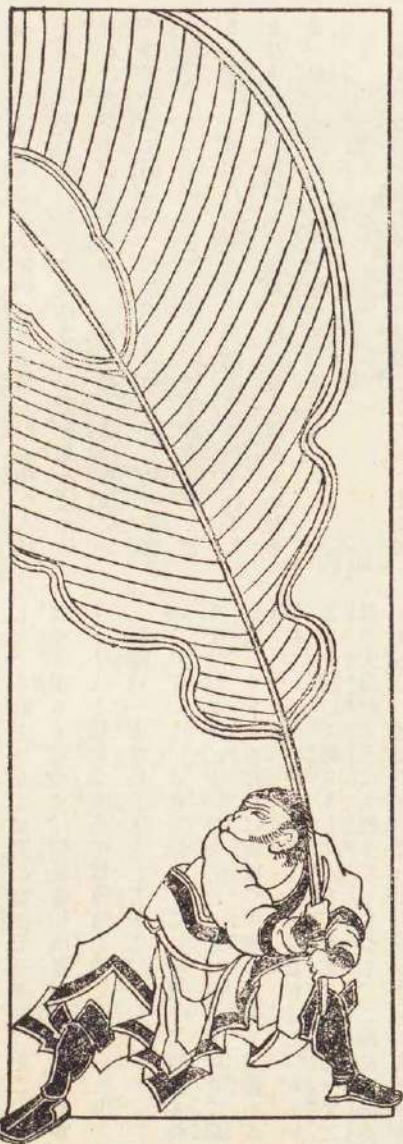
「うんまあ、それはよかつた。だがお前しまつてあるとこを忘れやしまいね。」とかういつて相手を釣り出さうとしました。すると羅刹女はこれも妙な顔をしながら、

「おやあなたこそ忘れてゐるのではありませんか。

今わたしが口に手を當て、見せたのがわからなかつたの。いつだつてわたしはこゝへしまつて置くのですよ。」

かういひくく口の中から小さな銀杏の葉つばのや

けて、これもよけい妙な顔をしました。でも飽くまで牛魔王だと思ひこんでゐる上に、久しぶりで合つてのばせてゐるところですから、ついわけもなく上機嫌に笑ひながら、



うなものを吐き出しました。悟空はよけい不思議さうな顔をして、思はず、

「こんな小さなもので八百里の火をどうして煽ぎ消すのだらう。」と呟きました。これを羅刹女は聞きつ

「まあ久しく外へばかり出ていらした間に、あなたすつかり家のことを忘れてしまつたのですね。だつてその扇の柄についた紐の七本めの糸を左の親指でおさへて、一聲「咽喉呼吸吹呼」と唱へれば、す



靴い赤

(下)

蝶孤場馬

カアレンは右の方へ動かうと思ひました。すると、靴の方でカアレンを左へとつれて行きました。又、カアレンが部屋を上方へと踊つて行きたいと思ひますと靴の方がカアレンを下方へとつれて行くのでした。

カアレンが前へと踊つて行かうとしますと、靴の方がカアレンを後へとつれて行きました。戸口へと階段を降りて街なかを通つて市の門を出て外へ——暗い、物凄森へと、カアレンをつれて行くのでした。

赤い光が木立のなかで見えました。夜霧を照す月の光に違ひないのだと、カアレンは思つたのです。けれども、いへ、それは長い赤い髯の年老つた兵士でし

ぐ一丈二尺の長さになつて八百里の火位一度煽げは消えてしまふのぢやありませんか。」と、これまでうっかり話してしまひました。

悟空はこれだけ聞くとつい大きな聲で、「しめた。」と叫ぶが早いか扇を手早く口の中へ入れました。そして、羅刹女おれさまの姿を見ろ。」といひひ飛び上がると思ふと、もとの猿の本相にかへつて一散に洞の外へにげ出して行きました。羅刹女は「あつ。といふなり、追つかけて行きますと、もうどこへ行つたか雲の中に悟空の姿はかくれてしまひました。羅刹女は呆れてはかんと口をあいたまま、いつまでも空を眺めてゐました。

四

さて悟空は一息に空の上へ飛び上がつて、とある山の上まで來ると、「やれ〜汗をかいたぞ、どれせつかくの寶物がこんどもにせだどつまらない。一つためして見てやらう。」扇を口から吐き出してそこで

悟空はまづさつそく左の親指を扇の紐の七本めの糸にかけて、一生懸命覚えておいた呪文呪文を唱へますと、扇は見る／＼大きくなつて、とうとう一丈二尺の恐しく大きな扇になつてしまひました。それと一しよに寶の功德でせうか、そこらがばつと明るくなつて、何ともいへない神々しい香がすう／＼と扇から立ちのぼりました。

悟空は一人にこゝしなから、

「これでいゝ。これでいゝ。これではなくてはほんたうではないぞ。」といひました。それはいゝがさて扇を大きくする事だけは教はつて來たものゝ、縮める事はついうつかりして聞くことを忘れましたからいよ／＼擔いで歸らうとすると、重さも重しい一丈二尺の大扇がどうにも扱ひにく／＼つて、これには悟空も當惑しました。でもほかにどうしやうもないので「やれ〜爲方がないどうにかなるだらう。」とその大きな扇をえいやつと肩にのせて、うんすん、うんすん擔いで歸つて行きました。(つゞく)

た。兵士は其所に坐つて、カアレンを見て頷きながら、

『まあちよいと見なさい、何といふ可愛い、踊靴だらう』

さう幾度も云ふのでした。

カアレンはひどくこはくなつてしまひました。その赤い靴を脱ぎ捨て、しまはうとしたのですが、何うしたのか、足へしつかりとくつきいてしまつて、何うしても脱げませんでした。カアレンはその靴を捨てるわけには行きませんでした。まるで足と一つものになつてしまつたやうで、何んなにしても脱げなかつたのです。

またカアレンは何處までも踊つて行かないではおられませんでした。野や牧場を越え、雨のなかも、日の照るなかも、晝も夜も、何處までも何時までも踊つて行かなければならなかつたのです。さうです。夜、それが一番つらかつたのです。

れて行つてしまふのだつたからです。

或る朝、靴が或る家の戸口へとカアレンをつれて行つたのですが、その家は確かにカアレンの知つてゐる家でした。小さいカアレンにはほんとに親切にしてくれた年老つた奥さんの家だつたのでせうか？ え、それはさうでした。けれども、神様がその奥さんを天國へおつれになつたので、もうその年老つた奥さんはその家にはゐませんでした。

それで、カアレンはひどく淋しい心持がしたので、もう、可哀いさうに、カアレンは天にも地にも家なしになつてゐたのです。

カアレンは暗い夜のなかをやつぱり踊つて行きました。荊、茨のなかを、靴がカアレンを踏らせて行きました。カアレンの足は、血が流れて、痛みだしたのです。

荒野を突き切つて踊つて行くうちに、たうとう小さい小舎へと行きかかりました。

何れ程カアレンは休みたかつたこととせう。カアレンは會堂の開いた戸口の前を踊つて通りました。

肩から足へと翼の落ちてゐる、長い白い上衣を着て天の使が其所に立つてゐるのを、カアレンは見ました。その天使の顔は厳格な恐い顔でした。手にはざら／＼光る劍を持つてゐました。

『お前が蒼くなり、寒くなり、瘦せてしまふまで、何處までも踊つて行け。家の口から戸口へと踊つて行つて、高慢で、虚榮心の強い小兒のゐるうちでは、小兒等がお前を見て恐れるやうに、其所の戸を叩け』

さう天使は大きい聲で云ひました。

『お慈悲、何うぞお慈悲に助けてください』

カアレンはさう大聲で云つたのですが、天使の返答は聞くことができませんでした。靴がカアレンをば、淋しい野へと、暗い物凄森へと、ドン／＼つ

カアレンはその小舎の窓硝子を叩いて、

『出て来てください、出て来てください。あたしの靴は、あたしを此所へ長くはとませられてくれませんか』

と、大きい聲で云ひました。

爺さんが小舎の戸口へ出て來ました。

『だが、お前は俺を知つてゐるかね』

さうその爺さんはきいて、

『俺は首斬役人なんだぞ、俺は悪い人間の首を斬り落すのだ。見ろ、俺の首切り斧はふるへてゐるぞ』

『何うぞあたしの首は斬らないでください。あたしは生でゐて、罪を悔改めなければならぬんです。赤い靴ごとあたしの足を斬つて下さい』

さうカアレンは云ひました。

それから、カアレンは自分の罪を残らず其首斬役人に話しました。首斬の老人は赤い靴ごとカアレンの足を斬つてしまひました。さういふ風に斬られて

しまつてさへ、靴は小さい足首の附いたまゝで、野を越え、物凄しい森へと、踊つて行つてしまつたのです。けれど、首斬の老人は、カアレンの爲めに木の足を一對拵しらへてくれ、小さい撞木杖を二つくれました。カアレンはそれで静な荒野を越えて行きました。

(二)

其所で、カアレンは「あたしがあの赤い靴のお陰で苦しむのも、もうこれでおしまひだらうね。會堂へ行つて、善い人間になつたあたしをもう一度皆なに見てもらはうや」と、思つたのです。

カアレンは生れた村の會堂の戸口へ行きました。ところが、其所に、カアレンの行かうとする眞ん前



で、赤い靴がドン／＼踊つてゐるのでした。カアレンは吃驚してこはくなつて、直ぐ引つ返へしてしまひました。

その後一週間といふもの、カアレン

は泣いて暮らしたのですが、日曜が來ますといふと、「もう十分苦しむもするし、悲しみもしたんだから、會堂で居心地好く坐つてゐる人たちの誰にも負けない善い人間にあたしはなつた筈なんだわ」

かうカアレンは思つたのでした。

それで、カアレンは勇氣を振ひ起して、會堂の入口の方へ行きました。

ところが、やはり、カアレンの行くて下赤い靴が踊つて居るのでした。

其所でカアレンは、ひどくこはくなつて、引つ返したのですが、心の底から

「あたしはほんとに罪を犯したんだわねえ」

と、しみん、身をへりくだつて、云つのです。カアレンは牧師さんの家へ行つて、何でもいゝから使つてくれと頼みました。善い人々のなかで働いてくらせさへすれば、それが結構なので、給金なんぞは何うでも宜いのだとカアレンは云ひました。

で、人々はカアレンを可哀さうだと思つて、住むとこと食べ物と興へてくれました。

カアレンはそれを有りがたがつて、一生懸命に働いたのですが、直きに皆なの小兒がカアレンを愛するやうになりました。

けれども、小兒たちが綺麗な上衣だの、恰好のいい靴などの話をするのを聞きますといふと、カアレンは悲しさうに頭を振るのでした。

やがて又日曜が來ました。牧師さんの家内らうが會堂へ行きました。カアレンも一緒にへ行くと云はれたのですが、カアレンは眼に涙を浮べて、自分の撞木杖を指さしました。

自分は家にゐるのだと、カアレンは云つたのです。

(三)

みんなが行つてしまひますと、カアレンは自分の小さい部屋へ行きました。それはほんとに小さい部



屋で、唯だ寝臺と椅子が一つあるきりでした。

カアレンは跪きました。そして、祈つてゐますといふと、窓からそよ〜と吹き込んで来る風が、風琴の調を傳へて来るのでした。

日の光が部屋へとさし込んで来ました。おや、不思議だと思つて、見ると、カアレンの直ぐ傍に白い上衣を着た天使が立つてゐるのでした。

その天使は手にギラ〜する剣を持つてゐるのであります。唯薔薇——赤い、赤い薔薇の花の一つばい附いた緑い枝を持つてゐるのでした。

天使はその枝をカアレンの小さい部屋の天井へ觸らせました。するとその天井がすうつと上へ高く高くあがつて、見えなくなつてしまつて、上を見上げると、黄金の星の輝やかな光がカアレンに見えました。

天使は又緑の枝を壁へつけました。カアレンの小さい部屋がだん〜廣くなつて行きました。風琴も、

會堂の壁にかゝつてゐる繪も、神壇の前に立つて居る人々も、皆カアレンに見えました。

で、カアレンは、其方の會堂のなかに坐つてゐて、小兒たちが皆カアレンを見上げて、カアレンの方へと頷いて、

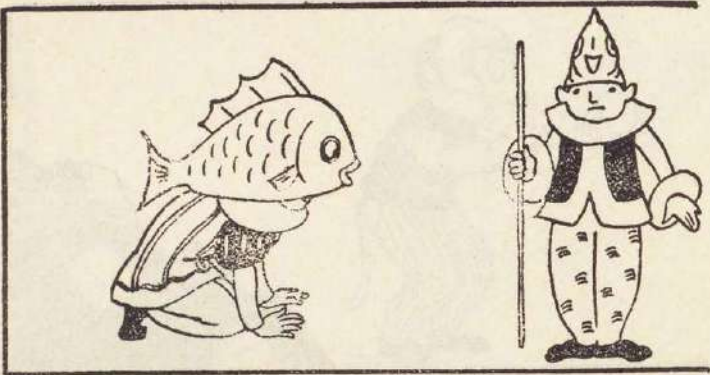
「お前はよく来たね、カアレンさん」と、云つてゐるのでした。

其所で、又風琴の音が會堂ちうへ鳴わたり、又小兒たちの好い清い聲が立ちのぼるのでした。

日光が窓からカアレンの身體へとさしました。カアレンの心は、日光と喜悅が餘りに充ちたので、破れてしまひました。で、日光のなかに浮んで、カアレンの靈魂が、神の樂園へと高く〜漂つて行きました。

で、赤い靴のことなんぞを訊く人は誰もありませんでした。

(をばり)



王様。あゝ女王の病氣はどんな薬でもなほらないのか。龍宮中のありとある醫者（いしや）を呼んで工夫（くふう）させても、どうしても直る（なほ）見込み（みこみ）がないのか。あの苦し（くるしみ）さうな顔色（かほいろ）や、悲（かな）しうなため息（ためいき）をそばで見（み）てゐると、おれも生きてゐる心（こころ）がしない。
 魚一。恐れ多いお言葉（ことば）でございませう。
 魚二。私（わたし）ども一同（いっとう）、朝夕（あさゆふ）御全快（ごぜんかい）を祈（いの）らない時はございませぬ。
 魚三。できますことなら、わたくしが女王様（女王様）のお身代り（みしろ）になりたうございませう。
 王様。うん。代（か）へることができたら、おれが代（か）つてやつてもいい。
 魚三。もつたない仰（おほ）せでございませう。

王様。お、申（まを）上げます。
 魚三。お待ちかね。多勢（おほせ）醫者（いしや）が集（あつ）つて少しは考（かんが）へがついたが。
 魚一。お喜び（よろこ）び下さいませ。
 王様。（喜んで）なに。喜（よろこ）べと。
 魚一。はい。これさへできますれば、御病氣（ごびやま）は必（かな）らずお直（なほ）りになります。そのほかには手（て）だてはないと申（まを）すこと。
 王様。それで、どういふことだ。
 魚一。ご存（ぞん）じのとほり、この龍宮（りゅうぐう）から南（みなみ）に猿ヶ島（さるがしま）がございませう。猿（さる）がたたくさん、住（す）んでをります。お使（つか）ひの者（もの）をやりまして、その猿（さる）を一人（ひとり）、こゝへ生（な）捕（とら）つてまゐ

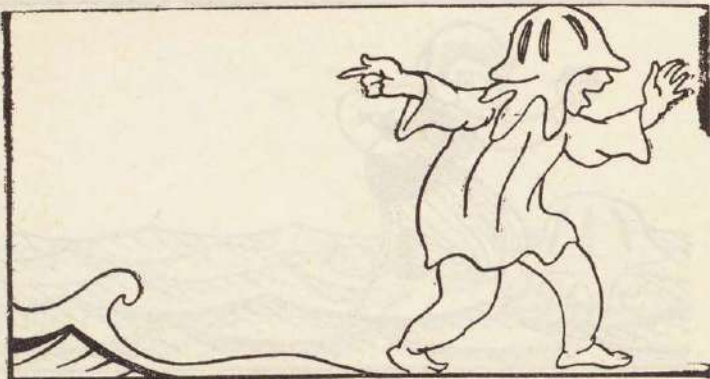


第一場 龍宮
 第二場 猿ヶ島
 第三場 海の上
 海月
 猿
 龍宮の王様
 大臣の鯛
 家來の魚一、二、三、（或はもつとたくさん）

猿と海月 (兒童劇)

小寺 融 吉

第四場 元の猿ヶ島
 第五場 龍宮の城門前
 背景は海を暗示する色を塗るだけで一幕中其まゝ、道具をかへるだけで場面が代る。
 猿は海月の人より小さい方がよい。
 第一場 龍宮
 龍宮の王様が中央に椅子に腰かけてゐる。その上手（玉の左手）に家來の魚の一と二、下手（右手）に魚の三がすはつてゐる。



海月。(ひとりごと) あゝくたびれた。
 なんて遠い所だらう。(猿にも
 しもし、こゝが猿ヶ島ですか。
 猿。さうよ。猿ヶ島だよ。
 海月。すると、お前さんは猿ですか。
 猿。(獨語) 馬鹿だな、こいつは。

第二場 猿ヶ島

綱心配さうに下手に入る。
 上手に岩をかいた壺を、押しだして
 くる。それで鳥になった心。上手か
 ら猿が柿の實をかちりながら出る。
 猿。(下手を見て) おや、へんな奴が
 くるぞ。ほんやりしながら、フ
 ーラリ、フラリと泳いでくる
 ぞ。なんだらう、あいつは。(下
 手から海月がくる) あゝこゝへくる
 つもりだな。

海月。龍宮にある海月です。
 猿。海月といふのかい。
 海月。この猿ヶ島はたいへん景色の
 いゝ島だと聞いたので、見物に
 きたのですよ。
 猿。よく来たね。こんないゝ所は
 ほかにないだらう。
 海月。だが私のゐる龍宮は又すぐき



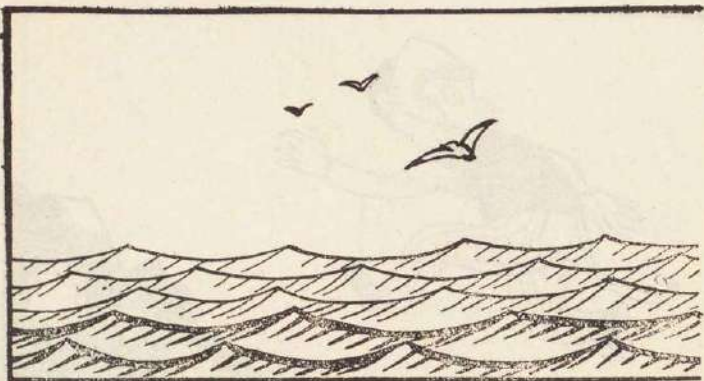
るのでございます。
 王様。生けどつてきてどうする。
 綱。それは後ほど、くはしく申し
 上げます。大至急お使ひをたて
 て、御病氣を一時も早くお直し
 申したうございます。
 王様。よし。それでは早速使ひをや
 れ。然し水の中を泳ぐだけの魚
 では、島にのぼることができ
 ん。誰か地面の上も歩ける者は
 ないか。
 魚一。龜は如何でございませう。
 綱。おゝ龜は兎とかけつこをして
 勝つたほどのしつかり者で、大
 切なお使も無事に勤めませう。
 王様。いや兎に勝つてもなんにもな
 らん。あいつは歩くのがおそ
 い。病人は待ちかねる。

魚二。蟹は如何でございませう。
 魚三。蟹と猿は仲が悪い。柿の種と
 握りめしのことからえらいけん
 かをしました。向ふで口をきい
 ません。
 魚一。龜でなし、蟹でなし。すると
 あとは海月よりをりません。
 王様。さうだ、海月をやれ。
 綱。一寸お待ち下さいまし。あの
 海月はどうも利口者ではござい
 ませんか。
 王様。利口でも馬鹿でも早いがい
 い。大至急使ひにやれ。
 王様は上手に入る。三人の魚は梅子
 を持つてあとについでに入る。
 綱。あのするい猿を、氣のきかな
 い海月が欺せるかしら。心配な
 ことだ。
 おれを知らないのだ。(海月に) さ
 うよ。猿ヶ島で一番えらいお猿
 さんだ。
 海月。(喜んで) あゝさうですかいゝ
 (獨語) しめたものだ。
 猿。なにがしめたものだい。
 海月。いゝえ、ナーニ。どうもいゝ
 お天気で。
 猿。お天気だね。ところで君はな
 んだい。
 海月。龍宮にある海月です。



です。とても〜こんな位であ
りません。
猿。(怒る)なんだと。こゝよりい
つて。馬鹿にするない。
海月。是非見物にゐらつしやい。
猿。生意氣いふな。こゝより好い
所があるか。
海月。えいっ。(獨語)怒つちやつた。
弱つたな。さう〜鯛さんが云
つた。猿は食ひしんぼうだか
ら、たべ物の話を…。(大聲で)
しめたッ。
猿。なにがしめたのだい。
海月。お前さんは食ひしんぼうでせ
う。
猿。(怒って)なんだと。
海月。その今たべてるのは栗でせ
う。

三三
猿。こりや柿だよ。馬鹿だなあ。
海月。(獨語)あゝちがつた。猿の好
きなのは柿に栗に握飯だ。(猿に)
ねえ、猿さん。龍宮には朝でも
晩でも柿がなつてゐますよ。
猿。こゝだつて朝晩なつてるよ。
海月。あゝいけない。朝晩ぢやない。
年が年中なつてると云へといふ
のです。
猿。年が年中? ほんとかい、
海月。ほんとですとも。そこが龍宮
です。栗だつて年が年中毎日た
べられます。
猿。(よだれをたらし)ふーん。
海月。握飯だつて年中なつてゐま
す。
猿。(びっくりして)握飯が? をか
しいな。握飯が木になつてるの



かい。
海月。そこが龍宮です。
猿。(わざと怒って)うそをつくない。
海月。(獨語)こゝだ、うそだと分ら
ないやうに云ふ所だ。(猿に)う
そなもんですか。どうです。あ
らつしやい。是非ゐらつしやい。
猿。なんだか行きたくなつたな
あ。
海月。(獨語)たべ物の話で欺せとは
鯛さんは旨いことを教へたもの
だ。全くだ。
猿。残念だなあ。おれには行かれ
ない。
海月。行かれますとも。
猿。だつて泳げないんだ。
海月。私が負つてあげませう。
猿。(喜んで)えい負つて? (考へて)

大丈夫かい。
海月。大丈夫です。負さりなさい、
遠慮するには及びません。
猿。ではたのむよ。すまないな。
(海月におぶつてもらふ)落つことし
たら死ぬせ。
海月。落つことしたら私が困りま
す。
猿。いや、おれが困るよ。
海月。さあ、海に入ります。波が出
たな。
第三場 海の上
上手の岩を次第に上手に引きとる
と、海上はるかに、島をすぎたこと
になる。
海月。(上手を振り返り)猿ヶ島がだんだ
ん遠くなりましたよ。しめたも



のだ。

猿。なにがしめたのだい。

海月。おつと動くとおちますよ。

猿。けんのんだなあ。

しばらく黙つたまゝ、やがて、

海月。もう大分きました。こゝらが

まんなかです。

猿。早く龍宮につきたいな。

海月。あ、大事な事を聞くのを忘れ

た。猿さん、お前さん、生膽を

持つてゐますねえ。

猿。生きてる者は持つてるよ、だ

れだつて。

海月。今、そこにありますか。

猿。(笑つて)つまらない事を聞くね

え。

海月。(まじめに)いや、今、そこにあ

りますか。

猿。(ふしぎまうに)おや。(ゆだんなく)

持つてゐればどうかしたかい。

海月。持つてゐなけりやいけな

だ。

猿。だが...

海月。おれがさ。

猿。(びつくり)おや、君、生膽が入

用かい。

海月。そのため、君をつれてきたん

だもの。

猿。そ、そーかい、ご苦労だね。

(驚ちつて)その入用なわけを話

したまへ。少しでも役に立つや

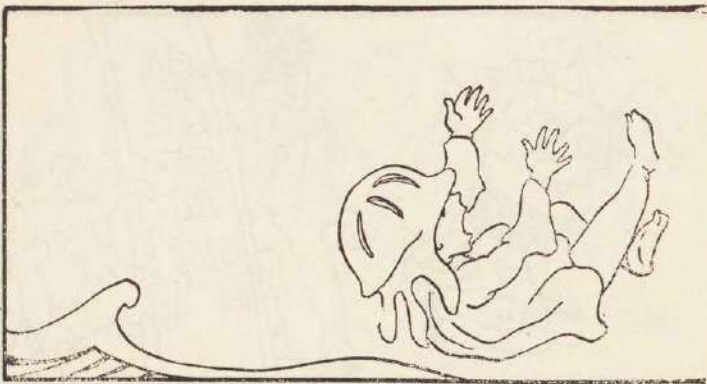
うにしてあげるから。

海月。役に立つやうには有難いな。

鯛さんは決して話すと云つた

が、こゝは海の中だし、逃げよ

うたつて逃げられない。(猿ヤモツ



とする)なーに、話といふのはか

うさ。龍宮の王様のお后さまが

病氣でね、いろ／＼薬をのんだ

が直らない。するとお醫者のい

ふのには、これに猿の生膽をた

べなければ助からない。大至急

猿を一人だましてつれてこいと

いふのさ。君、龍宮を見物なん

てうそさ。大うそさ。(この話の間

背中の上で猿が大いに残念がる)

猿。(驚ちつて)さうかい、なーんだ

ちやあなせ、始めからさう云は

ないんだい。

海月。云つたらくる筈がない。鯛さ

んがくれぐれもその事を氣をつ

けてくれたんだ。

猿。だつて、今、おれをつれて行

つたつてダメだよ。

海月。(びつくり)え、どうして。

猿。こゝに生膽はありはしないん

だ。

海月。そりやたいへんだ。どこにあ

るかね。

猿。島の木の枝につるしてある

よ。たくさんの生膽をいつも持

つてるのは邪まだから。

海月。へえ、たくさん持つてるのか

い。

猿。とびきり上等が五つあるよ。

だから一つや二つはいつでもあ

げるよ。残念だなあ。あいにく

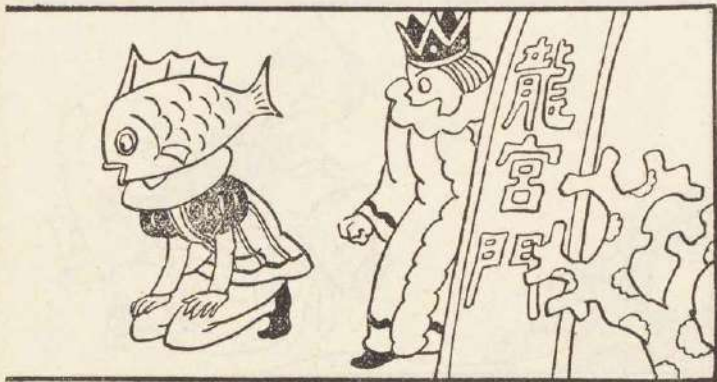
こゝに持つてこないや。

海月。(がっかり)あゝどうせう。

猿。もう一度島に戻らう。そして

みんな持つてこよう。

海月。(喜んで)え、みんな呉れるのか



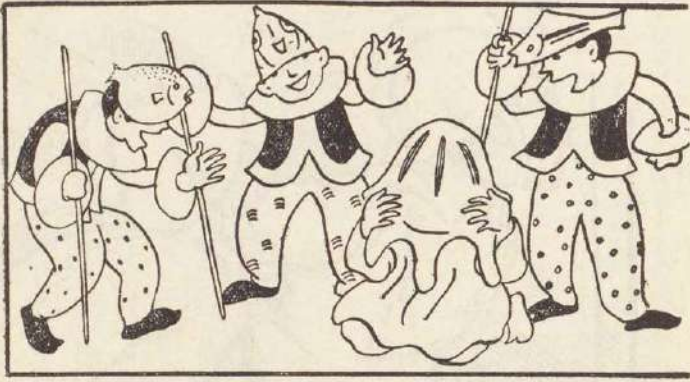
い。
 猿。うん、せつかく龍宮に行つても生贖がなければせうがない。
 海月。さうだ。大急ぎで引つ返さう。

猿。しめたものだ。
 海月。なに、しめたものだと思つて損した。

第四場 元の猿ヶ島

猿。さ、大急ぎ〜。
 海月。いたい〜。猿さん、何をす
 るんだい。

海月。いたい〜。猿さん、何をす
 るんだい。



第五場 龍宮城の門外
 上手に龍宮城の門をかいた晝を押し
 下す。鯛と魚一二三が出る。
 鯛。早く引き汐にして、海月を急
 いで歸らせる。おそいおそい。
 どうかしたかもしれん。

魚。やー歸つてきた〜。
 魚。さうでした〜。
 この聲を聞いて王様も上手から走り出る。
 王様。歸つたか〜。
 鯛。おい。おい。猿はどこだ。どこにゐる。
 海月。(泣きつとせつかく途中まで)

猿。なにもくそもあるものかい。
 この馬鹿野郎。とんでもないまねをしあがつた。よくもいつばい食はせやがつた。(又おつけり)
 海月。いたいよ〜。早く生贖をくれなにか。

猿。生贖はおなかの中にあるものだ。これをとられりや命がないやい。

海月。ちやあ、きつきの約束は。
 猿。今度はそつちが欺された。ワイイ〜。(猿は赤いお尻を向けてハハハと叩いてみせる)

海月。残念だ、コンチキ生。
 猿。早く歸れ。

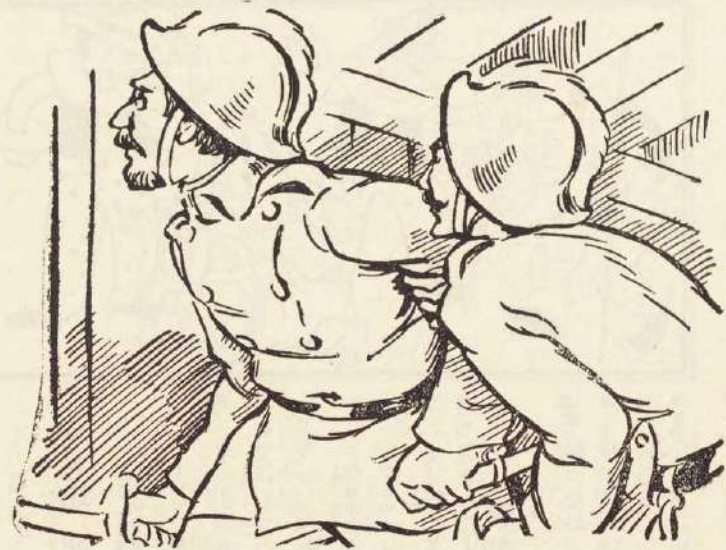
海月。尻もちをつけてワイと泣く。
 とたんに汐が引きたす心、上手の岩を上手に引いてとる。猿もアカ

たのに欺されて引つ返しました。あ〜くやしい〜。
 王様。な、なんと申す。途中まで引つ返した。あ〜この阿呆者ッ。

鯛。だから私が心配いたしました。王様。貴様のやうな知慧の足りない奴は、骨がなくても生さられるだらう。それ、こいつの骨をぬいてやれ。

魚三匹。畏りました。(海月をさんぐぶつて、頭からきれをかぶせる。海月「アッア泣く」)
 海月。ワイワイ、目も口もなくなつた……。

魚三匹。い〜きみだ〜。
 海月は泣く。魚は手を打つてはやす。王様は怒る。鯛はなだめる。
 そこで幕がしめる。
 或は何か滑稽な音楽につれて海月が踊り他の者がかからふのも面白い。(をはり)



傳勇武軍將ルーラエチ

者使の死決

(話童篇長)

十八條西

前線までの概観。ゲエラール中尉はナポレオン大帝の密使となつて、パリまで進んで行きましたが、途中はプロシヤ軍の集つてゐる所だったので、幾度か敵の重圍に陥りました。しかし、勇敢な中尉は常に敵軍を破つて向も進んで行くと、前方にあつてふいに敵の士官が現れたのです。

一、勇ましいポーランド兵

敵の士官は構はず、恰度短銃の彈丸の届く短距離にまで馬を進めて來た。その時、僕は油断なく自分の短銃の曳金に指をかけた。さうして、奴、どんな風に仕掛けてくれるか」と、ちつと相手の様子を窺つてゐた。ところが勢込んで詰め寄つて來た士官は、二三度妙に腰の邊を撫でまはした丈け一向發砲しない。『はてな』と思

つたが、僕には直きとその理由がわかつた。奴さん、疎忽にも革轡から短銃を出したなりで、陣營に置き忘れて來たのだつた。かれは詮方なしに、やたらに劍ばかり揮りまはして、威嚇の文句を呷鳴つた。そこで僕は、今度はこちらから構はず馬をぐいと進ませて行つた。さうして、

「降參せい！」と云ふ彼の言葉に應へて、

「それはこつちで云ふことだ。見ろ！」とばかり、短銃を彼の顔の正面にビタリとねらひをつけた。その時の相手の驚き！月の光にも彼の顔が見る／＼蒼白めてゆくのが見えた。『どれ一發』僕は曳金を指で壓さうとしたが、その咄嗟、何となくこの若い士官の身を安じてゐる生みの母親のある事が胸に浮んだ。そこでわざと乗馬の肩の邊へ一發呉れてやつた。馬が棒立ちになつて若い士官は眞逆様に地上へ落ちたかどうか、そこまでは見届ける暇が無かつた。僕は直ちに「荒風」に一鞭呉れて其場を立ち去らう

としたが、いつの間にか部下の兵卒連に圍まれてゐた。彼等は軍刀を抜きつれ、或は短銃の狙ひをつけ、上官の仇を討つべく迫つて來た。

「なにを小癩な！」とばかり、僕は馬を躍らせて、かれらを前後左右に蹴散らした。さうして辛く一方の血路を開いて、とつとばかり駆け出した。

が、十數間駆けて來た處で、僕はハツとして馬を駐めた。全身の血が一時に凍りつくやうに感じた。

見よ！前方三町ほどの杉の並木の間には、敵の驃騎兵が眞黒に隊をなして屯してゐるでは無いか。

前門の虎、後門の狼、チェラール大尉がつひに生命を棄つべき秋は來た。

諸君！その時僕は、どうせ死ぬのなら軍人らしく敵の眞只中へたゞ一騎斬り入つて、縦横無盡に薙ぎ伏し、その上で美事に死んでのけようと、僕は覺悟の膽をすゑて、悪びれもせず馬を飛ばして行つた。もつともさうは云ふものゝ、其間に僕は眼を瞑つ



てお祈めたことをらよいとやつてみた。ところが
 をかした事には、こゝ十数年そんな殊勝な真似はつ
 いぞしたことが無いので、いくら云はうとしても子
 供の頃H曜日の前晩に學校でよく行り行りした「神
 様よ、どうぞ、明日はお天気に」といふ文句しきや口
 に出て来ないのだ。だがそれだけでも行らないより
 は優しだらうと考へて、それを口の裡で繰返し／＼
 進んで行く中、僕はふと前面に佛蘭西語で喋る聲を
 聞いた。

「やッー」

僕は思はず叫んだが、同時に、喜びが鐵砲玉のや
 うに心臓へ飛び込んだ。なんだ、眼の前にあるのは
 我軍の兵士ぢやないか！ これらはマルモンから派
 遣されて来た我兵の一部隊であつた。

だがこれを見て自分よりも一倍驚いたのは執念ぶ
 かくあと追ひ駆けて来た三名の敵の諷騎兵であつ
 た。かれらは慌てて「廻れ右」をやつて命から／＼

もとの途へと逃げて行つた。

僕は出来るだけ平氣な風をしてその部隊の中へ入
 つて行つた。それでも「荒風」の横腹が波のやうに
 うごき、その口から白い泡をいつぱい吹いてゐるさ
 まを見て、皆がいまの逃げ方を何とか想やしまいか
 とひどく氣になつた。

ところでこの部隊の指揮官はと見ると、これは意
 外、いづぞや自分が戰場で生命を助けてやつたこと
 のあるブーべだつたので、僕の胸は更にその奇遇に
 躍つた。ブーべもこれには同感であつたらしい。僕
 を見るとその小さい桃いろの眼は感激の涙でいつぱ
 いになつた。それに釣られて自分も危く涙を落とすこ
 ころであつた。僕は今日の使ひについて手短かにか
 れに話した、さうしてこれからサンリスを通つて巴
 里へ行くのだと云ふと、かれは笑ひだした。

「サンリスは敵軍で一杯だよ。とても行かれはせん
 よ。」

と、彼は云つた。

「敵軍があつてもおれは行くんだ。」
僕は答へた。

「だがどうして君はその親書を持つて真直に巴里へ行かないんだね？ わざ／＼サンリスなんか通る必要ないぢやないか。通ればきつと殺されるに定つてゐることを——」

「軍人には命せられた一途あるのみだ。」

僕は皇帝陛下の口吻をそっくり真似て答へた。

ブーベはこれを聞くと持前の喘息聲を立てて笑ひだした。しかしあんまり永く笑つてゐたので、僕は口髭のさきをびんと捻りあげ、彼の頭から爪先までを見上げ見下してその反省を促がした。

「よろしい。では君は僕等と一緒に來るがいい。」
と、暫くしてから彼は云つた。

「僕等はあの町の偵察を命せられてゐるのだ。僕等の前軍としてはポーランド槍騎兵があらに二個中

兵の一箇師團が町より北方の森林の中に野營してゐるが、サンリスの町中には目下そのコサツク兵よりほか居ないとのことである。

これを聽いて僕等は手を拍つて喜んだ。かの暴虐到らざるなきコサツク兵に、天誅を加へるべく、これは何といふ機會であらう！ かれらの亂暴狼藉にはこの地方の人民が夢にまでうなされてゐるのだ！ 間もなく僕等は激流のやうに町へなだれ込んだ。騎哨を蹴仆し、番兵を躓にかけ、見る間に市長の邸の正門を粉碎した。物音を聽いて邸の二階三階の窓窓からはたくさんの首が出た。蜂谷まで髯を生やしもじや／＼毛の長い頭に羊の皮の帽子をかぶつた、厭ひもないコサツク兵どもである。

「ウーラー！ ウーラー！」

かれらは怒つて叫んで、短銃を亂發した。けれども我兵はいち早く邸内に亂れ入つて、かれらの多くがまだ寢惚眼を摩つてゐるところを片端か

隊居る。君がどうしても行く氣なら同行しよう。」
そこで僕等は一緒になつて静かな夜路に鏗々々々の響をたてながら、ポーランド兵の屯してゐるところまで來た。なるほどかれらは揃つて聞きしにまさる立派な武者振である。こんな連中が自分の隊にゐたらと、僕はそゞろに羨しくなつた。

僕等は一團となつて駒の轡をそろへて出立したさうして夜の白みそめる頃に、サンリスの町の燈火の見える地點まで來た。見ると一人の農夫が荷車を引いてやつてくる。僕等はそれを捉へて町の模様を訊いた。

かれの報告は正確なものだつた。と云ふのは彼の弟はサンリス市長の御者で、然もかれは昨夜遅くその弟と話したと云ふからである。町には敵のコサツク兵が二個中隊、市長の邸に駐屯してゐる。市長の邸といふのは市場の角に在つて、町中でいちばん大きな建物であるさうな。まだその他に普魯西歩

ら突き刺した。殊に凄まじい勇猛振を見せたのはポーランド兵であつた。かれらはさながら、肥えた牡鹿を襲ふ飢ゑた狼の群のごとく暮地にコサツク兵等に飛び掛つた。誰人も知る積年の怨が、かれらの心の中には火のやうに燃えたつてゐるのだ。

敵兵の大多數は三階へ逃げ上つて、そこで大方殺されてしまつた。血は河のやうに階段を傳つて階下まで流れた。

「萬歳！ 萬歳！」

忽ち我軍からは勝利の叫びが潮のやうに揚つた。

二、快漢ヘーブの最期

さて、諸君！ この時である。僕が生涯に一度の不覺を演じたのは！

と云ふのはこの時まで僕はひたすら皇帝陛下の大切な使者の役目をのみ念つてゐて、飢も疲勞も一向に忘れてゐた。ところがこの小戦争の勝利で多少氣

が緩んだものか、何か飲むものがしきりと欲しくなつてきた。

今から考へれば喉の乾きぐらゐちつと我慢して、もう一走り「荒風」に鞭をあてればよかつたのである。さうすればサンリスの町から巴里までの間には敵は居無いのだから、あとは造作なかつたのであつた。けれども其時にはいかに喉が乾いてならなかつたので、僕は「荒風」の鞍から飛び下り、家の中へと入つて行つた。

斷つて置くがこの小戦争では僕は一向働かなかつた。遅れて行つて、戸外に仆れてゐたコサツクの一人から槍を投げつけられ、危く怪我をしそくなつた位のことであつた。

さて家の中へ入つて見ると、死骸はもう大方片付けられてゐた。その中を通つて僕は「荒風」のためにはバケツに水を汲んできた。最前の農夫は親切に傍から飼葉の在所を教へて呉れた。「荒風」の脚をよく

溜つてやつてから、僕はうまさうな飲料を探しに奥へと進んで行つた。

諸君！ これからして僕の奇妙奇手烈な経験談が始まるのだ。諸君はこれを聴いて、さだめし担り話と思ふかも知れない。だが戦場で生きるか死ぬかの別れ目を展々往來して居る時、人は實際よくこんな不思議な目に逢ふのだ、まあちつと聴いてゐたまへ！

僕が奥へ行くと、廊下のところに戦友ブーベが立つてゐた。さうして見るなり、

「君、一杯やらうぢやないか。」と云ふんだ。

「うん。よからう。」

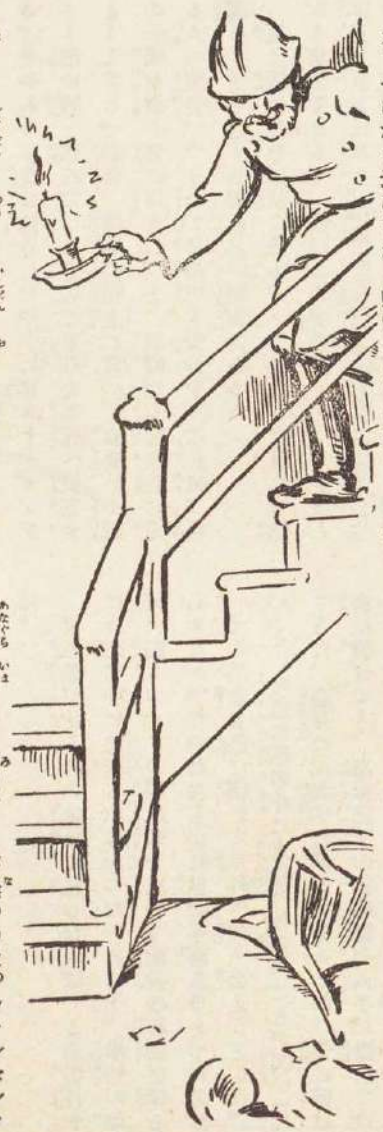
僕が渡りに舟とはかり賛成する。と彼は、

「だがゆつくりしちや居られないよ。なにしろ向うの森には一萬からの普魯亞兵が控てゐるんだから。」と云つた。

「ところで肝心の酒は何處に在るんだい？」

と、僕が訊いた。
「安心しろよ。大の男が二人ゐて酒の在所が分らないなんてことが有るもんか。」

ブーベはかう云ひながら燭燭を片手に持つて、先



に立つて食堂へと通する石段を下りた。

兩人が食堂へ入つて見ると、その向ふにもう一つ扉があつた。それを明けると螺旋梯子があつて地下室へ續いてゐた。コサツクの奴等は最前すばやく此

處を占領して、盛んに飲みまくつたらしい。それはそこらに散亂つてゐる燭の破片を見てもわかつた。それはともかく、僕はこの町の市長の酒好きにはびつくりしてしまつた。この位上等な酒が集つてゐ

る筈は今までに見たことが無かつた。シャンベルタン、グラヴ、アリカンなどの珍らしい酒をはじめ、白いのや、赤いのや、光つたのや、澄んだのや、いづれ劣らさうまさうな酒蔵が、ピラミッド型に高く

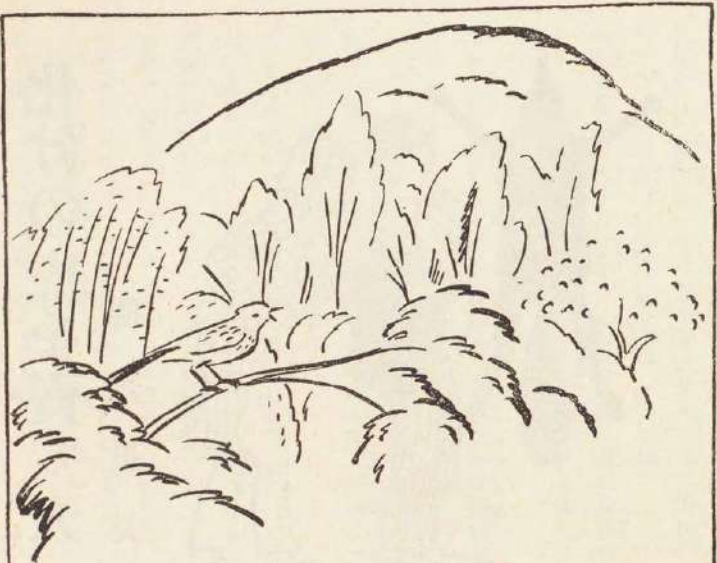
積まれて、鎧冑の中から羞かしさうな肌を見せてゐる。ブーベは蠟燭片手に、どれを取つたものかと迷ふやうにしばらくあちこちを覗いてゐた。彼の喉はミルクの皿を前にした猫のやうにゴロ／＼鳴つてゐる。ややあつて彼は決心したやうにビュールガンデイー酒の罌を掴んだ。さうしてそれを手元へ引寄せようとする一刹那、僕等の頭上に當つて物凄く小銃の一斉射撃の音が聞えた。と、同時に右往左往に走る人の唳音、つゞいて身の毛も慄つやうな悲鳴、叫聲！ まさしく普魯西兵の襲來である！

僕は彼のために特に云ふ。ブーベこそは世にも稀なる勇士である！ 彼はこの聲を聞くと、スラリと軍刀を抜きはなち、拍車の音高く階段を駆け登つた。僕も無言のまま直ぐその後を續いたりさうして兩人が將に食堂の廊下まで差しかかつた時、戸外に當つて萬雷のやうな叫び聲！ それは明らかに此家が再び敵の手に落ちたことを語るものであつた。

「しまつた！」
僕は覺えず叫んで、ブーベの袖をしつかと掴んだ。「なにこそッ！ 斃れて已むのみだ！」
彼は狂人のやうになつて第二の階段を駆け上つた。

實際僕がブーベの地位に在つたらば、この場合やはり死なすには居られなかつたであらう。事情の如何に關らず、この際斥候を放つて敵兵の行動を探らしめなかつたのはたしかに彼の手落ちであつたのだ。一寸の間僕も彼に續いて戸外へ躍り出ようとした。が、その時急に頭の中に大切な使命のことが閃いた。さうだ、自分には大切な使命があるのだ。骨は碎けて肉は裂けても、皇帝陛下の御親書を人手に渡してはならない！

僕は涙をのんでブーベをして獨り死をさせた。さうして自分はずの地下室へ駆け戻つて、うしろの扉をしつかと締めた。(つゞく)



ひよどり(推薦)

立花信夫

裏の小山に啼く鳥は

啼く鳥は

ひよどり小鳥 春の鳥

朝も早よから

裏山で

今日も一日啼く鳥は

啼く鳥は

ひよどり小鳥 春の鳥

化けの皮を賣る人

柳井正夫



五〇
プロシヤの國のフレデリック大王の御代、その國の都ベルリンに、化けの皮を賣る人があるといふことでした。

何がさて、今まできいたこともない珍しい品物なので、此の事をきいた人々は、誰一人として欲しがらないものはありませんでした。

そしてベルリンの町の人々は、われ先にもその品物を買ひとつて家の寶にしようと、噂から噂を傳うて探しまはりました。

「化けの皮がもし手に入るならば、私の持つてゐるものをすべて投げ出してもいい。」

といふ人もあれば、

「この何萬といふ財産も、すっかり化けの皮ととりかへていい。」

といふ人などが出て来て、町裏のつまらない職人や、大きなお屋敷にすんでゐるお金持まで、みんな血眼になつて探しまはりました。が、いくら探して

もなかなか見出されさうもありません。たと噂ばかりが日に日に盛になつて行くばかりでした。

「何でもその化けの皮といふのは、高い高いお山のすつと奥に棲んでゐるたいへん怖い獸から取つた皮ださうです。」

「お夕飯を戴いた後に、或家のお父様は小供達にさう云つてきかせました。」

「私のきいたところによると、それはあの遠い海を越えて行つたアメリカの國から、ある商人が買つてきた實に高價な品物ださうです。」

と町の辻々に立つて、人々は噂しあひました。

「私はその化けの皮はよく知つてゐる。それはイギリスの皇帝陛下がたいへん御秘藏になつてゐたものだが、今度フトしたことからこのプロシヤに渡つてきたもので、せひとも手に入れなければならぬ。或るお金持の人が、澤山のお客様の前で、さもそれを見てきたやうにかう申しました。」

さうかと思ふと、氣の早い商人は化けの皮の大きな繪看板を出して、人通りの多い通りで見世物小屋などを立てて人を呼びました。入つて見ますと、それは何でもありません。犬の皮や熊の皮が並べてあるだけで、そんなものはベルリンの町の皮屋に澤山あるものなのです。

そのうちに、化けの皮についてくはしいことを書いた本さへも出るやうになりました。

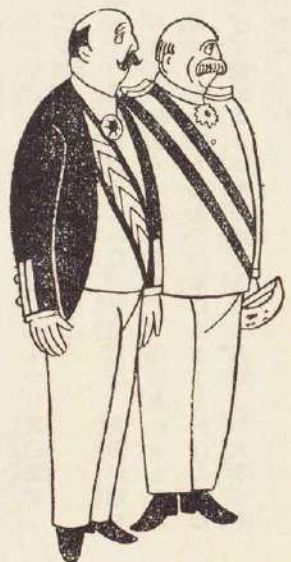
その本に書いてあることによりますと、フレデリック大王のお祖父様にあたるフレデリック一世と申すお方が、プロシヤの國をお立てにならうとして澤山の國々と戦つた時、或小さな國を攻めました。そして遂にその國を滅してしまつたのですが、その國の最上の寶とする化けの皮がどうしても見つかりません。色々探しましたあげく、やうやうのことですが、隣國の或大きな國の王様に預けてあることが知れました。フレデリック一世は早速その國を滅し

てしまつて、化けの皮をとらうとしましたがまたそこにもありません。よくよく探しますと、それはまたその國よりもずつと大きな、隣りの國に預けてあることがわかりました。で、フレデリック一世は色々な難儀の末に、とうとうその國も滅ぼしてしまつて、やつとのこと化けの皮を手に入れることが出来ました。それに、そのほかたいへんな難儀をしてやうや



五二
くの事プロシヤの國まで持つて來たのです。この珍しい化けの皮は、プロシヤの國の寶ともいふべきものなのですが、或時御殿から火事が出た時にどこかへ失つてしまつて、それきり姿も見ることの出来なくなつたものなのです。その後二百年ばかりたつた今になつて、どこからかその化けの皮があらはれてきたのであらう。……
といふことがその本にながながと書いてあつたのでありました。

ほんとなのかうそなのかそれは判りません。けれども本を一度でも讀んだ人は、もうそのまゝ黙つてゐることは出来ません。どうかしてこの珍らしい化けの皮を手に入れたいものと、ベルリンの町の人々は自分の仕事などはほつたらかして毎日血眼になつて探し歩きました。
波風もなく太平に治まつてゐましたフレデリック大王の御代も、この噂が始まつてから、ベルリンの



町はおろか、國中の町々の人々の心が、すつかり亂されてしまひました。
家の中でひそひそと相談する人、辻々に立つてがやがや罵りあふ人、それはすべて化けの皮に就いてつてゐるのです。
誰いふともなくいひ始めたこの噂が、かうしていつのまにかプロシヤの國全體に知れわたりましたの

五三
で、自然とフレデリック大王のお耳に入つたのは勿論の事なのです。
御殿の人達が、よるとさはると何かひそひそいひあつてゐるのをお知りになつた大王は、或日お側の家來に向つておききになりました。
『お前達はこのごろ、たいへんより合つては相談してゐるらしいが、一體なにを話してゐるのだ。』
『はい、陛下、陛下にはまだ御存知あそばさぬのでございますか。陛下の御祖父フレデリック一世さまの御秘藏あそばされたといふ化けの皮が、二百年の後の今日やうやく民間に現れて來まして、その噂でプロシヤの國は今いつぱいになつて居ります。』
『なに、御祖父君の御秘藏あそばされた化けの皮だど！ そんなものが一體ほんとにあつたのか？』
『はい、或本の傳へるところによりますと、これはプロシヤの國の寶ともいふべきものださうでございます。ですから國中の者はどうかしてこの寶を手

入れようとして、日夜仕事も手につかぬ程さわいでをります。」

「ふじ、それは珍しいことだ。お前はそのことを書いた本を持つてゐるか？」

「これでございます。どうぞごらん下さいまし。」
家來は恰度もちあはせてゐた化けの皮の本を大王に捧げました。

大王は早速それをごらんになつて、
「早く老臣どもを呼べ！」と仰せられました。

やがて、もう眞白に頭の毛の染まつた老臣達が、大王の前に 恭しく居並びました。

「お、よく集つてくれた。早速だが、我國の始めからの記録類をすつかり集めて、此の本にあることを調べてくれ。もしもこの本にあることがほんとならば、我がプロシヤの國に取つて由々しき大事なものだから……」

大王の仰せによつて老臣達が大王から受取つた本

「ふじ、さうか、よろしい。してみるとこの化けの皮の事は或は嘘であるかも知れない。嘘とすると、此の世にまたと得がたい珍しい品物であるから、長く我國の寶とせねばならない。とに角、ほんたうと嘘とにかゝはらず、國中に布令を出して出来るだけ探し

て見よ！」

と、フレデリック大王は力強く仰せられました。老臣達は早速退きさがつて、大王の命令通り國中へ澤山の家來を出して、いよいよ化けの皮を探すことになりました。



を見ますとそれは化けの皮について書いてあるものでした。老臣達は申合せたやうに顔を見合せました。大王の前を退つた老臣達は、額を集めて相談した上、早速澤山の書類を集めて化けの皮について調べ始めました。

老臣達は毎日々々澤山の書類を調べまして、十日ばかりのうちにすつかり調べ終つてしまひましたがどこを探しても化けの皮の事については、一言も書いてありません。あれほど詳しく書いてあるにもかかはらず、プロシヤ中のことを一つも残さず書いてあるべき書類の中には、ほんのちよつとも見出すことが出来なかつたのです。

仕方がありませんから、老臣達は大王の前へ出て恐る恐る申上げました。

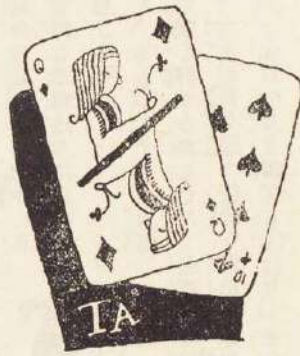
「陛下、プロシヤ中の書類をすつかり調べましたが、一言も化けの皮について書いてあるのを見出すことが出来ませんでした。非常に残念に存じます。」

その日からプロシヤの國は、戦争のやうなさわぎで化けの皮が探されました。馬に跨つた役人は八方に飛びました。あらゆる財産をなげ出してお金持は

一手に探しました。食べるにも困る仕事をほつたらかして、貧しい人達は探しまはりました。

けれども、どんなに探しても、化けの皮らしいものは見出せません。噂から噂を傳つて行つても、結局は煙のやうにつかみどころさへありません。

にせまつてきました。お金持のお倉にはもうめぼしい物もなくなりました。探しあぐんだ役人は、へとへとに身體を疲れさせてゐました。(つづく)



ラム王の一生

武井武雄

2

フンヌエスト、ガーマネスト、エココ、ズンダラー、ラム王が、再びエツベ國の珊瑚削りの仕事場に生れ落ちたのは、全く不思議なことでした。小鳥の羽ばたきの様な可愛い音を立て、廻つてゐる珊瑚轆轤の側で、今生れたばかりのラム王が、コガアコガアとないた時、南の壁に切抜いてある小さな窓から、恰度微風に送られながら、チラ／＼と舞込んだ六枚のカードが静かに床の上へ落ちました。

た。そのカードの、五枚はまつ白、一枚はまつ黒でありました。一體この國の云ひ傳へによりますと、子供の生れた時、もしもカードが授かると、その子供の一生の占ひになるので、白いカードは王様、黒いカードは奴隸といふ事がありますが、何しろ未だかつて一度も實際にカードの降つたといふ噂さへ聞いたことがないので、ラム王のお父さんはそんな事を氣に止めてゐるところか、年とつてから授つたこの赤ん坊を只可愛い可愛い育てました。

處が、その可愛いラム王が十一の時、又ふらりと家を出かけてしまつたのであります。それはラム王が、——西の方へ旅をすると、黒耀石の小さな釣針がある。——といふ夢を見た翌る日のことであります。

ラム王が西の方へ出かけて三日程たつてからは、來る日も來る日も、夜の様に暗い曇日ばかりが續いたので、もうどつちが西やら、さつぱり見當がつかなくなつてしまひました。そこでとう／＼道の四つ角に立つたまゝ、途方に暮れて居りますと、峠の上の方から、ブンブン、ブンブン、とか細いうなり聲が聞えてまゐりました。近づいてくるのを見ると、それは驚でも山犬でもなくて、一つの小さい獨樂が廻つてくるのでした。獨樂はブンブン、ブンブンと吹きながら、ラム王の前をすん／＼通り過ぎてゆきますので、どこまでも／＼そのあとをくつついてゆきますと、急に日が射して明るくなり、あつと

云ふ程美しい丘の上に出ました。

この丘の柔かい若草の上に、氣をつけて見ると、燃える様な赤い毛氈を敷いて、鬚を胸のところまで垂れた、六寸ばかりの小さい男が、ちつと坐つてゐるのでした。その男の倚りかゝつてゐる木には、森を後ろにしてまつ白な木蓮の花が重さうに咲き揃つてゐて、静かにこぼれ落ちるその花片は、小さい男の肩や毛氈に白い蝶のやうにとまつてゐました。近づいてみると、その男は鉛筆の様な細い腕を頻りに動かして、

「みいづく、みいづく。」

と叫んでゐます。ラム王は腰をかめて、

「お前はみいづくの子供かい。」

と、聞いてみると、その男は蠶豆の様な首を横に振つて、胸の處へ指をさしながら、又

「みいづく、みいづく。」

と、叫びました。胸の處には「豫言者」と書いた、

汽車の切符位の札がさげてありました。ラム王は、「ではお前は、さき／＼の事を云ひ當てる博士か。」

と、聞いてみると、又

「みいづく、みいづく。」

と、叫んで、空の方へ手を振つて居りました。それから何を聞いても、只「みいづく、みいづく。」と云ふばかりで、外の言葉を知らないらしく見えましてので、ラム王は氣狂ひかな、と思つて急いでその丘をおりました。

翌る日、森を抜けて廣い入江を抱いた岬の先に着くと、恰度日暮れ時になつたので、海は夕焼でまつ赤に染まつてゐました。ラム王が岬の岩角へちやぶく、ちやぶくと寄せてゐるこのまつ赤な波の上を、よく／＼見ると、三角の黒い帆をかけた一寸位の舟がクル／＼、クル／＼廻りながら漂つてゐるではありませんか。早速拾ひあげて見ると、その舟

の中には、赤い服を着た二分位の小さな男が乗つてゐました。

その男は頻りに口を動かしてゐる様に見えますけれど、あんまり小さ過ぎるので、何が何やらさつぱり聞えません。ラム王はその男を、ちよいとつまんで耳の穴の中へ入れますと、

「僕は童謡の大家だ。」

と、いふ聲がはつきりと聞えて來ました。こいつは面白いものを拾つたぞと思つて、

「本當だか嘘だか歌つてみる。」

と、云ひますと、耳の中の男は、

「よしきた、そらはじめるぞ、いゝか。」

と、云ふかと思ふといきなり、なりに似合はない大きな聲でうたひ出しました。

俺の袋ちや

何でも腐る。

雀の卵も



團栗の實も。

すぐに腐つて

しまつたくせに、

こんだ不思議や

腐りもしない。

そりやその筈だよ

からつばさまだ。

何だ、馬鹿馬鹿しい、大家どころか、てんで童謡

にも何にもなつてゐはしない。とラム王は怒つて、

その二分位の小男を耳の中からつまみ出して、草の

上に棄て、しまひました。

その翌る日、ラム王は一つの荒れ果てたお城に着

きました。この國には金物といふものが一つもない

ので、人々は石の庖丁や、羽のペンを使つてゐまし

た。その譯は、近くに磁石國が出来てから、そのの

大磁石が廻つて、何年に一ぺんか、先がこつちを向

く事があるが、その度毎にこの國の金物といふ金物

は、釘一本に至るまで、みんな吸付けられて行つて
しまつたからであつた。この國も昔は榮えたも
のでしたが、これといふのも戦さに強い軍人が澤山
にゐたからの事で、磁石國に金氣を吸取られてしま
つてからといふものは、勢ひ殺し合ひの戦争は出来
なくなつて、智慧くらべの戦争になつてしまつたの
であります。

さて、さうなつてみると、いくら強い軍人が澤山
に居ても、さつぱり智慧の方が廻り兼ねるので、敗
け通しに敗けて、順々に國を取られ、残つてゐるの
は只この荒れ果てたお城だけでありました。その上
王様は、國中のものゝは入つてゐるこのお城を敵に
渡すには忍びない、といふので、この前の戦争の時、
御自分から進んで捕虜になつておいでになつたので
した。

ラム王は氣の毒になつて、次の戦争を、このお城
で待つことにしました。



その内に、敵が押寄せた、といふ知らせの法螺貝
が鳴りましたので、お城ではどら鐘を叩いて人を集
め、一番智慧のありさうな奴がまづお城の櫓の上に
登りました。ラム王もこれについて登りました。今
日こそは、城を渡すかどうか、といふ境目です。

まづ敵の櫓は、と見ると鬚だらけの男がヌツクと
立上り、割れ鐘の様な聲をばり上げて、

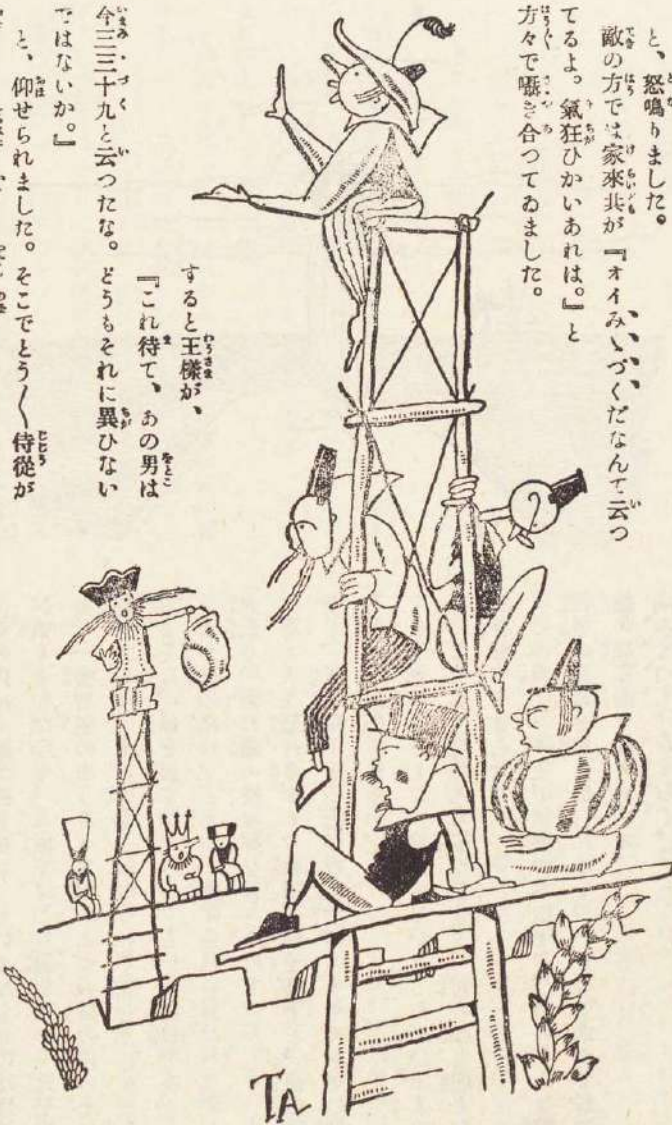
「そろ／＼恐れ多くも、我國の國王陛下と、皇后陛
下と、王女殿下との三つの冠のダイヤモンドの數
を併せて何個となるか。」

と、怒鳴りました。途方もないことを云ひ出すの
で、こつちではみんな黙つたまゝ、青い顔と顔とを
見合せてゐました。

この時、ラム王が木蓮の木の下、あの小さな豫
言者の言葉を思ひ出したので、いきなり立つて割れ
鐘の様な聲をばりあげて、

「みいづく、みいづく。」

と、怒鳴りました。
敵の方では家來共が「オイ、み、つくだなんて云つ
てるよ。氣狂ひかいあれば。」と
方々で囁き合つてゐました。



すると王様が、
「これ待て、あの男は
今三三十九と云つたな。どうもそれに異ひない
ではないか。」
と、仰せられました。そこでとうとう侍従が
恐る／＼白旗を掲げに橋へ登つてゆきました。

鬚づらの男は、くやしさに今度は大きくふくら
んだ袋を持上げて、
「そも／＼恐れ多くも、この中は何をお入れ申して
あるんぢや。」

と怒鳴りました。
ラム王は、あゝあの童謡だな、と思ひ出して、
俺の袋ぢや
何でも腐る。
雀の卵も
岡栗の實も、
すぐに腐つて

しまつたくせに、
こんだ不思議や
腐りもしない。
そりやその筈だよ
からつばさまだ。
と、こびとが耳の中で歌つた通りの節で歌ひまし

鬚の男は一層くやしさに、からつばの袋をなげ
棄て、再び白旗を掲げ、今日の戦争は終りました。
この戦争で、お城の王様と、城下の町とを取戻した
のは、全くラム王の力でした。王様はすぐにラム王
に位を譲つて、それ以來この國も日の出の勢ひで榮
えてまわりました。
ところが、ある年の初夏に、民から本當に慕はれ
てゐたラム王様は、御殿の窓からいきなりビュ
ン!! と空を切つて飛んで行つておしまひになりま
した。

これは、ラム王様が他國から来た人なので、ついで
つかりと、まだ鋼鐵の劍を腰につけてゐた處へ、恰
度にも年期が来て、磁石國の大磁石の先が廻轉して
こちらを向いたからでありました。
この時ラム王は漸く十五歳でありました。

小舟

若山牧水

ギイツコギイツコ

お舟が通る

濱に陽炎

昇ると見れば

波はさざなみ

さらさら寄せる



ギイツコギイツコ

お舟が通る

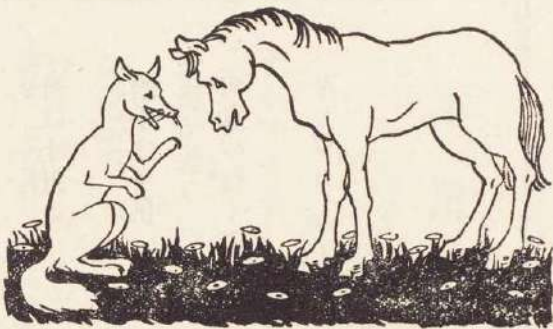
舟は小舟よ

漕手は子供

何處へ行くのか

ギイツコギイツコ





獅子を曳いて来た馬の話

中島 孤島

ある時一人の百姓が一頭の馬を飼つてをりました。

馬は永年の間正直に働きましたが年々つてもう働けなくなりました。すると主人はこの馬に食べるものもやらすに、ある朝駮へ来てかういひました。

「わしはもうお前に用がなくなつたが、それでも永年働いてくれたのだから、たゞおひ出さうとばいばない。もしお前に獅子をひつぱく来るだけの元気があつたらもう一度つかくやる。けれどもそれを見るまではこの駮おくことは出来ない。」

かういつて百姓は、あはれな老馬を駮からおひ出してしひました。そこで馬は頭をぐつたりと下げて、トホトトと歩いて行きました。もう駮へはかへれないから、どこかで雨風を凌ぐだけの場所を見つけたと思つて、あてもなく林の方へ歩いて行くと、林のそばで狐にあひました。狐は馬が元氣のない様子をしてやつて来るのを見てかう嘲れました。

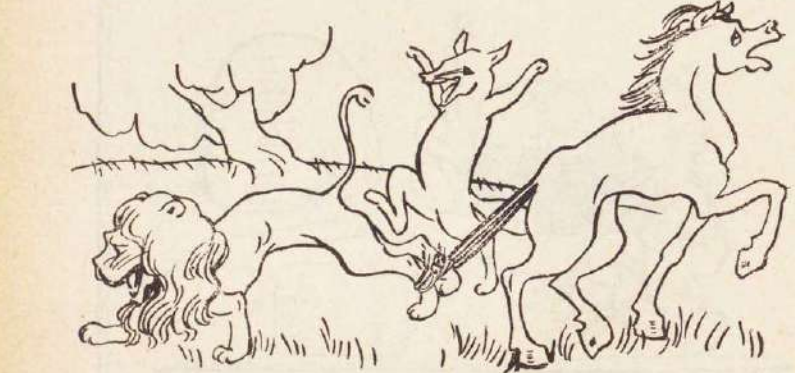
して、こんなところをまごつてゐるのかね？」

「まア聞いてくれたまへ」と馬は狐の顔を見ていひました。「なまじりやに住んでゐられない。義とは、同じうちに住んでゐられない。わたしの主人はわたしの永年の骨折りを忘れてわたしがこの老年になつてもう働けなくなつたのを見ると、飼料もくれずに駮からおひ出してしまつたらやないか。」

「それぢやアもうとても見込みなしかね？」と狐がさかへした。まア見込みはなさうだね」と馬が答へました。主人はわたしに獅子を曳いてかへつて来ればもう一度飼つておいてやるといふんだが、それはまア出来ないので見越して、難題をかけただけのものさ。」

て突かると、狐はちき近いとこにある獅子の穴へ行つて、かういひました。「さあそこ馬が死んでますから、ちよいと来てごらんさい。本當に御馳走の食ひわきが出来ませう。」

そこで獅子は狐のあとへついて、馬の倒れてゐるところまで来ると、狐は獅子の方をふりかへつて、かういひました。「まア、ちよいとごらんさい上等な馬ぢやありませんか？ よろしかつたらこれをこのまんま持つていらつしやい。こいつの尻尾をあなたの尻へゆはへつけてあげますから、あなたの穴へひいてかへつて、ゆつくり召あがつたらいふでせう。」



それがすむと、狐はいきなりの馬の肩をたいてかういひました。「まア、これでぐんぐん曳いてい！」

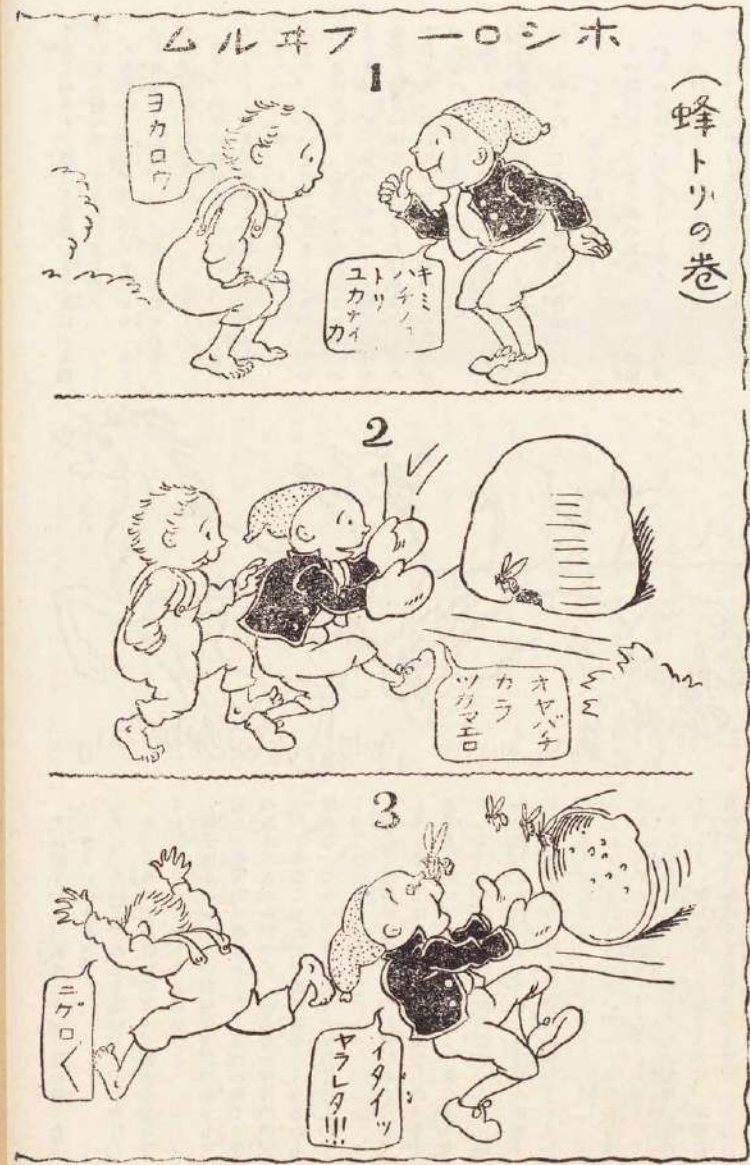
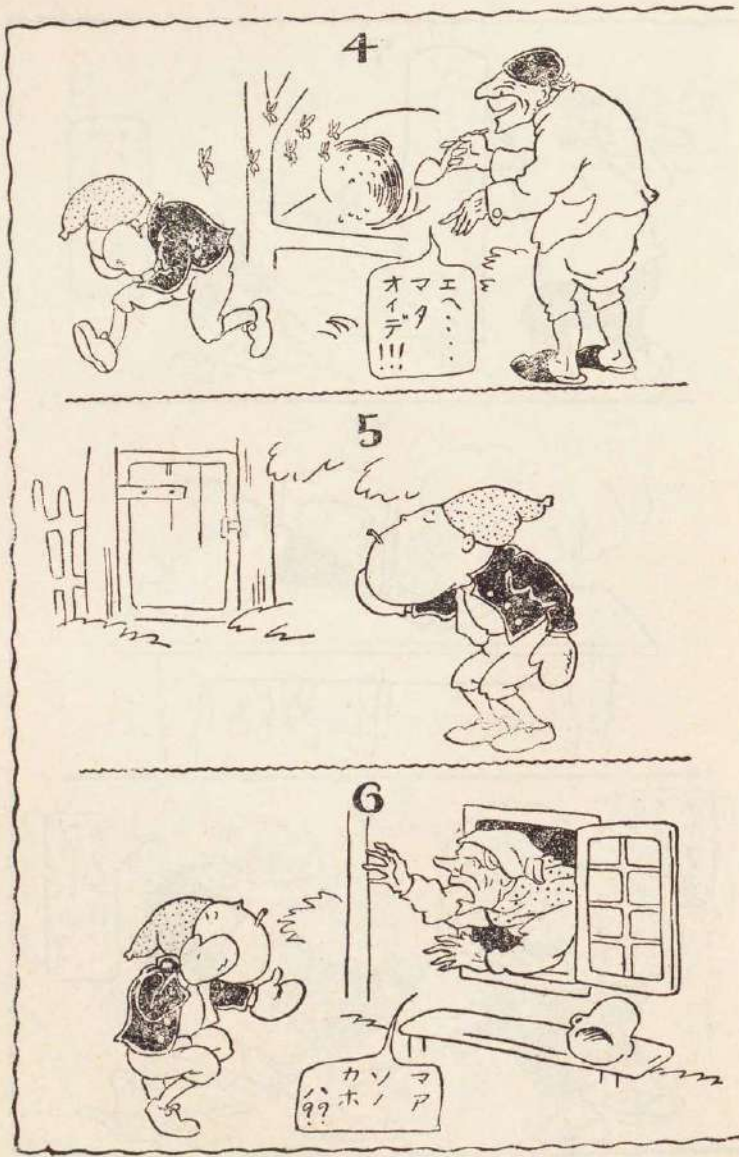
そこで馬は急に跳ね起きて、獅子をするすると引きずつて行きました。

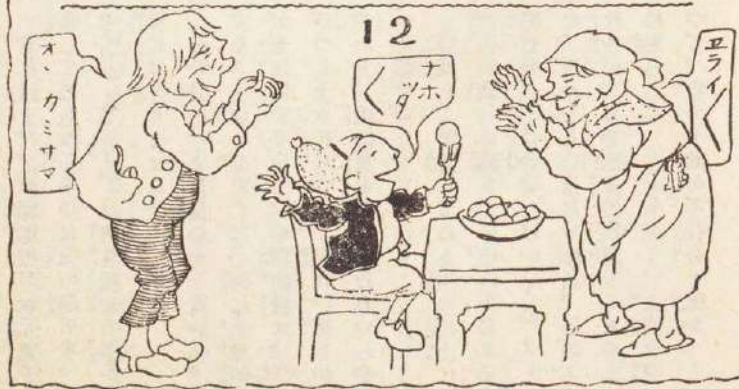
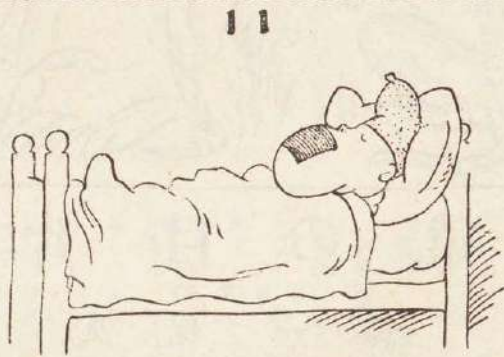
獅子はふいふくらつたので、びつくりして怖しい聲で唸り出しました。それを聞くと林の馬はふるへあがつて、みんな一時に飛び立つたくらゐでしたが、馬は獅子のうなるのも聞えないやうに、する／＼と平氣で主人のうらまで曳いて行きました。

百姓は馬が自分のいつた事を本當にしてとても曳いては来られまいと思つた獅子をするすると曳いて来たのを見ると、急に考へなほして、この忠義な獸をおひ出さうとしたのを後悔しました。そして馬のたてがみをやさしくなでながら、百姓は馬に向つてかういひました。

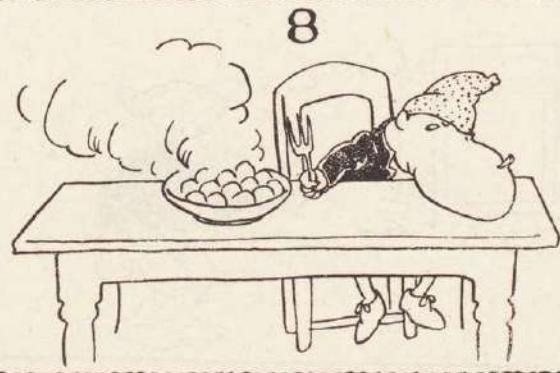
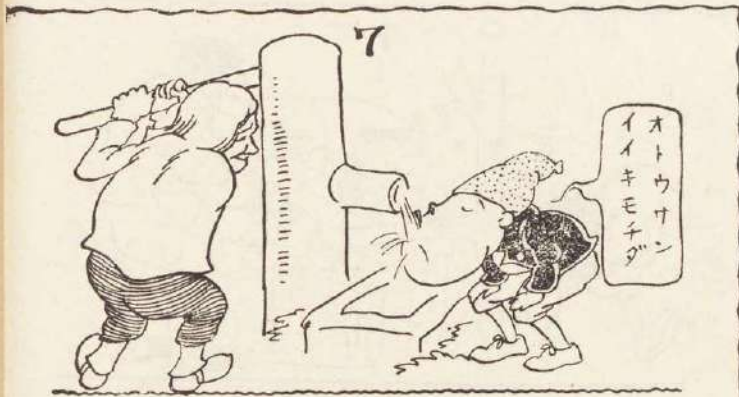
「これからまたうちへおいで、一生樂をさせておいてやるから安心してゐるよ。」

それから後には、このおとなしい馬は、死ぬまでうまい物を食べ、大切にされて、氣樂に駮の中で日を送りました。(をばり)





七一



七〇



猿の目片

(話童 藤 押)

馬 一 保 久

それはまだ、お釋迦様がお元氣で暮してゐらつしやつた頃の事です。ですから、今から何年程昔の事か私には分りません。

その日は、まだ夏の末とはいへ、ずるぶん暑い日でした。殊に土地柄が土地柄ですから、お釋迦様は、汗びつしよりになつて、重たい荷をかついで、山の麓を歩いてゐらつしやいました。

恰度そこを流れてゐる川の川上に一人の貧しい爺さんが住んでゐて始終自分の不仕合をなげいてゐました。もつともいけない事は、その不仕合がまるで他人の仕業であるやうに思つて、いつもう、世間を呪つて、自分で其の不仕合を除かうと

した事はありませんでした。

その事をお聞きになつたお釋迦様は、大變可哀相に思つて、その暑さをも厭はず、毎日さうして、遠方からおゐでになるのです。そして、い、方へ其の貧しい人を導いて行かうと考へてゐらつしやいました。

餘り暑さがきびしい上に、少し草臥れて來ましたので、川岸の木蔭に腰を下して、何の淀みもなく、氣持よく流れて行く水の面にうつとり見とれてゐらつしやつた時です。山道の方から、聞きなれぬ泣き聲、ほんとにそれは人の泣き聲にしては、奇妙に變つた聲が響いてきました。

「誰れだらう。」

お釋迦様は、振り返へつて御覽になると、一匹の猿がおい／＼大聲に泣き立て乍ら、下つてくるのです。しかも、片方の目からは、眞赤な血がほと／＼と流れ落ちてゐます。情深いお釋迦様は、不憫に思

つて、

「猿さん、猿さん。」と二聲、三聲呼んで、お招きなさいました。すると、猿も何となく偉い賢い方と察してか、嬉しさうに近づいて來ました。

「お前、一體どうしたといふのか。」

お釋迦様は、親切に垂れる血を拭きとつてやり乍らお訊きになりました。

「はい、御親切に有難う存じます。ほんとに私は馬鹿でした。」と、猿は氣恥かしさうに、赤い顔を一層赤らめながら、申しました。

「まあ、どうしたのか。自分で、自分の愚かさが分るといふ事は、ほんとにいゝ事だ。それにしても、お前の一方の目はつぶれてゐるぢやないか。詳しく話して御覽。」

さう問はれて猿は、目の痛さを堪へ乍ら話し出しました。

「どうぞおき、下さいまし。實は……」といひかけ

て、も一度目の痛さに顔をしかめて、續けました。
さて、猿の話はかうです。
もと、その山に、片目の夫婦猿が住んでゐました。
二人が大變仲よく暮してゐるうちに、赤ちやんが生
れました。所が不思議な事には、生れた赤ちやんも



また片目でした。
さうして、だん／＼猿の子供は殖えましたけれど
一匹だつて、片目でない者はゐませんでした。また
孫たちも、片目でした。やがて全山、片目の猿ばかり
が住むやうになりました。
もしそのまゝだつたら至つて平和な片目猿の村で
したけれど、或日の事、そのお釋迦様と話してゐる
猿は遠方の山からその山へやつて來たのです。勿論
その猿の故里は、親兄弟、お友達みんな、そんな片
輪ちやなかつたのです。その猿も立派に兩目の猿で
した。

麓までやつて來た時、丁度そこで遊んでゐた、そ
の山の猿の子供達は、聲を揃へて笑ひころげました。
「お猿が來たよ、
兩目の猿が。
かたはの
兩目のお猿が來たよ。」

その笑ひ聲に、向たくさん集つて來た親猿達も、
その變なお客を遠巻きにして、手を打ち乍らはやし
立てました。



片輪といはれて、さすがにそ 猿は腹立ちました。
「何だ！ か はつて、誰れだッ！ お前達こそ片
輪ちやないか、片目のくせに。」
さう罵り返へすと、みんなは、またどつと笑ひま
した。
「俺達がかたわだつて？ よくいへたねえ。此の山
の奥へ奥へいつて見い。住まつてゐる猿は、みんな
片目だい。兩目こそ片輪だい。」
「馬鹿ッ！ そんなことがあつてたまるか。俺達
の兄弟も友達もみんな兩目だよ。」
「理窟はよせ〜。遠慮はいらぬ。ずつと山奥へ行
つて見るがよい。」
「片輪の猿は
兩目の猿は
氣ちがひでござる。
兩目の猿は
氣ちがひ猿。」

片輪でござる。」
みんなは、さう歌ひ乍ら、てんでに住居へ歸へて
行きました。

獨り取残された兩目の猿は、ほんとにいまいまし
くつてなりません。淋しくつてなりません。決して
そんな馬鹿げた事はないと信じ乍らも、山道を登つ
て行きました。

すると、驚きました。逢ふ猿、逢ふ猿、みんな片
目ちやありませんか。却つて、今まで、兩目を誇つ
てゐた自分が、彼等から片輪扱ひにされさうで、悲
しくてなりませんでした。せめて一匹でも兩目の猿
に出逢へばいゝと思ひながら、進めば進む程望み
はかなへられさうではありません。

三日目になると、もう自分も兩目で歩く事が何と
なく気がひけてなくなりました。それで片目は
つぶつて歩いて行きました。然し後にはつぶつてゐ
るばかりでも安心されず、相手のみんなが、自分の

秘密を知つてゐさうで、たうとう十日目に當るその
日、その猿は、淺はかにも自分の片方の目を岩角に
ぶち當て、つぶしてしまひました。

目をつぶした刹那の痛さはどうでしたらう。それ
にもまして、兩目から片目になつた後の猿の不自由
さはどんなでたらう。

お釋迦様は、心から同情してその猿の話にきゝ入
つてをられました。

其の日、お釋迦様は、貧しいお爺さんのところへ
行つて、途中で猿から聞いた話をしてお聞かせにな
りました。

今まで不平ばかりいつてゐた爺さんも、はじめて
自分の生活が、まるで片目になつた猿の身の上と同
じだといふ事に氣づいて、それから元氣よく働き
ましたので、やがて幸福な身の上となりました。

(をばり)

桃太郎後日譚

豊島百合子



昔々、大昔、桃から生れた桃太郎さんは、おぢいさんおばあさんに
養子をつくらせてもらひ、それを機につけて、猿、犬、雉をお供に
つれ、鬼ヶ島へ行きました。そして、みごとに大勝利を得て、たく
さんの寶ものを分捕り、めでたく凱施したといふお話のつゞきです。

桃太郎さんはその先登に立つて扇を打振り打振り大威張りでした。
さうさう、つい忘れてあましたが、まだそのうへに、鬼ヶ島の大將
の赤鬼の息子の白鬼を、ひとり捕虜にしました。そして、その白鬼
を後に従ひ、めでたくおぢいさんおばあさんのところへかへつて來
ました。

おぢいさんおばあさんは、桃太郎さんの顔のみただけでうれしい
のに、たくさんの寶物を見たので、たまげてしまひました。そして
つくづく桃太郎さんの考へのいと、力があるのにと感心しま
した。殊におばあさんは、

「よう歸つて来ておくれたつた、桃太郎。」
といつて、しよぼ／＼した目につばい涙をためて喜びました。

「めでたい」とおいらさんも大よろこびです。

村の人達も大ぜい来て桃太郎さんの凱歌を祝ひました。

實もの床の間に飾り、さつお祝ひの酒宴がはじまりました。

まづ正座には桃太郎さん、その次にはおいらさんおばあさん、鬼
猿、犬、雉などが並び、その向側には村の人たちが坐りました。

ご馳走が深山に出て、呑めやうたへやの大騒ぎです。お酒のおは
おふくといふ下女がいました。

桃太郎さんは大ご機嫌で、たくさん／＼お酒を呑んで酔拂ひまし
た。愉快に唄をうたつたり、鬼ヶ島征伐の手柄話したりしました。

しかし、ふと桃太郎さんが、見るとおんなしに鬼を見ますと、お酒も
呑まず、ご馳走も食へないで、しよぼ／＼と泣きさうにしてなりました。

「鬼君、君はなんでそんなにぼんやりしてゐるのだ。しかも何にも
食へないぢやないか」とひますと、この時鬼はやつと頰を上げて、
桃太郎さんの方を見てニコッしました。

「いえ、いたゞきます」といひましたが、しばらくしても手をつけ
ません。桃太郎さんは不思議に思つて、どうしたんだ。君はこんな
ものいやなのか。それとも人間世界がいやなのか」と訊れました。

すると、この時やつと鬼は答へました。

「いえ、ご馳走もいたゞきたいのですし、また、人間世界も大へん
面白い、いゝ所だと思つてゐるのですが、どうもなんだか恥しいや

うな氣がしますので……。」

「なに／＼そんなに恥しがらなくてもよい。遠慮なく食べたり呑
んだりせよ。」

桃太郎さんはさういつて、鬼にご馳走を食べさせました。

桃太郎さんは、みんなが充分に呑んだり食べたりしたのを見て、
鬼に向つて、

「おい、鬼君。どうだ、おまへのお得意の鬼ヶ島踊りをやつてみな
いか」とすすめました。

鬼は恥しさうにして、下手だからと断りましたが、桃太郎さんは
むりやりすすめ、鬼をみんなのまん中に押し出しました。鬼は仕
方なしに、立ち上つて踊りはじめました。ところが下手どころか、
なかく／＼と手で、みんなを感心させてしまひました。

「鬼でもあんなに上手なものかな」と皆が口々にいつて、賞めまし
た。

間もなく、鬼は踊り終つて下りますと、こんどは桃太郎さんが立
つて、床の間に飾つてある實ものうち、打出の小槌を持ち出して、

「さあ／＼みなさん、いまから私が、小判を振り出してあげます」と
いひました。そして、打出の小槌を振りながら、みんなの頭の土に
小判を打出しましたので、みんなはきやつ／＼騒ぎ乍ら、奪合ふや
うにして取りました。

やがて酒宴も終り、村の人たちも歸つて行きました。

あくる日になりますと雉はもと古栗の山奥へ歸りたいと云ひ出



しました。そこで桃太郎さんは、たくさん小判を與へて返しました。

桃太郎さんは今年十六になつたつです。おいらさんは桃太郎さん
に元服したがいとすゝめましたので、頭を剃つて元服しま
した。

すると、これを見てゐた白鬼が、

「わたくし人間になりたうございます。どうも人間世界に這入つ
て来て、こんな發であるのもへんですから……。」といひました。

桃太郎さんは成程と思つて、

「では、おまへも元服しろ」といひました。そして、白鬼の頭を生
えてゐた二本の角を、髪をつけて痛くないやうに扱きとり、頭を剃
つて人間の通りにしますと、ちよ／＼と元の鬼らしい様子がなくなり、
立派な男になりました。それをみて桃太郎さんもよろこぶし、白鬼
はもちろんの大よろこびでした。そこで桃太郎さんは、人間世の名
前をつけてやらうと、鬼の一字をとつて鬼七とつけてやりました。

すると、その時この有様を傍で見てゐた猿が、ねたまさうに
鬼七の顔をじろ／＼みつめてゐましたが、とうとうおしまひに堪ら
なくなつて

「桃太郎さま、わたくしにも元服させて下さいまし」と頼みました。

これを聞くと、桃太郎さんは吹き出してしまつて、

「おまへが……ははは……と笑ひ出しましたが、

「お前は今までは人真似をする奴だとはかり思つてゐたが、こんど
は鬼真似だな。だがお前に元服しても、鬼七のやうないゝ男にはな
れないぞ」といひました。

「おれ、それでもいつてなかく聞き入れません。桃太郎さん、仕方なく、頭を割つてやつたり、からだの毛を切つたりして、どうかかうか元服させました。しかしそのとつたら、とてもみられたさまでありません。桃太郎さんも鬼七もお腹を抱へる程笑ひました。猿はますくいまいましがつて、ぶり／＼怒り出しました。でも、まあ／＼どうやら人間重みになつて、名も猿六と呼ぶことになりました。」

三

さて、鬼七の立派な姿をみた下女のおふくは、鬼七のおかみさんになりたいたいと思ひました。で、或る日、そつと鬼七にこのことを話しますと、鬼七もよろこんで承知しました。ところが、この事を知つた猿六は、おふくを自分のおかみさんにしたいと思つてゐたところですから、まづ赤になつて怒り出しました。そして、折をみて、桃太郎さんに二人のことをさん／＼怒り出して、二人が桃太郎さんの家にゐられないやうにしました。桃太郎さんばもと／＼、猿六の根性わるのことは知つてゐましたが、あまり猿六が方々へ行つて二人の悪口をしゃべり廻つてゐるまいもので、だまつてゐるわけにも行かなくなつて、とうとう二人に眼をやることにしました。しかし、桃太郎さんは、二人をそばへ呼んで打出の小槌で二人の頭を十べんづつ叩いて、その小判を興へました。二人はよろこんで、桃太郎さんにお禮をいって歸つて行きました。そのあとで、桃太郎さんは猿六を呼びました。そして

「おまへも歸れ。」といつて、打出の小槌で猿六の頭を二べん叩きました。すると、猿六は「一べんとは情けない。」とぐらをこぼしました。しかし、桃太郎さんがこぼし顔をして眺みつけてゐるので、あわてゝ、小判を持つて逃げるやうに出て行きました。」

四

桃太郎さんの家を出た鬼七とおふくは、或町で家を借りて、桃太郎さんから貰つた小判をもとでして煙草屋をはじめて、いたつて夫婦仲よく暮してゐました。ところが、猿六の方では、いま／＼しいやら、くやしやうで、なんとかして鬼七をひどいめに逢はせ、殺してもやりたいと思つてゐました。が、桃太郎さんの家を出てからといふもの、鬼七たちの行方が知れないので困つてゐました。或日、鬼七の家へ犬がそつと見舞ひに来ました。二人はよろこんでもなして、桃太郎さんの家の様子など聞きました。犬は、猿六が怒んで、お前たちをならつてゐるからと注意して、鬼七の家を出ました。ところが、そこでつたり猿六に出逢ひました。「やれ／＼、悪いやつに出逢つたわい。」と思ひましたが、何知らぬ顔をして、たゞおじぎをしながら行つてしまひました。猿六は、毎日々々、鬼七らばどこにゐるだらうと血眼になつて探し廻つてゐるところへ、犬に逢ひましたので、その見世はだれの家ののだらうと、中を覗き込みますと、店の帳場に鬼七が坐つてゐるぢやありませんか。

「おのれ、こゝにゐるやがつたな。畜生、おぼえておれ。」猿六は顔中ぶる／＼聲はせて怒りました。その時は獲物はなし、鬼七をどうするとも出来ないで、其ま／＼自分の家へかへりました。

五

それから二三日経つて、朝早く、鬼七の見世の表に、刃物をふところにした猿六が現れました。鬼七は、じぶんの身が危くなつてゐるとも知らず、ちやうどお客があつたので商ひをしてゐました。そこへ猿六が、刃物を振廻して飛び込んで來たのです。「おのれ、鬼七、につくい如め。覺悟しろ。」猿六は目の色を變へて、鬼七にどりか／＼りました。それにおどろいたお客は、あわてゝ逃げようとしたが、そのはずみに、鬼七に向けた刃物が、眼つてお客の胸を刺しました。お客は血に染つて、ばつたり倒れました。

鬼七はびっくりかへるほどおどろいて、「助けてくれえ——」と叫びながら外へ飛び出しました。「おのれ、逃がすものか。」猿六は鬼七の後を追ひかけました。おふくは店先が騒しいので、どうしたのだらうと思ひ乍ら出て來ますと、このありさまで、驚いて猿六の後を追ひかけました。鬼七は逃げられるだけ逃げて、とうとう或お寺の中に這入りました。そして方々かくれ場所を探してゐるうちに、ふと釣鐘が降してゐるのを見つけたので、その中に這入つて身をかくしました。

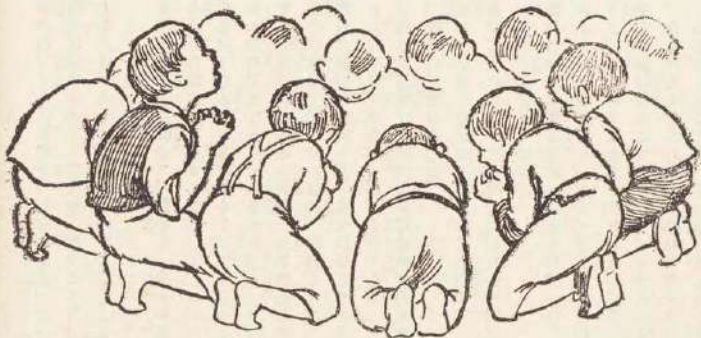
その後、猿六が追つて來ました。鬼七はどこにゐるかと思つて、それを見つけた揚句に、釣鐘に目を付けて、釣鐘の中へ、やうと釣針に手をかけますと、そこへおふくが、どこから持つて來たのか、手に鐵砲、もつて飛んで來ました。そして、いまや釣鐘を引開けやうとする猿六が目かけて、撃たうとしました。

ふと猿六が坂向くこの有様ですから、おどろいてしまつて、あわてゝ、物の松の木にかけ上りました。その早いことは、長年山で練習したせいでありませう。でおふくは撃つたのですが、その彈丸は釣鐘にあつただけでした。そのすきに猿六は松の木を飛び降りて鐵砲を奪ひ取つて、火繩に火をつけて、おふくを撃ち殺さうとしました。この危いところへ、急を聞きつけて、桃太郎さんが駆けつけて來ました。桃太郎さんは、猿六の油断をみすまして、後から廻つて、鐵砲をもぎ取りました。そして、猿六があわてゝゐるところを、「おのれにくき奴、貴様のやうなやくざ者は、命をとつてくれる。」といつて、鐵砲を向けましたので、猿六は膽をつぶして、逃げ出しました。

さて、この事があつて後、猿六はずつかり今迄の自分の行を後悔して、桃太郎さんをはじめ、鬼七やおふくにも詫言ひましたので、桃太郎さんもゆるして、これ迄通り猿六を使つてやることにしました。鬼七とおふくとは、その後夫婦仲よく、大層仕合せに暮したといふことです。(をけり)

十五少年漂流物語

霜田史光



一、危い！ 危い！

時間は次第に過ぎました。午後二時頃になると傾いてゐる船の左舷がまづ起き上りました。しかしまだ船首は岩にくっついていて動揺しません。浪は大きく強く、遠慮もなく船の横腹を打ちつけるので、その度に船はまるで物におびえたやうに揺さぶりに耐ふるひしませぬ。少年達は今は恐ろしさと危なさに互に抱き合つて深へながら、やつと事海に振り落されるのを防いでゐました。

先が見えなくなる位でした。船はその時、ワツと物凄いや音を立てたかと思ふと、急に浮き上つて、荒馬のやうな浪に蹴られて矢のやうに走り出しました。

南無三！ しまつた！ と思つて少年達は眩暈がしました。しかし、それも瞬く間で、船は忽ちの間に、岬の端の砂濱の上に乗りに上げてゐるのに気がつきませんでした。

今はもう、遠く望んでゐた緑の林も目の前に來てゐます。振り返つて見ると、今自分達を船と一緒に連れて來たあの大浪は、もうやつと遠くの方に退いてゐて、先刻あた暗礁のあたりで、相懸らず白雲のやうな飛沫を上げながら、白馬のやうに荒れ狂つてゐます。

二、四邊の觀察

船は幸ひにも大浪に壓されて、一飛びに岩を乗り越えました。その底板は大層傷められました。ところが角も無事に砂濱の上に乗つてしまつたのですが、それから一時間以上も過ぎましたけれども、陸には人らしい影も見えません。林の向うには、一つの小さな流があつて、海にそよいでゐるやうですが、まだその上には、一つの船さへ見えないのです。

「僕達は幸ひにも陸に着くことが出来たけれども、これはどうやら無人島のやうだね。」とゴルドンが云ひました。

「僕達はさしむき、年下の者達を入れて置くやうな家を探さなきゃならぬ。この地が何の國の領分だか、そんなことは後からゆつくり調べればいゝとして、僕は少しばかりその邊を見て来るよ。」

アリアンはゴルドンと共に船を下りて、森の方へ行つて見ますと、この森は岩壁と川との間にあつて、岩壁の方に近づくにつれて、いよいよ大木が繁つてゐて、その中へはひつて見ると、深山のいろはの樹は自然に倒れたまゝに腐つてゐて、落葉は昔から積み重つてゐると見えて、膝まで増める位です。四邊

は森として、何の物音もありません。森を出て岩の所へ行つて見ましたが、其處はまるで屏風のやうに二百尺もつツ立つてゐるので、とても攀ち登ることも出来ません。それから岩壁の下を條々、南の方へ半時間ばかりゆくと、先刻見た小川の右岸に出現した。そしてあの岩壁の上へ登つて見たら、四邊の様子がよく見えるだらうと思つて、此處まで來たのですが、ゆくにもゆかれる岩壁にまた突き當つてしまひましたので、止むなく船の方へ引返しました。

二人は船に歸つて、他の少年達に自分達がいま見て來た様子を話しました。そして當分船に住んでゐた方がよさうだと話して、船からは梯子を砂濱の上へ下り、年下の者も樂に出入が出来るやうにいたしました。船は大分傷められてこそありますが、まだ雨風を防ぐには差支へがないのでした。

モコはサーヴキスの力を借りて、少しばかり知つてゐる調理法で、晩飯の用意をいたしました。そして皆が食卓についた時は、ニウサイランドを離れてから久し振りで安心して食べられるので、センキンス、イバソン、

ゴスターなどの幼い者達は、もう揺さぶる叫び聲さへ上げてゐるのです。たゞ野しいのは、ふだん學校中でのいたづら者と云はれてゐるアリアンの弟ジャックが、センキンス達の嫌しうな笑ひ聲を聞いても、自分は獨り片隅の方に寄つてしんぼりと坐つてゐることです。中には、どうしたのか、と尋ねる者があつても、ジャックは外の事を云ふばかりで、その事は少しも申しません。

晩飯がすむと、少年達は二十幾日の間の疲れがすぐに出て、眠くなつたので、皆自分の寢床に行つてしまひました。然し、アリアン、ゴルドン、ドンパンの三人は、もし猛獸や野蠻人が攻めて來ないとも限らないと思ひましたので、代るく甲板に張りをして夜を明しました。

翌る日は朝早く皆起き出して、自分達が幸ひにも助かつたこと、神様に感謝の祈りをあけて、それから船の中にある食物を調べました。食物は乾パンの外に乾菓子、鹽漬の豚肉、鴨づめ、燻牛肉、鹽漬の魚などで、儉約して用ゐてゐれば、これからあと二ヶ月位は支へて行くことが出来さうです。しかし、

少年達はこれだけの食物で、いつまで持つのかばかり先を居食ひしてある際にはゆきませんで、鐵砲で環をしたり、魚取りをしたりして、それで少しでも長びかせるやうにしなければなりません。幼い者達には深山の釣糸をやつて、モコーをつけて釣をさせることにしました。そして年上の少年達は、船の中で残つてゐる品物をよく調べて見ます。帆布、麻細、鐵の鎖、鐵銃一組、投網、釣糸、其他魚取りの道具と鐵砲八丁、外に鴨打ちの鐵砲一丁と連發短銃一ダース、それから火薬と、これは帆布三百個、各々廿五磅づきの砲薬のはひつてゐる面が二つ、鉛塊とそれから大小の銃丸が少してばかり。

夜中の信鼓に用ゐる鐘火具一組、船の上へ備へてある二門の大砲の爲めには砲包と彈丸が三十個。

また料理の時や食事の時に用ゐる鍋釜から皿の類まで、二十幾日の原のために大分傷められましたけれども、まだ少年達が使ふには充分です。

毛織、綿糸の織物、フランネル、リンネルなど澤山あります。また寢床のための薄團や

道具は少年達には餘るほどあります。この外晴雨計二つ、百度わりの寒暖計一つ、時表二、メガホン、望遠鏡二つ、コンパス大小一つづつ、これか、来ようといふ暴風雨を前以つて知らせる暴風雨計一つ、イギリスの旗六つ七つ、信旗一組、二つした大工の小道具、針、糸、鉋、鋸、マツチと燧石、火鋸各々少しづつ、ニールランドの近所の詳しい地圖が五六枚、これは少年達に用はないでせうが、別に世界地圖が一枚ありますからこれには大分用があるでせう。本のある室には、英語や佛蘭西語で書いた旅行記のやうなものや、冒險譚などが相當にあります。又鉛筆、インキ、紙、それから一千八百六十年の曆が一冊あります。バクスターは、これからこの曆についてその目を思ひ出したが、今迄のことを書き置かうと云ひ出しました。又金貨で五百磅のお金があります。お酒類の樽は破れて漏つてしまつたものが少くありませんが、まだ葡萄酒とモロリーが百ガロン(二石四斗)シ、ブランデー、ウイスキーが五十ガロン、ビールは二十五石程あります。これだけのものがあれば、少年達は幾月か

の間は大抵不足なことはない筈です。

三、島か、大陸続きか

一體この地は島なのか大陸の續きなのか、それは一番に少年達が知りたいことですが、今だにさつぱり判りません。とも角も熱帯地方でないといふことは、森の中に柏や松や檜や山毛櫨等が澤山あるのから考へて見てわかります。それに森の中は落葉が澤山積つてゐて、松や檜の外あまり青い物が見えないことから考へると、ニカシラランドよりもつと南に寄つた高い緯度に位するかも知れません。ほんたうにさうなら、この冬は随分寒いに違ひありません。

何しろぐづぐづしてはゐられません。早く何んとかしてこの地を去るか、助け船を見つければかなくてけならないのですが、それも幾日の後、又は幾月の後、事によると幾年の後に、その幸せな運が向いて来るのかわかりません。とも角もいまは、この地の様子をよく知つてゐなければなりませんので、それはアリアンが探検にゆくことになりました。まづ脚の高い所へあがつて、見渡すやうから

うと云ふのでした。脚は船のある所から三里ばかりの所にあつて、その突鼻は三百尺以上も高くなつてゐますので、其處なら近所五六マイルの間は見渡すことが出来ませう。然し折から天氣が悪くなつて、それが二日三日も續きましたので、アリアンはその探検に出かけることも出来ませんでした。

その間にもアリアンは、モコーと共に水夫達の行李の中から出て来た荷物を、不手ぎはながら縫ひ直して、年下の少年達が冬の寒さを防ぐ用意をいたしました。また幼い少年達は、海や川で毎日魚取りをしては食物の足しにしてゐました。

かうして晝の間だけでも楽しく過ごすことが出来ましたが、夜になつて淋しい床の中で、少年達がなつかしい故郷の父母の夢を見る時は、どんなに哀れでせう。夢から覺めて涙を流すのは、一人や二人ではありません。

十五日になつてから、天氣もよくなつて、晴雨計は明日の晴れを指したので、アリアンはいよいよ明日、例の探検に出ることにになりました。



やつと脚の下まで行き着きました。此處でアリアンは、袋の中から食物を出して食べながら見ますと、海の中には澤山の魚が黒くなるほど泳いでゐます。その間には二三の海豹が、水から頭を出したりひつこましたりして遊んでゐます。すると、急に頭の上に着がしたので、見上げると、マンギン島の群が飛び過ぎました。このマンギン島は南極地方によくある島ですから、そんなこと考へても、この土地が思つたよりすつと南極に近いのだと云ふ事を知つて驚きました。それと同時に、アリアンの頭には、この冬がどんなに寒いか、どうして自分達が過したらいよいよかといふことが考へられて、ぞつとしたのであります。

四、水平線に見える

三つの黒點

アリアンはやがて脚の上に攀ち登つて、望遠鏡を取り出して東の方を眺めました。内地の方に山らしいものもなく、平面の平野で、晝何時かと思はれる程の森がそれを覆つてゐる

ました。そして所々に、川がその間を縫ふやうにして流れていますが、その末は皆海に流れ入つてゐます。恰度十一マイルの間、眼の届く所はそんな景色で、これではまだ大陸の續きだとも鳥だともつきりません。北の方を見ると、アリアンの尾元から七八マイルの間は、浪が白く躍る海岸が真直に續いてゐて、その終りの方には、また一つの岬があります。その岬の向うには、砂漠かと思はれる程の廣々とし、砂原があつて、白々と見えまゝです。又南の方に望遠鏡を向けると、海岸はだん／＼と東南の方へ折れて、灣邊の内がは一面の沼です。

若しこの地を鳥だとした所で、餘程大きな鳥らしく思はれます。然し、何處を見ても人の住んでゐるやうな様子が見えないので、何れも落膽してしまひました。アリアンは又望遠鏡を上げて西の方の海を見渡しますと、その時、西に傾きかけた太陽は、波の上にキラキラと輝いて見る眼が眩い中に、三つの小さい黒點が、海の上につき出てゐるのを見ました。「や、船」とアリアンは始め思はす叫び出

見て来たことから、この地が大平洋のたゞ中の一無人島らしいと語すと、少年達の顔色は皆青ざめてしまひました。けれども、いつもアリアンに選つてゐるドノバンは、アリアンの説に反対しようと思ひました。そしてその事が本當でない方が、少年達にとつては幸せなので、これは鳥でなくて、大陸の趾つゞきだと云ひたいのです。アリアンは見違つて来たのかも知れないから、自分が行つてよくそれを見定めないうちは、信ずることが出来ない。ドノバンは云ひ張りました。ドノバンの少年達は、皆この言葉に賛成したし、ホルデンももう一度よく聲で調べて見たいと云ひ出しましたので、とうとうまたしつかりした探検隊を作つて、それを確めに行かうと云ふことになりました。そしてアリアン、ドノバンの外に、カキルコクスとサーゲキスとが隨いて行くことになりましたが、その翌日から雨がまた降り出して、翌日も止みさうもありません。その間少年達は、糞に出たり、魚取りに出たり、船や着物の破れを繕つたりして暮らしました。

三月も過ぎて四月の始めとなりました。もう一月しすると、寒い冬が来るのです。此頃の寒さから考へて見ても、この冬がどんなに激しい寒さであるかと思はれます。それにスローの破れ個所は、風雨の爲めにだん／＼大きくなるとばかりで、この先何ヶ月も船の中で暮すことは出来ないと考へまし

探検に向ふことになりました。五、四人の探検隊 翌る日の朝、四人はアリアンと云ふ犬を連れて充分の用意をして、一人に四日分づゝの食べ物を買つて、いよいよ出かけました。四人はとも角も、先日アリアンが登つて見

まひました。そして眞先に登り切つたドノバンは、望遠鏡ですぐ棟東の方を見ました。「ドノバン君、向うに海ら、いものが見えるかね」と、キルコクスが訊きました。「いや、見えなね。見渡す限り森林だよ」と、ドノバンが答へました。アリアンは、

たので、少年達ほどこかへその住居を代へなければなりません。この日晴雨計は念のぼつて、明日晴雨であることお知らせました。そして風もすつかり止みましましたので、いよいよ明日は東の方の

たと云ふ岬の上に登つて見てから、東の方へ行かうと云ふことになつて、岩壁の下の海岸を傳つて一里ばかり進んで行きますと、先に歩いて行つたサーゲキスが、見つけた岩壁の割れ目の所を、四人はやつと此事登つてし

「此處は、僕が此間へ来た所より百尺以上も低いから見えないうだらう。あの森林を眞直に行つて見ようぢやないか。さうすれば、



海があるかどうか判るかられ。」
 ドノバンは前の方幾里となく續いてある森
 林を見、それは餘り骨の折れる事であつたら
 ぬと一度は云ひましたけれど、外の二人が
 行かうと云ひ出したので、遂に決心して
 行くことになりました。そして四人は、此處
 でまづお辨當を食べて腹をこしらへ、今度は
 その岩壁を東の方に下つて行きました。それ
 から半里ばかりの間は、平らな草原で、所々
 に格や、バーベリーなどと云ふ狭く寒い所
 にも生えるやうな草がありました。やがて大
 森林の中へ進入すると、深山の樹は倒れたま
 に腐つてあたり、立木の間には雑草が生ひ繁
 つてゐて、その中を歩いてゆくのは中々の骨
 折りで、それでも四人はちつとも怯まない
 で、午後二時頃一筋の浅い小川のほとりに出
 ました。

少年達は草の上に腰を下して、暫く此處
 で休んでゐました。川の水は澄み透つてゐて、
 川底の石まで数へられる位です。水の上には
 一枚の木の葉も流れて来ない所を見ると、こ
 の川の源が此處からさう遠くないものと思
 はれます。と、不思議なことは、その川を横
 切つて、點々として平たい石が置かれてあり
 ます。石と石との間はほゞ同じで、まるで人
 間が歩いて渡るために置いたやうに見えま
 す。この川は此間アリアンが見たと云ふ東の方の
 海に流れ入つてゐるものかも知れないから、
 この川について見つて見ようと思ふことにな
 つて、四人はその徒跣を渡つて、川について
 下りました。川の流ればゆるくて、幾曲りも
 しながら森林の中を流つてゐます。少年達は
 時々頭も隠れる位な雑草のために、互に聲を
 かけ合ひながら進みました。川はだん／＼と
 曲りなりにも東の方へ向つてゐますが、いつ
 の間にかそれが北の方へ反れてゐましたので
 四人はがっかりして川に別れ、また東に向つ
 て進み始めました。その中に日が暮れて、七時
 になりましたけれど、少年達はまだ森林の
 中から出ることが出来ません。一體、あんな
 ほどまで狭いてゐるのでせう。四人は仕方
 がないので、この森の中で一夜を明すこと
 になりました。

木は幾百年とも知れぬ程の大木ばかりで、空
 の星さへ見ることが出来ません。
 然し、少年達は晝間の疲れで、いつの間
 にかぐつすりとして眠りこんでしまひました。犬の
 フアンは、暫らくは四人を守つてゐましたが
 これもやがて眼を閉ぢてしまひました。
 翌朝の七時、四人は眼から覺てこゝを出
 ようと思つたが、真先に外に出たサービス
 が、大きな聲を出し、驚きながらいひました。
 「君達、早く此處へ来て見ないか。」と云ふの
 で、他の三人は驚いて飛び出しました。
 成程四人は互に驚きました。
 と云ふのは昨夜木の蔭だと思つて宿つた所は
 木の蔭ではなくて、樹の枝で纏んで造つた小
 舎なものでした。それも建てゝから幾十年たつ
 たかわからぬ程で、屋根も壁もやつとさうら
 しいと思ふ程しか残つてはゐませんでした。
 「うむ、これで見ると、この地は人無し國ぢ
 やないぞ。今はとも何として、昔は確かに人
 が住んでゐたんだ。」とドノバンは驚きさうに
 云ひました。アリアンも、
 「これでやつと、昨日渡つた徒跣のことも判つ
 た。」と云ひました。

四人は方づいて、この小舎
 を出ました。東の方へ向つて
 どん／＼歩き出しました。や
 がて十時頃になつて、やうや
 う森林の外に抜け出ることが
 出来ました。森の外は平地で
 いろ／＼な雑草が生ひ繁つてゐ
 ますが、八町ばかり先は一向に白
 い砂で、それが長々と續いて、その
 前はアリアンが此間見たと云ふ海で、
 程かな波が、限りなく續いてゐました。
 今はもう疑ひもなく、これは大地の續きでな
 くて、大海の中の離れ島だつたのです。
 四人は平地をつたつて激速に出て、前の海
 をうらめし氣に見守りながらお辨當を食べま
 した。その間も四人とも落膽して怖れてしま
 ひ、言葉を出す者もありません。お辨當を食
 べ終へてから、ドノバンはつと立ち上つて、
 「さア、行かうぢやないか。」と云ひました。
 早く歸り路につけば、日の暮れない中にス
 ロー號に行かれるかも知れないからです。四
 人はそれでほと云ふので立ち上つて、もう一
 度廻めしさに海の方を見返つて歩き出さう



とした時、犬のフアンが水際へ駆け行つて
 ベチャ／＼とささ美味さうに水を飲み始めま
 した。ドノバンはそれを見て、自分も行つて
 水を手にとつて見て、また飲んで見ますと、そ
 れには少しの鹽氣もなく、まつたくの淡水で
 した。
 それもその筈、四人が海だとはかり早合點
 してゐたのは、實は廣い湖だつたのです。
 これが海でなく湖だと知れると、この土
 地がまた大陸の續きか、島か、やつぱり列ら
 なくなつてしまひました。
 「もし大陸だとしたら南アメリカかも知れな
 いね。」とアリアンが云ひました。
 「僕は始めからさう思つてゐたんだ。僕の思
 つてゐたことは、どうやら間違つてゐなかつ
 たやうだね。」とドノバンが云ひました。
 二人が話すやうに、もしこゝが本當に大陸
 の續きだとして、人のあさうな東の方に旅を
 するにしても、この冬を越した幾月かの後の
 春でなければ駄目です。ですからそれまでこ
 の地に住むにしろ、その長い幾月かの間を
 暮すためには、このやうな淡水のある近所に
 住居を造らうと思ひました。(つゞく)



九〇

盧俊義は、もとより水の中ではよく働けない人でしたから、船と共に水中に落ちた所を、待ち設けてゐた張順がいきなり小脇にかゝへると、ぐつとしめつけて、向うの岸に泳ぎつきました。そこにはもう五六十人の兵士が、待ち受けてゐて、張順が盧俊義を岸に上げると、すぐに縛らうとする所へ、山陣の大將戴宗が大急ぎで馳けて来て、

「盧俊義先生に繩をかけてはいかん」と怒鳴つて止めました。やがてあとから持つて来た立派な着物を出して、盧俊義の濡れた着物と着換へさせ駕籠にのせると、前後に火把を持つて警護して、山上を差して上つて行きました。すると山陣の中には、もう澤山の燈籠に火を灯して晝のやうに明るくしてあつて陣の前には宋江、吳用、公孫勝を先に立て、多くの大將達も居並んで、盧俊義の駕籠を迎へました。盧俊義は駕籠から下りるとこの光景を眺めて、

「私はもう擒となつた身の上であるから、すぐに殺

されるだらうと思つてゐたのに、どうしてこんなに手厚く出迎へて下さるのですか」と宋江に云ひました。宋江は笑ひながら、

「いゝえ、決してそんな事はありません。ともかくこゝではお話しも出来ないから、あちらへ行つて、ゆつくり我々の心の中を聞いて頂きませう」と盧俊義をつれて、山陣の中に入つて行きました。盧俊義は宋江に従つて歩きながら陣中の模様を見ますと、どこもかも規則正しく整つてゐて、一兵卒の末に到るまで皆禮儀正しく、きちんとしてゐるので、心ひそかに感心して、なるほどこれは強盗などの類ではないと思つてゐました。やがて一堂の中に盧俊義を案内しますと、宋江は丁寧に禮をして、

「あなたのお名前はかね／＼聞いてをりましたが、いまお目にかゝつて心から喜んで居ります。また今日は大變に失禮なことがかりしました。この罪はどうかおゆるし下さい」と云ひました。吳用もすぐと

宋江のあとから、

「先頃私は、宋江の命令をうけて、占者となつてあなたのお館に伺ひました。その節は出まかせの八卦をお話して、今日あなたをこゝへお招きするやうにしましたのも、山陣の者一同があなたをお慕ひしてゐるからのことでした。この事をお考へ下さつてどうか我々と共に大義のためにあつまつて、朝廷の悪い役人共を亡すことに御賛成下さい」と懇々と話しましたけれども、盧俊義は、

「私はどうも、死んでもあなたの方のお話しに従ふことは出来ません。それに私は今日まで幸ひに身に一點の罪もなく、また家には相當の財産もありますから、山陣に留まる必要もありません」と云つて、どうしても背き入れませんでした。

盧俊義ほどの英傑も、この時すぐに宋江や吳用の言葉を背き入れれば、後になつて、長い間牢につながれたり何かするやうな苦痛をなめすにすんだので

すが、たゞその莫大の財産に心が残り、またその時代の事に明かに通じてゐなかつた爲めに、餘計な苦しみをしなければならなかつたのです。宋江、吳用は盧俊義の心の堅いのを見て、

「これほどお願ひしてもお肯き入れがなければ仕方がありません。然し折角山陣へおいでになつた事ですから、どうか四五日でも悠り泊つて遊んでいらつして下さい」と口々にすゝめたものですから、盧俊義も、

「私はこゝに泊て頂くのは差支へありませんが、私の家族どもがこの話しを聞いたら心配すると思ひますから、どうか早々歸して下さい」と云いました。

「いやそれは御心配ありません。まづあの李固に荷物を持たせて先に歸して、あなたはちぎに歸ると云つておやりになつたら、皆なで安心なさるでせう」と云つて、吳用は李固を呼び出して、車の上の荷物を調べさせました。

ある詩を見てもすぐに判る。一番上の字を一つづゝ取つて讀んで見ろ、それは盧俊義反くと云ふ事になつてゐたのだ。それだから盧俊義大人が再び北京に歸るなどは決して考へるな。お前達も元來なら皆な殺してしまふところだが特別に赦してやるのだから、家へ歸つたらよくこの事を云ふがよい」と話しましたので、李固を初め多勢の者は恐れ慄いて、大急ぎで逃げ歸つて行きました。

山陣の方ではその時、豪傑達が集つて、盛んに盧俊義を御馳走してゐました。吳用はそへ歸つてくると、何喰はぬ顔をして皆と一緒に盧俊義をもてなしてゐました。四五日經つて盧俊義がもう家に歸ると云ひ出すと、豪傑の中の誰か「今日は私が御馳走をする日だから」と云つてとめました。三十幾人ゐた豪傑が、さうして毎日毎日代る／＼に主人役になつて盧俊義をもてなして、引きとめてゐる中に、一月餘の日がたつてしまひました。

「何もなくなつた物はないか」と吳用が尋ねますと「一つも失くなつたものはありません」と李固が答へました。

「それならお前はその荷物を持つて先に歸るが好い」と宋江が、大金を李固に與へたので、李固は悪い夢から醒たやうに喜びまし。盧俊義も、

「お前は家に歸つたら、私は何の障りもなく二三日中に歸るから安心してゐると云つてくれ」と云つて李固と別れました。翌日李固は喜んで起きると、すぐに連れて來た人間に車を引かせて、山を下つて麓のところまで行きますと、多勢の兵士を従へて吳用が後から追つかけて來まして、

「おい李固お前に少し話があるから待て」と呼びとめました。そして、お前の主人の盧俊義はもう我々と約束して山に留つてゐる事になつてゐるのだ。殊に盧俊義は、まだこの山に來られない頃から朝廷に背く心があつたことは、盧俊義の部屋の壁に書いて

やがて秋も近くなつて、山の中に殊に肌寒く寂しい風が吹くやうになつて來たので、盧俊義は頻りに故郷のことを考へて、

「明日はどうしても家に歸る」と云つたものですから、その晩はまた改めて宋江が主人役となつて送別の宴を張つて、別れの盃を交しました。

翌日は山中の豪傑が一同揃つて金沙灘まで送つて來て、盧俊義に金銀を送つて残り惜しさうに皆なが別れを告げました。來る時は多勢の人を連れてゐたのが、今はたゞ一人きりとなつたので、盧俊義はしきりと先を急いで進んで行きましたので、やがて幾日かたつて、北京の城外につきましました。その日はもう日も暮れて城内に入ること出来なかつたのでその夜は、城外の宿屋に泊り、翌日朝早々起きて、城門を入つて行きました。すると向うの方から乞食のやうな形をした男が、盧俊義の姿を見て急いで馳けて來ました。頭に被つた頭巾は破れ、着物はぼろ

ぼろと切れ裂けて、見る目もいたはしい程汚い姿を

思ひながらつくつく見ると、それは燕青だつたの

九四

で一層驚いて、

「お前は どうしてそんな姿になつてしまつたのだ」と尋ねますと、

「こゝでは往來の人も多から、委しいお話も出来ません」と云つて、盧俊義を寂しい所に連れて行きますと、はらりと涙を流して、

「大公が梁山泊にお上りになつてゐる間に、李固が先に歸つて來ましてあなたはまだ宋公明の次



した男でしたが、盧俊義の前に近づくと慌しく地にひれ伏してお辭儀をしました。盧俊義は不思議に

に坐つて頭領になり、朝敵になつておしまひになつたから、歸つていらつしやる事はない、と夫人にお

話して、遂に二人で役所へその事を訴へてしまひました。それから後私も追ひ出されてしまつたので、どこか宿屋へ泊らうと思ふと李固が邪魔をするのでとうとうこんな乞食のやうな姿となつてしまつて、今日まで、あなたのお歸りをこゝで待つてゐたのです。あなたはもう家へお歸りになることは、危険です。あなたは今一度梁山泊へお歸りになつた方が好いと思ひます」と云ひました。

しかし盧俊義は、

「馬鹿なことを云へ燕青、たとへ李固が何と云はうとも、私の妻の賈氏はもと賢明な女だから、そんな事に欺される筈がない」と受けつけさうにもしませんでした。

「いや、李固が夫人を欺いてゐたのは昔からの事です。それが今日あゝして夫婦となつてしまはれた上は、どうしてあなたを安全にしておくのですか、どうか早くこゝをお立ち去り下さい」と尙も燕青が

云ひましたが、

「私の家は北京で名高い舊家である、何でそんな誤があるものか」と盧俊義は怒つて、引きとめる燕青を蹴倒して急いで家へ歸つて行きました。家の者は盧俊義の歸つて來た姿を見ると、みんな不思議さうな顔をしてゐる所へ、李固が急いで飛び出して來て、地に伏して、

「よくお歸りになりました」と云つて、奥の間へ從いて行きました。盧俊義はすぐに、

「燕青はどうした」と尋ねますと、

「いや燕青の事は一寸やそつとではお話しも出來ません。まづお休み下さい」と云つて李固は部屋の上に出でしまひました。すると、すぐに、夫人の賈氏が入つて來て、さめくと涙をこぼしましたので、盧俊義は、

「私が無事で歸つて來たのに、何を前は泣いてゐるのだ。それよりもまづ、燕青はどうしたのか話し

九五

なさい」と云ひますと、
「あなたは何より、お酒でもめし上つて、旅の疲れをお休めになつた方がよろしいでせう」

と云つて、賈氏も仲々燕青の事を話さうとしませんでしたから、正直な盧俊義にもだん／＼に家の中の様子に疑ふ心が起つて來ました。するとこの時、盧俊義の家の前後に「わーつ」と云ふ喊の聲が起つて、百人近い捕手の者が、家の中へ亂れ込んで來たと思ふと、呆れ果てゝゐる盧俊義を捉へてしまつて高小手に縛つて、梁中書と云ふ城主のゐる役所へ引張つて行きました。すると梁中書は



盧俊義を睨みつけて、

「汝はもと北京の人民であつたのにどうして梁山泊

と賈氏の訴へですつかり判つてゐるのだから、すぐと白狀してしまへ」と責めました。盧俊義はもとより心にもない事ですから、
「私は梁山泊の吳用に欺かれて山上に擒となつただけです。朝廷に背く心などは毛頭ありませんでした」と云ひましたが、盧俊義の傍にゐた李固は此の時進み出て、

「あなたが梁山泊の賊としめし合せて謀反をしようとなさつた心は、あの壁に書いた詩でも明かです」と憎らしく云ふ言葉について、夫人の賈氏もまた、「私は決して自分の夫を告はうと思ふのではありませんが、一人謀反を企てれば一家親族が残らず滅されてしまひます。私はそれを恐れて上に訴へ出たのですから、決して私をお恨みなさいませぬ」と冷かに云ひました。これを聞くと盧俊義は、今朝燕青の云つた言葉も思ひ合されて、惡者共の計に落ちた自分の愚かさを思つて、たゞ首垂れて黙つてゐまし

の賊と通じて朝廷に背いたのだ。お前が久しい以前から内々で北京を陥れようと思つてゐた事も李固

た。すると賈氏と李固は聲を合せて、
「もう今更後悔されても仕方のない事です。早く白狀して拷問にかゝるだけでもお免れなさい」と大きい聲で云ひました。すると張孔目と云ふ役人は、兼々李固から澤山の賄賂を貰つてゐるものですから、
「こいつは強情な人間ですから、ひどく拷問にかけなければ到底白狀しますまい」と梁中書に云ひましたので、すぐに下役人に命じて、盧俊義を引倒して鞭で滅茶々に打たせました。これはもとより白狀させる爲でなく、たゞ無理矢理に苦める爲にしたことですから、見る／＼中に盧俊義の身籠の皮は破れ肉は裂けて、血は滾々と流れ出ました。盧俊義は天を仰いで、「あゝ自分はどうせかうして殺されてしまふのだらう、それならば偽の白狀をしても、早く殺された方が好い。」と嘆息して、
「梁山泊の賊と通じてゐました」と云つてしまひました。すると張孔目はすぐ盧俊義に大きな頭枷を

はめさせて牢屋の中に入れてしまひました。

此の時に牢屋の牢番の頭役は、鐵臂膊蔡福と枝花蔡慶と云ふ兄弟の人でしたが、盧俊義を受取つて牢に入れて、兄の蔡福は自分の家に歸つて來ました。蔡福は町に出て家の方へ進んで行くと、一軒の茶亭の中から下男が走り出て來て蔡福を呼び止めたので、

「さつきから、私の家の二階であなたをお待ちしてゐる人がありますから、どうかお出で下さい」と云ひました。蔡福は不思議に思ひながらついて行きますと、そこには李固が蔡福の來るのを待つてゐましたが、その顔を見るとべこ／＼お辭儀をして、

「是非あなたにお願ひしたい事があつて來て頂いたのですが、これを聞いてくだされば尙厚くお禮をしますが」と云つて、まづ五十兩の銀を蔡福の前に出しました。蔡福はこれを見ると、「あは、」と笑つて「お前は主人を欺いて凡ての物を奪つてしまつた上

向この五十兩で盧俊義を殺させよう」と云ふのだらう。だか犬か猫を殺すのではなし、苟くも河北の玉麒麟を、そんな事で殺せるか」と云ひましたので、

「いやそれで少いと仰有れば、まだいくらでも差上げます」と李固は慌て、云ひました。

「よし、それならば五百兩出せ」と蔡福が云ひますと、李固はしぶ／＼五百兩の金を出して、「何卒よろしく願ひます」と又たお辭儀をしました。蔡福は思はず五百兩の金を手に入れて、家へ歸つて來ますとすぐにまた一人の客が來て、蔡福さんはお宅ですかと入つて來ました。

「あなたはどちらからおいでです」と蔡福が尋ねますと、

「私は梁山泊の小旋風柴進と云ふものです。今日盧俊義大人に會はうと思つて來て見ると、悪者共の爲に罪に落されて、牢に入れられたと云ふことを聞いたので、大急ぎであなたの所に來たのです。それで

あなたがもし盧俊義の命を助けて下されば、山陣の者は皆あなたのお恩を忘れません。けれどももし、盧俊義が殺されるやうな事があれば、山を擧げて押しよせて來て北京の役人は一人も残らず切り殺してしまふ考へです。あなたはかね／＼膽の太い立派な人と聞いてゐましたからお願ひするのです。こゝに僅かですが黄金一千兩を持つて來ましたから、これを差上げておきます」と云つてそれを出しました。

蔡福は心に少し恐れて考へてゐると、「男子が事を決めるのは速かにするものです。あなたは何をぐづぐづしてをられるのですか」

と柴進が聲を勵したので、

「とも角少し考へさせて下さい」と蔡福が云ひました。「それではあなたがもし聞いて下されば重ねてお禮しますから」と云つて柴進は歸つて行きました。蔡福はすぐにその事を弟の蔡慶に相談すると、

「兄さんは何をそんな事に迷つてをられるのです。

梁山書も孔頭目もあんな慾張りですから、千兩の金をわけてやりさへすればきつと云ふ事を聞きます」と蔡慶が云つたので、蔡福はすぐとそのお金を梁中書と孔頭目にやつて、盧俊義の命乞をしました。それが爲に、盧俊義は死刑になるのを助かつて鞭で四十打つた上、額に罪人の印の刺をして、沙門島と云ふ所へ島流しにされる事になりました。

やがてある寒い朝、董道と薛霸と云ふ、二人の悪い役人がついて、盧俊義を引きつれて沙門島を差して出立しました。これ聞いて驚いたのは李固です。盧俊義が生きて此の世にある中は、自分達が枕を高くして眠ることが出來ないので、途中で董道と薛霸の二人に八十兩の銀を送つて、盧俊義を殺してくれと頼みました。盧俊義は捉つた時にひどく身體を打たれた上、今度またさらに鞭で四十打たれたものですから、身體中が膨れ上つて、歩くことも出來ないやうになつてゐました。それで町外に來た時に、



「私はいま鞭で打つた計りで身体が腫れて歩けないから、出獄は、明日にしてくださいませか」と云ひますと、二人はもう李固から金を貰つてゐるので、一何だ貴様は金のある時には、一文も俺達にくれた事もなく、今かうして貧乏な罪人になると泣言を云ふのか、馬鹿な奴だ」と笑つて、少し歩

みが遅れると、後から棒で擲つて追ひ立て、行き

ました。盧俊義の有様は、地獄の針の山を登る人よりも尚

苦しうに見えました。その晩も夜が更けてから宿屋に泊りましたが、意地の悪い二人は夜中の三時頃に起き出して、盧俊義を追ひ立て、出發しましたので、盧俊義はもう疲れ果て、眼はしびれ、脚はなへて一歩も歩く事が出来ないのを棒で打ち、縄で引きすつて、犬でもつれて行くやうに二人は追ひ立て、行きました。やがて夜が明けた頃に松林の所へ差しかゝつて来ました。

すると二人も眠くなつたので、林の中へ入つて眠らうと思ひましたが、盧俊義が逃るといけないと思つて、二人で相談を初めました。これを聞くと盧俊義は、

「私はとても身体が疲れて一足も歩く事が出来ないから安心してお寝なさい」と云ひますと、

「貴様の云ふ事があてになるか」と薛覇は云ひながら、すぐに盧俊義を松の木に縛りつけてしまひました。

すると董超は何を考へたのか薛覇をつれて林の外でこそを相談してゐましたが、やがて薛覇だけが引き返して来て盧俊義に向ひ、

「こら盧俊義、俺は汝に何の恨みもない人間だが、今度李固から再三頼れて汝を殺す約束をしたから、今貴様を殺してやる。どうせ貴様は俺達が殺さなくとも、沙門島へ行く間には誰か知らに殺される身体だから、さう思つてこゝで覺悟をしてしまへ。來年の今日はせめて花でも立てゝやる」と云つて、刀を抜いて振り振り殺しました。

盧俊義はもう手向ふ事も出来ないのので、嗚呼々々自分の運命が悪いのだ、と觀念して、眼を閉ちて死

を待つてゐますと、どこから飛んで来たのか一筋の矢がびゆうつと唸つて来て薛覇の咽喉笛にぐざつと突き立つたと見る間に薛覇は「うーっ」と一聲悲鳴を上げると刀を持った儘、びたりと倒れて死んでしまひました。

林のそとで見張をしてゐた董退はこれを聞くと、もう薛覇が盧俊義を殺してしまつたのかと思つて、中へ入つて来て見ると、却つて薛覇が口から血を吐いて倒れてゐるので、驚いて抱き起して見ました。すると咽喉に一本の矢が立つてゐたので、慌て、四邊を見廻すと、東の方の木の上一人の男が踏み跨がつて、弓に矢をつがへてこつちを狙つてゐる所でした。

董退はます／＼驚いて、逃げ出さうとしましたが、その時すでもう矢は飛んで来て、董退の胸に中つたものですから、これも血を吐いて地上に倒れ

と云ひました。

「私もあの時、お前の言葉を背けば、こんな艱難に會はずとも濟んだのだつた。今思ふと全く恥かしい。けれども朝廷の役人が、これほど腐敗し切つてゐやうとは、あの時は知らなかつた。この上はもう思ひ置く事はないから、梁山泊に入つて、宋江と共に天に代つて道を行ふ大義に聚つて、悪人共を亡くしたいと思ふ。けれどもかうして棒で打れた傷の痛みが起つて、一歩も歩く事が出来なくつては、梁山泊へ行く事に出来ないだらう。私の運命ももう終りかも知れない。」

と愁はしげに嘆息しました。

燕青はそれを聞くと、

「何です大人、大丈夫がこの位の事で氣を落す事があるのですか。愚圖々々してゐて又た捉まつたら大變ですから、私に負さつていらつしやい」と勵まして、盧俊義を背負つて逃げて行きました。けれども

てしまひました。

木の上にゐたのは云ふまでもなく浪子燕青です。二人とも死んでしまつたのを見ると、急いで木から飛び降りて、盧俊義の傍に来て繩を解いて、跪いてお辭儀をしました。盧俊義は燕青の顔を見ると、夢のやうに喜んで、

「どうしてお前はこゝまで来てくれた」と尋ねました。

燕青は、はら／＼と流れる涙を拭ひながら、

「私はいつも、あなたの御様子を、窺つてゐましたが、昨日北京の城下で李固が此の二人の男と話をしてゐるのを見て、きつと悪い事を企んでゐるのだと思つて、今日もあとから見え隠れについて来て、皆が林の中へ入ると、木に登つてひそかに様子を見てゐました。けれどもこの二人を殺した上は、つかまればとても助りませんから、一時も早く梁山泊へ行きませう」

その時はまた途中で役人に追はれて、燕青のゐない間に盧俊義は捉つてしまひました。すると燕青が、その事を梁山泊に知せたので、宋江は大軍を率ゐて北京の城を破つて、盧俊義を救ひ出し、李固と賈氏の二人を生捉つて山へ歸りました。盧俊義は宋江に向つて、

「先にあなたのお勧めに従はなかつた愚さを恥ぢます」

と云つて、その時以來梁山泊の人となりました。人々は盧俊義を宋江の上に据ゑて、河北の玉麒麟として尊敬しました。

何しろ打物を取つては、此人の右に出る人はないといふ位の名人なので、方々の戦で武勇を現はしてゐました。

燕青も盧俊義と共に梁山泊に入りました。

(をばり)

姉と弟の唄

宇野浩二



その翌日、主人が例の黒馬に乗って、畑の仕事を
見廻りに行った留守の間に、ひよつこり又昨日のお
婆さんが尋ねて来ました。お婆さんは娘の容態を聞
くと、如何にも心から吃驚した様子で「いや、それ
ではあんたの方で會はして下さらなくても、私の
方から無理にでもお目にかゝらなければなりません
その代り蛇度身體をなほして上げます。」と言ひまし
た。だから、誰も私が娘さんのお部屋にある間、這
入つて来ちやあいけませんよ。」

そして、お婆さんの這入つて来た姿を見ますと、娘
もどうやらお醫者様に見舞に來られたやうな氣にな

つて、「どうぞ、私の病氣をおなほし下さい。」と頼み
ました。

「私が來たらもう大丈夫だから御安心なさい。」とお
婆さんは如何にも得意さうに言ひました。「その代り
私の言ふ通りにしなければいけません。そしたら蛇
度御主人様がお歸りになる迄に、元の通りの身體に
して上げるから。」

「おやあどうしたらいいんでせう？」と娘はたづね
ました。

「それにはこゝをそつと脱け出して、あそこの川岸
まで行つて水浴びをしなければなりませんぞ。」とお
婆さんは言ひました。「私はその間に、水にお呪ひを
して上げます。その代り誰にも出て行くところを見
られてはなりません。見られると私の呪ひがきかな
くなりませぬ。」

そこで、娘は頭から手拭をかぶつて、そつと家を
脱け出して、川岸へ出かけて行きました。それを誰

一人知るものはありませんでしたが、唯弟の小羊た
けが嗅ぎつけました。小羊はそつと姉の後から、例
のやうに尾を振りながら、ついて行きましたが、こ
れは流石の魔法使ひのお婆さんも知りませんでした
ところが、どうしたのか、そこらにお婆さんの姿が
見當りません。娘はどうしたのだらうと思つて、暫
くその邊をあちこちしてゐますと、突然かたはらの
叢の中に隠れて居たお婆さんが飛び出して来て、
あつと言ふ間に娘を驚掴みにしました。そして、咄
嗟の間に娘の着てゐた着物を脱がしてしまつて、傍
にあつた大きな石を裸の娘の首玉に結びつけました
その後は言はなくても分るでせう。お婆さんは娘を
川の流れの一番深さうなところに、どんぶりと投げ
込んでしまつたのです。それからどうしたかと言ふ
と、お婆さんは今迄自分の着てゐたぼろ／＼の着物
を捨て、娘から脱ぎ取つた着物に着更へました。
そして口の中で何か呪ひのやうなことを稱へたと

思ふと、見る見るうちに、誰が見ても、そっくり娘とそのまゝの顔に變つてしまひました。が、誰もそれを知る譯はありませんでしたが、可哀さうな弟の小羊だけが、始終の様子をそつと見てゐました。然し、お婆さんの娘は何喰はぬ顔をして、家の方へ歸つて行きました。

やがて、夕方になると、主人は黒馬に乗つて、畑から歸つて來ましたが、まさかそこにあるのが魔法使ひのお婆さんの化けた娘とは氣がつきませんでした。だから、すつかり元の通りに病氣のなほつた娘を見て大變よろこびました。

が、何も彼もすつかり知つてゐる小羊の心はどんなだつたでせう。小羊は見るからに元氣がなくなつて、何をやつても食べようとはしないで、今までだと片時も娘の傍を離れたことがないのに、毎日朝から晩まで川岸へ出かけて行きました。そして堤の上をあちこちしては、「うう、うう、」と悲しさうな聲を上

げて泣いてゐました。が、それに答へるのは川に生えてゐる蘆の葉がさや／＼と風に鳴る音だけでした。

然し、流石に魔法使ひだけに、小羊が毎日朝から晩まで何處かへ出かけて行くことを見逃しませんでした。何處へ出かけて行くのか知ら、と氣をつけて居ると、それは川岸へ行つてゐることが分りましたので、はつとしました。魔法使ひはその小羊が氣味悪くなつて來ました。果は、この分では生かしておけないと思ひました。そこで、魔法使ひのお婆さん——でない娘は、召使の者と呼んで、近いうちにある小羊を殺して、料理して、食べたいと思ふから、その用意をしておくようにと言ひつけました。それから主人にもその話をしました。主人はそれが魔法使ひが化けてゐるものとは夢にも知りませんでしたから、その話を聞かされると、すつかり吃驚してしまひました。

「えゝ？」と主人は聞きかへしました。「あの小羊を

殺してしまふんだつて？ どうしたんだ、一體？ お前は私が初めてあの砂原の岩のところであうた時あの小羊は自分の弟だと言つたぢやないか。それは

かりでなく、お前はつい此間まではあんなに優しくして、可愛がつてゐたぢやないか。それを今突然殺してしまふなんて、氣でも狂つたんぢやないか？ あゝ、あゝ」とそこで主人は溜息をついて言ひました。「女の心は風の中の羽根のやうだ」とはよく言つたものだ！」



話聽つて、庭を歩いてみた小羊は、突然召使たちが恐い顔をして、自分を捕へに來ましたので、びつ

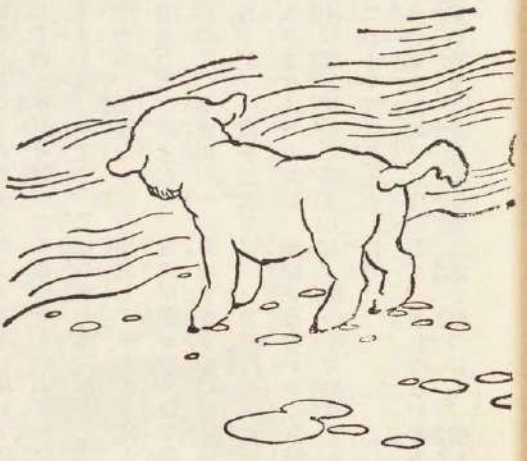
くりして逃げ出しました。と言ふのは少し前に、臺所の窓から何氣なく中をのぞくと、大勢の者が忙し

さうに肉切庖丁を削いてゐるのや、肉刺の棒を削つてゐるのや、大きな肉焼鍋を棚から下ろして掃除してゐたのを知つてゐたからです。だから、小羊はすつかり震へ上つて、一所懸命に表へ逃げ出して、い



つもの川岸へとやつて來ました。矢張り風の吹いてゐる日で、川原の蘆の葉がさや／＼と鳴つてゐます。そこで、小羊はどうせ命はないものと覺悟しましたので、せめてその川の中に沈められてゐる姉に、別れの唄をうたはうと思ひました。間もなく、後を追うて來た召使たちが近づいて來て、小羊の油断してゐる間につかまへようと思つて近くに来るに従つて足音をしのばせました。すると、何と！小羊が悲しうな聲で次のやうな唄をうたつてゐます。

妹さん、妹さん、水の中の姉さん、
 みんなで私を殺しに來ます、
 みんなで肉刺の棒を削つてゐます、
 みんなで肉焼鍋を掃除してゐます、
 みんなで庖丁を研いでゐます。
 すると、水の中から娘の聲で、悲しうな節で、斯う答へるのが聞えます。



弟よ、可哀さうな羊の弟よ、
 私の咽喉には重い石が附いてゐます、
 青い藻が指のまわりに纏まつてゐます、
 黄色い砂が私の胸を埋めてゐます。
 追つかけて來た召使たちは思はず耳を澄ましまし

た。そして不思議にも羊が唄をうたふのと、それ川の中から可愛らしい娘の聲が答へるのと同じに、驚きました。そこで、取敢ずその事を主人に知らさうと思つて、そつと家の方へ歸つて行きました。主人はそれを聞くと、早速召使を先に立て、川岸のところへ、小羊の唄を聞きに、本當か嘘かをしらべに來ました。
 すると、如何にも、白い小羊が泣きながら立つてゐます。その涙がぼん／＼と川に落ちてゐます。そして、如何にも、悲しうな聲でうたつてゐます。
 姉さん、姉さん、水の中の姉さん、
 みんなで私を殺しに來ます、
 みんなで肉刺の棒を削つてゐます、
 みんなで肉焼鍋を掃除してゐます、
 みんなで庖丁を研いでゐます。
 すると、水の底から、聞き馴れた娘の聲で悲しうに斯う歌つて返事してゐます。

弟よ、可哀あはれな羊ひつじの弟よ、
私の咽喉のどには重い石いしが附ついてゐます、
青い藻あわが指ゆびのまわりに纏まとまつてゐます、
黄色きいろい砂すなが私の胸むねを埋うめてゐます。

主人しゅじんはその聲こゑを聞ききますと、これこそ確たしかにあの娘むすめの聲こゑに違ちがひないと思おもひました。すると、娘むすめが不ふ斷だんとんなにこの小羊こひつじを可愛こひがつてゐたかといふことを思おもひ出だしました。そこで、召使めいしの者ものを漁夫りくしのところへ使つかひやつて、魚うまを取る網あみを用意よういして來きるようにと言いひつけました。間まもなく、漁夫りくしが網あみをかっいで着きましたので、早速さつそく川がはの中なかの聲こゑのする方ほうに網あみを打うたせました。が、一度いちどや二度にどでは、いつの時ときでも魚うま一ひつ疋びつもかゝりませんでした。が、到頭とうとう何なん度ど目めかやつた時ときにその中なかに娘むすめが掛かつて來きました。網あみの中なかで娘むすめはまるで眠ねつてゐるやうに見みえました。

人々ひとびとは娘むすめを陸りくの上うへに下くだろして、首くびにつないである石いしを解といたり、身み體たいを奇麗きれいな水みづで洗あらつたり、新あらたしい

着物きものを着きせたりして介抱かいぼうしました。間まもなく、娘むすめはやうやう目を醒さましたかと思おもふと、急に生なまき生なまきとした以前いぜんよりも、もつともつと美うつくしい娘むすめになりました。

娘むすめはさうして目を醒さますと、嬉うれしそうに輕かろく飛とび上あつて、いきなり傍はたにゐた小羊こひつじの方ほうに駆かけて行いつて、その首くびを抱かかりすくめました。すると、その拍ひ手に今迄いままで小羊こひつじだつたのがいつの間まにか可愛こひらしい少年せうねんに變かつてゐました。それは以前いぜん砂原すなはらで羊ひつじの足跡あしあとから水みづを飲のんだ前まへの弟あにと、そつくりそのまゝの姿すがたでし

た。

その時とき、娘むすめはその砂原すなはらの岩いにもたれて泣ないてゐた時とき何處どこからともなく、幾いくら泣ないてゐてもしやうがない。今いまにお前まへたちが別わかれ別わかれになる時ときが來きる、そしてこの小羊こひつじが人ひとに殺ころされかゝる時ときが來きる、その時とき、又また元の人間元の人間に戻かへれることがあるだらう」といふ聲こゑを聞きいたことを思おもひ出だしました。



何なんにしても、この時ときの姉妹あねいもうとの嬉うれしさは何なんにたとへる事ことが出來でませう。そして嬉うれしさの餘あまり泣なきました。すると、娘むすめや弟あにの恩人おんじんである男おとこも、嬉うれしさの餘あまり泣なきました。

それから、みんなで手てを引き合あつて家うちに歸かへりました。その後の幸福しあわせは今いままでよりももつと幸福しあわせだつた。こゝは云いふ迄までありません。何故なぜと言いつてもう弟あには昔むかしと違ちがつて、羊ひつじではなく人間人間でしたから。勿論もちろん、みんながその時とき、家うちへ歸かへつて見みると、あの魔法使まほうつかひのお婆おばさんも、お婆おばさんの化はけてゐた娘むすめも何處どこへ行いつたのか、影かげも形かたちも見みえませんでした。そして、もう二度にどと姿すがたを見みせなくなりました、とさ。――と、これは露西亞ロシアの片田舎かたがはの、冬ふゆになると明あけても暮くれても雪ゆきの降りふりつもつてゐる森もりの中なかの一軒家いっけんがで、ピョートルといふ爺おやじさんが、二人ふたりの小ちひさい孫まごにせがまれて、毎日まいにち毎日まいにち、夜よになると、雪ゆきの降りふりつもる音こゑを聞ききながら、話はなしたお話お話しの一つひとつであります。(をばら)

蝶々のお家

野口雨情

蝶々の

お家は

菜の花つづき

菜の葉の中を

ちら ちらと

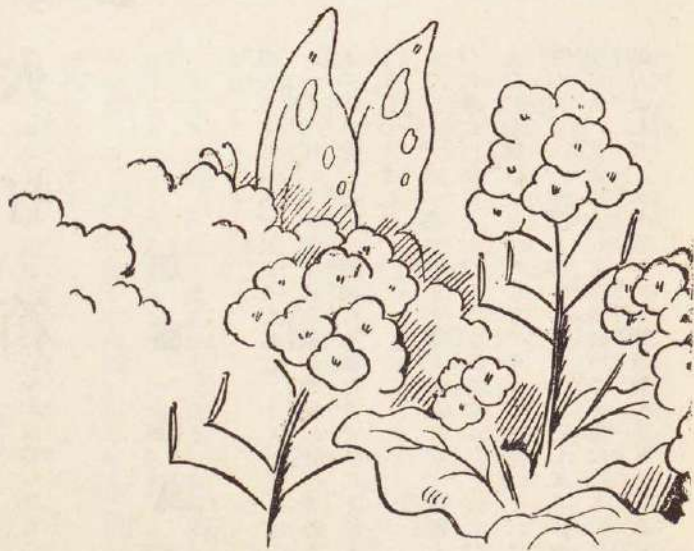
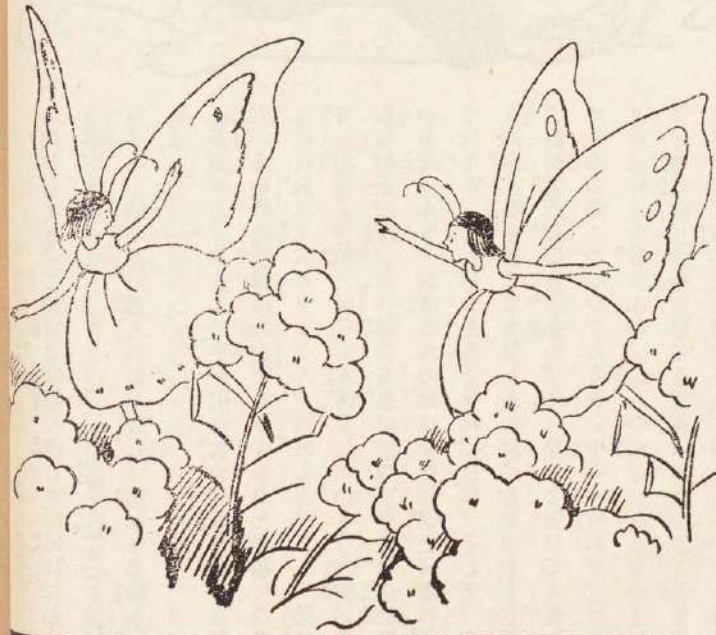
菜の葉の上を

ひら ひーらと

蝶々は

毎日

歸つていった





火打箱

加藤 朝鳥

次の朝になりました。銅のお城のなかでは姫君が朝の食事をめしあがりながら、王様や女王様に、「わたしは、昨夜不思議な夢を見ました。大へん巨きな犬がまわりまして、わたしを背に乗せ、兵卒のところ连接到り行きましたところ、その兵卒はわたしの手に成物をいたしました。たいへん不思議な夢の様に思ひます」とお話になりました。

すると女王様は、大へん心配なさいまして、「そりや大變な事で御座います。今夜から姫をひとりにして置くことは危い。姫がまた其の様な夢でも

見やうものなら、怯えるから。」と仰つて、其の夜から王様の朝廷に仕へてゐる老女の一人を、姫君の寢間にお伽をさせることにとりきめになりました。

ですが、此の事は決して夢ではなくて、實際にあつた事だつたなどと、もし女王様にお話したら、どんなにお驚きになつたことぞせう。實際はそれは夢ではなくて、眞實の事なものでした。そしてその次の夜にも、兵士はまたもや姫君の姿を見たいものだと思ひまして、火打箱で火を磨り出しますと、また例

の忠實な犬が現れ出しました。

「さあ。姫を連れて來い。」と、兵士の命令一下で、犬は姿を掻き消してしまひました。

銅のお城のなかでは、姫の寢臺の側で老女がお伽をして居たのですが、姫の夢のことを大へん心配して、今か今かと思つて居るうち、

「ハテ。姫君は今夢を見て居らつしやるのか知らん。」——と自分で自分の身體を抓つて見ますと痛い——これは大變だと思ふがはやいか、はや眼の前には實際に大きな犬で、しかも皿のやうに大きな眼を見張つて居るのでした。

見れば此の怪しの犬は、すぐと姫を啣へて逃げたしますので、忠義一徹の老女は、矢庭に跳ね起きて犬の行く跡を追っかけ、やつとの事で、犬の背の姫君が、ある大きな家のなかに消えたのを見とけたのです。

老女は一ぢや。その家に記號をつけて置きませう

明日の朝になつたら、ちやんと判明るやうに。」と思ひながら、白墨の片を拾ひあげて、その家の戸口に大きな白十字を書いて置きまして、それからまたお城に歸つて寢たのでした。

やがてしばらくの間に、犬は再び姫を銅のお城に連れて歸つて、さて旅館の前まで來ると、戸口に大きな白十字が書いてあるのに氣がつかしました。その時犬は、どうしたと思ひますか？ この犬は精巧な犬でしたから、すぐとまた白墨の片を拾ひあげて、その都の家々の戸に、一軒ものこさず大きな白十字を書いてまはりました。

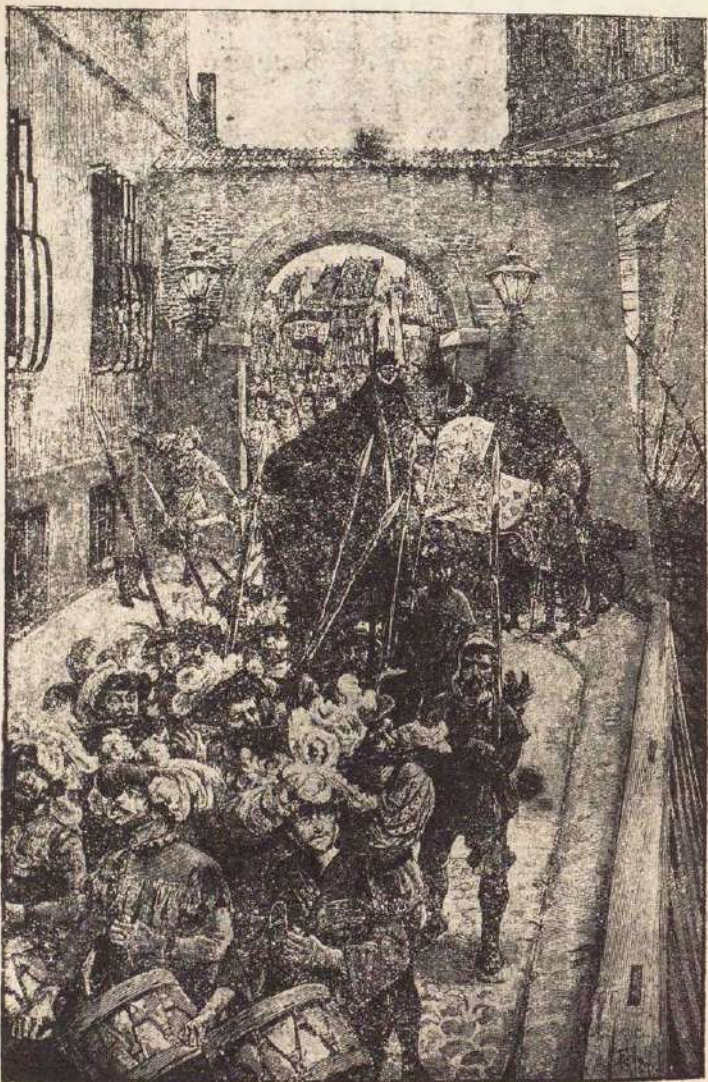
さて次の朝、お城では王様女王様はじめ家來も侍女たちもまことに大騒ぎです。いづれも老女の物語りを聞いて、大きな白十字の書いてある家を探しに出掛けたのです。

で、最初王様の眼に大きな白十字の書いてある家があつたので、「さあ。此の家ぢや。」と王様が

氣色ばんでお仰いました時は、皆のものはあまり驚きもしませんでした。

『でも嘘をお仰いませ。こちらの家にも白十字が御座います』

と女王様が別な家をお指しになつたには、まつたく何うしてよいか判りませんでした。するうち大勢の家來や侍女達が、口々に『此の家にも白十字が』この家にも。』と叫び出しまして、さつぱりわけが判らなくなつてしまひました。もう五里霧中の大恐慌で、殊の外に恐縮してしまつたのは老女です。何の家の戸であつたか皆目見當がつかず、盲滅法で、全く恫巧な犬の奴は、王様御一統御一族を愚弄してしまつたのも同然で、折角出て來ながらも、王様は空しくすご〜とお城に歸つておしまひになりました。



つので大きな黄金の鉄をとり出して、絹の大きな布を細かく粉のやうにお斬りになりました。そしてその絹布の粉を、手ごろの袋のなかに詰め込みなされ、自分の御手で、その袋を姫君の腰に結びつけ、黄金の鉄で、袋の端の方に小さな穴をお穿けになりました。かうして置けば、姫君が何處に連れて行かれても、恰度麥粉をこぼすやうに、ちやんと絹布の粉が道を傳つて行くことになるのでした。

その夜にもまた犬がこの銅のお城にやつて來て、姫君を兵士のところに連れて行きました。兵士は今度は姫君のお婿様になり度いから、自分も王族に生れて來ればよかつたのにと残念げに申したのでした。

さて犬の眼玉は、皿の様に大きく煌々見張つて居たのですけれど、今度と云ふ今度は、絹布の粉が道に傳つて落ちて居る事には流石に氣がつかまませんでした。恰度犬は旅館の窓の下に行つて、そこから

兵士に姫君をおわたしたのですから、そこまでちやんと絹粉の道がついて居り、翌る朝になって、王様女王様はじめ大勢の家來や侍女達は、ちやんと姫のつれて行かれた處を探り當てる事が出来たのです。

兵士はその場に縛られて、牢屋にいれられてしまひました。

牢屋のなかの闊くつて意屈なこと！だがそれだけならまだよいが、或る日兵士は、いよ／＼死刑に處せられると云ふ事になり、「明日こそはその日だ」と追つて来たのは、全く哀れなことでした。

まあ、兵士はどんなに愕き怖れたことぞう。それに運のわるいことには、兵士は火打箱を旅館に置いて来たまゝなのです。

いよ／＼朝になりました。牢屋の狭い窓格子から覗いて見ると、兵士の眼には都の人々が大勢群つて居るのが映りました。みんな兵士が死刑に會ふのを

見ようとして、騒いで居るのです。

大鼓の響がして、澤山の兵隊がやつて来ました。まあそれを見た時、彼は此の兵隊たちと一緒になつて、どんなにか進軍して見たかつた事ぞう。だが、だが、もう駄目だ――。

するうら一人の靴屋の丁稚が、革の前垂れを掛けて駆けながらやつて来たのですが、その丁稚はあまり急いだためか、片つばうのスリッパを踏み外して、それが恰度兵士が覗いて居る牢屋の窓のところ

に落ちて来ました。

で兵士はその丁稚を呼んで、

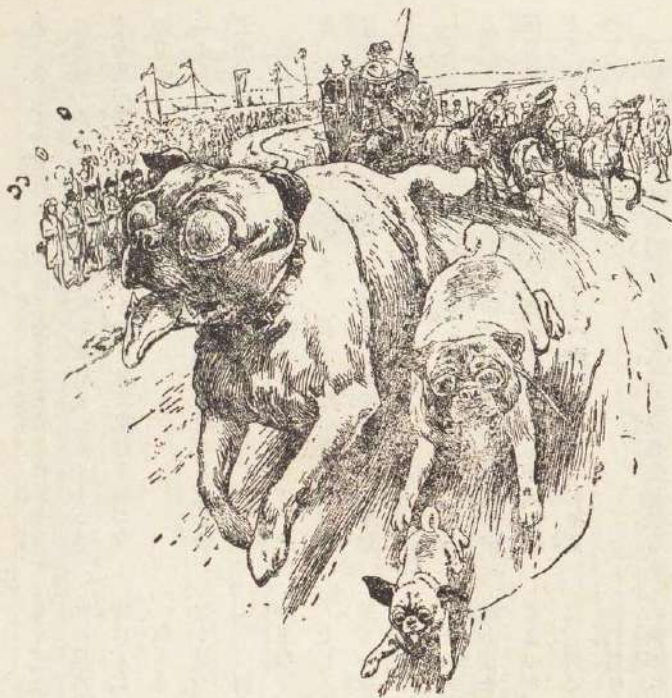
「君まだ急ぐことはない。乃公はまだ此處に居るんだ。乃至が行かない以上、何も見物するものは無い筈だ。で、君に二錢遣るが、乃至の泊まつてゐた宿屋までひとはしり行つて、火打箱を持つて来て呉れないか。ほんとにひとはしりなんだから。」と申しました。

靴屋の丁稚は急に二錢が欲しくなつて来たので、早速火打箱をとりひとはしり駆けて行きました。

丁稚は宿屋で火打箱を見つけ出しながら「なんだ。こんなケチな小箱を――」と云つて、すぐまたひとはしりで、それを兵士のところに持つて行つてやりました――さてこれからが何うなると思ひます。

都の郊外では、高々と絞首臺が出来て居まして、そのぐるりに兵隊が取りまき、そのまたぐるりに大勢の見物人ががやがやと取り巻いて居るのです。

王様と女王様とは立派にしつらへた玉座にちやんと席をとり、恰度またその向ひ側に裁判官や陪審官が居るのです。兵士の頸にはもう長い繩が巻きつけて



ありまして、哀れにも御は干様と女王様とに對し今は最後の御慈悲をと嘆願の眼を向けまして——どうぞ今生の際に煙草を一つぶく飲ませて呉れと願つたのであります。

「よろしい。煙草を一つぶく吸ふがよからう。」との王様の御掟が出ました。

兵士は火打箱をとり出して燐寸を磨りました。一度、二度、三度、たちまち、兵士の眼の前には、三疋の巨大な怪犬が現れて、兵士の命令を待つ姿勢をとつたのです。兵士は矢庭に、

「助けて呉れ、乃公の頭が絞らぬやうにしろ。」と云ふがはやいか、怖しい形相の三疋の犬は、裁判官や陪審官やに飛びつき、口に啣へて振つては冲天に投りあげましたので、おちると一緒に粉微塵に砕け散つて死んでしまひました。

王様は驚いて唇を動かしました。多分兵士を赦して遣せと云ふ心算だつたのでせうが、その際さへも

なく、一番巨きな犬が飛びついて行つて、女王様も諸共に口に啣て振つて空高く投げ下におつこられた時は、矢つぱり砕け散つて、そのまゝ死んで了ました。

取りまいてゐた兵隊達や大勢の見物人やは、まつたくびつくり仰天してしまつて、大聲を振りあげ、
「や、何んと云ふ武勇な兵士だ。此の兵士こそ我々の王様で、姫君の婿様になる方ぢや。と叫びました。

そして大勢は、此の兵士を王様の立派な馬車に乗せてお城に導いて行くと、三疋の巨大な犬は悦ばしげに飛んだり跳ねたりして、その前衛を勤めました。それから美しき姫君をお迎へに参り、それをお妃様としますと、姫君も銅のお城に閉ぢ籠められて居るよりか、此の方がどんなに面白いか知れませんか、大そうなお喜びでした。そしてその御成婚式のお酒盛は八日夜々つきまして、三疋の犬も祝の食卓に坐らせて貰つて、たらふく御馳走をばくつ

いたのでした。
(をばり)



どちらが偉い? (第二回)

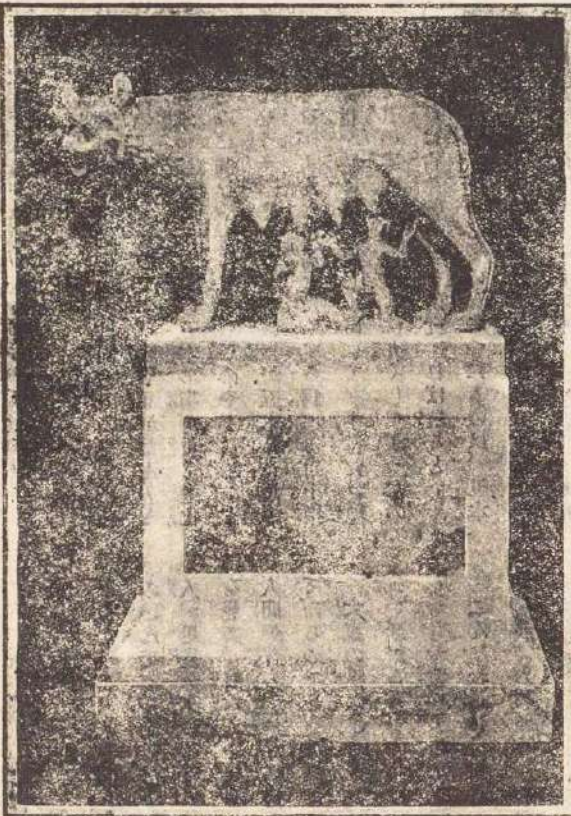
沖野岩三郎

動物の身體を流れてゐる血に、温いものと冷いものと二種あつて、温い血をもつてゐるのを温血動物、冷い血をもつてゐるのを冷血動物といふ事は、皆さん温いものとくに御承知の事と思ひます。皆さんは温い「おさしみ」を食べた事はございますまい。それはお魚の血は冷いからです。昆蟲やお魚の血は冷いが、獸の血は温い。そして人間の血も温い。それは人間と獸とが近い親類で、人間とお魚や蚯蚓などが、餘程縁遠い親類だからであります。

獸はおツ母さんのお乳を飲む。犬や猫やお猿が、旨さうにお乳をのんでゐるのを御覧になつたでせう。けれども蟲や、魚はお乳を飲まない。お魚の子供は可哀さうに、假令おツ母さんにお乳があつてもそれを飲まうとすれば、口の中へ水が流れ込んで来て、直ぐ味が水っぽくなつて了ひます。そこで神様は、お魚にお乳を授けて居ないのです。鶏の雛ツ子は、ピヨ、ピヨ、ピヨ、ピヨ言つて、おツ母さんの

懐へもぐり込んでお乳を飲むやうなまねをします。私は子供の時、鶏にも乳があるのだとばかり思つてゐましたが、鳥屋の小父さんにきいて、始めて鶏はお乳を飲まないのだといふ事を知つたのでした。だから可哀さうに鶏の雛ツ子は卵から出ると直ぐに、堅い／＼米粒を、くつくつと丸呑にするのです。それでも胃病にはなりません。けれども人間の子供が生れると直ぐ、生米を口へ入れたりと、直ぐに胃腸をこはして死んで了ひます。そこで人間も先祖の獸と同じやうに、おツ母さんのお乳を飲んで成長するので。おツ母さんにお乳が無かつたら、其時は牛にお頼ひしたり、山羊にお頼ひしたりして、其のお乳を分けて貰つて飲んで成長して行きます。牛や山羊は、人間といふ親類からのお頼ひです。牛や山羊は、一度も不平を言はずに、吾々人間にお乳を分けて下さい。親類は仲よくしなければならぬといふワケを知つてゐるからでせう。昔の人は牛

や山羊の乳ばかり飲んでゐなかつたと見え、本年一月十五日に、伊太利大使、マルチノ氏は、伊太利皇帝からの贈りものである狼が人間の子供にお乳を飲



ましてゐる銀製の彫刻を攝政宮殿下に御成婚のお祝として献上いたしました、これはロマの古い傳説で、伊太利のすつと昔の先祖が、狼のお乳を飲んで成長したといふお話から来てゐる彫刻でせう。人間の先祖が蟲や鳥や獸であつたといふ事は、前同で申上げた通りですが、其中の近い親類の獸と人間とは、昔も今も、やつぱりこんな關係があつて、人間の大部分は獸のお乳で育てられてゐるのです。其のお禮に人間はお乳を呉れる牛を殺して其肉を、ジリ／＼とスキ焼にして食べたり、山羊の毛を短く剪り取つて織物を作

つて着たりするのです。少し人間の方が無理ぢやないでせうか。

魚の鰭と獸の足や人間の手とは同じものです。鳥の羽も人間の手と同じものです。鰭や羽がだん／＼進化して五本の指になる。其の五本の指が更に進化して物を巧みに掴むやうになる。馬のやうな蹄はどしたものでせう？ やつぱり昔は指が五本あつたのでせう。それがあんなに足を長くする爲に母指小指人さし指薬指を膝の所へ残して置いて、中指だけ減法長くして其の尖の爪をあんなに丸くして了つたのでせう。これは古生物の骨を研究すれば解るといふ事です。足を長くする必要のなかつたものは、五本の指を大事に保存しました。お猿はあんまり手が可愛かつたもんだから、今に四本持つてゐます。所が人間は其の二本を足にして了つて、二本だけ残してあります。野蠻人は跣足で走り廻るので、足の五本の指を皆な使ふが、日本人は下駄や草履を履くの

か。だから人間の不徳義な奴を人面獸心と言ふんだい！

お待ちなさい。そんなら、前にお話し致しかけたやうに、人間と獸、否え鳥と、いえ、もつと／＼下の小さい／＼蟲と比較してみませう。『それ、例の蟻のお話の残りだ！』と言つて、又た蟻の話をしなければならなりません。

フアーブルといふ大へんえらい學者の研究に因りますと、蟻には二つの胃袋があるだらうといふ事です。前の胃袋には透明な、旨しい液體を貯へて置きます。後の胃袋では自分の食べたものを消化させます。そして彼等は餌を尋ねたり住居を作つたりして一所懸命に働きますが、働いてゐる時、向うからお腹の空いたお友達が、ひよろ／＼と踏跟けながら來ます。するとそれを見たお腹のいゝ蟻は、

「まア、お腹が空いてゐますか。それはお氣の毒な事だ。——」と言つて、前足を上げて立上ります。

で、五本の指を、親指一本他の指四本と二分してこれを使つてゐます。西洋や朝鮮支那の人達は、靴を履くので、足の指は五本乍ら平等に靴下の中へ包み込んでゐます。だから朝鮮や支那人達は、日本人が足袋を穿かないで、素足へ下駄を履いてゐるのを見て、日本人の足を「蟹」だと云つて嗤ひます。人間が昔々大昔蟹だつたのだから、其所だけ残つてゐるのでせうか。

大抵の獸は足のさきに尖つた爪があり、口の中に長い牙があります。けれども人間にはそれが無い。しかしお猿は手の爪も齒も人間と同じ事です。

こんなお話をしていると、何だか人間といふものが輕蔑されるやうで腹が立つ。そこでも一度嗚鳴りませう。

「人間は人間だい。鳥や蟲や獸よりも、ずつと進化して來たんだぞ。人間には道徳といふものがある。けれども蟲や獸には道徳ツてものが無いぢやない

そして透明な旨い液體を、前の胃袋から吐きます。お腹の空いた蟻は、喜んで「まア、御親切に、有難うございます。」と云ふやうに、其の御馳走を食べます。そして二足とも元氣よく働きます。所が蟻の中にも時々横着者があつて、お腹の空いた氣の毒な蟻に出會つても、前方にある胃袋の液體を食べさせやうと、あげない事があります。さうすると、それを見つけた他の蟻達は、直ぐ其の怒張り蟻を處めて懲らしめます。それから、蟻と蟻との團體間に解決出來ない問題が起つて、遂に戦争をする事があります。其の戦争の時、お腹の空いたものは、敵味方の區別なく助けてやるといふ規則があるらしいのは不思議な事です。彼等は戦争中であらうが、敵味方であらうが構はない。お腹の空いた者を見つけたら、誰彼の區別なしに自分のもつてゐる餘つた食物を食べさせてあげるさうです。

先づ蟻の話はそれ位にして、それを一つ、人間と

比較して見ませう。

人間はもう蟻よりも、ずっとく、進化してゐますから、腹の中に物を貯へて置かないで、家や倉を建てます。所が世界中の人間に、庫を屋敷の前と後とに二棟建て、置いて、前の庫へは他人に與げるものばかり入れて置き、後の庫へは自分の食べるものばかりを入れて置くといふやうな、そんな二種の庫をもつた人が何人あるでせうか。庫を三棟も五棟も持つてゐる人はありませう。其の庫の壁を厚くして泥棒の入れないやうにしたり、火事に焼けないやうにしたり、白や黒の色に美しく塗つて、喜んでゐる人は澤山あります。

けれども二つの庫の、前のは社會用であり他人用であり、後のだけが、自家用であり、自分の必需品を入れてゐるのだといふやうな、そんな慈善家が何所にもありませうか。そんな事どころですか、人間といふものは、うっかりすると、他人のもつてゐる品

物まで、ふん奪らうとする者さへあります。

さうして見ると、人間と蟻と、どちらが道徳家であるかといふ事が、大きな問題となります。

ダアウキンといふ大學者は「蟻の脳は、全世界で最も驚くべき者である。恐らく人間の脳よりも更に驚くべきものがあるのではなからうか。」と申しただうであります。けれども悲しい事には、御互ひ人間はもう蟻ではありませぬから、蟻の心も蟻の智慧も、確かに此の通りだと知る事は出来なくなつてゐます。

蟻の話が済みますと、今度は蜂と人間とを比較して考へてみませう。

蜂といふものは、恐ろしい恰好をして、大きな口と鋭い鎗をもつてゐます。けれども平生は頗る温厚なものです。一生懸命に働いてゐる時、決して其の鎗を漫りに使つたり、誰彼無しに噛みついたりするやうな亂暴は致しません。けれども一旦緩急ある

人を刺すものではありませぬ。



時は、物凄い勢で奮戦します。皆さんの家の屋根の軒下とか庭木の小枝とかに、小さい巢を作る腰切

蜂があります。あれだつて其の巢を弄つたり、巢の近くへ手や棒ちぎれをもつて行かなければ決して

田舎へ行きますと、山蜂といふ大きな蜂が高い松の樹の枝の下に巢を造ります。百姓の爺さん達はそれを見ると、「ああ、今年の二百十は無事だ、有難いなア。」と言つて喜びます。其の代り、山蜂が人の家の土蔵の掃風口に巢を構へたり、岩の間に巢を造ると、「さア、今年の二百十日は荒れるぞ！」と申します。それは何故かと申しますに、蜂は年の始めにもうちやアんと、今年は風が吹くから、高い所へ巢をかけては危いぞ。今年は大風が吹かないから、成るべく高い所へ巢を造つて愉快に暮さうといふやうに、一年中の出来事を豫知する智慧があるからだといふ事です。それはダアウインや、フアーブルのやうな大博士が言ふのではなく、田舎の無學文盲な爺さん婆アさんの経験から申すのであります。それだけの智慧をもつてゐる蜂には、矢張りそれだけの道徳をもつてゐます。

蜂にも種類が澤山ありますから、其中の一つ二つに就いてお話し致します。

皆さんと一番縁の近い蜜蜂に就いて申しましたも、實に感心な事が澤山々々あります。

第一に彼の蜜蜂が王様に忠義な事は驚くべきものです。人間も昔は「忠臣二君に事へず」と申しましたが、そんな事は蜜蜂は疾うの昔から守つてゐます。此所に甲乙二つの巢があります。甲の方は王様が御健康に渡らせられるので、家來達も大變元氣よく働きます。所が乙の方は王様が兎角お弱いので、家來達は毎日心配顔をしてゐます。弱い王様が、偶々外へお出ましになつて、歸り途中で、人間であつたら馬から落ちるといふ所ですが、蜂の事だから羽が疲れて水の中へ落ち込み給ふ。さア大變だと言つて家來達は大騒ぎをしますが、たうとう王様は水中の藻屑となり給ふ。さうすると家來達は毎日々々悲嘆に暮れて、仕事が手につかないのです。



「どうしたんだらう。あの乙の巢の蜂は近頃元氣がないやうだぜ。」

飼主の人間は、さう言つて乙の巢の蓋を取つて見ますと、今まで整然と作つてあつた巢が段々と變に形が歪んでゐます。

「や、大變だ、王様が無くなられたのだらう？」と言つて調べて見ると、果して王様が見えません。

昔、播州赤穂の城主、淺野長矩といふ短氣な殿様は、千代田城松の室の御廊下で、刀を抜いて吉良良央といふ老人の額を斬りました。それは甚だいけな事だとなつて、長矩は切腹申付けられました。殿様が切腹申付けられた赤穂の城の何千といふ家來達は、此の乙の巢の蜂と同じ事でありませぬ。

所で、穂穂城に居た家來達は、忽ちにして散々ばら／＼になつて、死ぬまで心を合せてゐたものは、たつた四十七名しかありませんでした。人間仲間では、それを忠臣の鑑だと申してゐます。しかし乙の

巢に居る何百の蜂はどうでせう。唯の一疋も逃げません。皆な一つ所に残つて、力無く嘆いてゐます。

「困つた事だ、あのまゝにして置けば、乙の巢の蜂は皆な死んで了ふかも知れない。甲の巢へ合併してやらうぢやないか。」

飼主はさう言つて、乙の巢の蜂を甲の巢へ入れて了ひます。さうすると大騒動です。甲の巢の蜂は、見ず知らずの他國の武士が何百人となく入つて來たのを見て、皆な自分の王様を守つて彼等を逐ひ出します。乙の巢の家來達も、

「違ふ／＼、あれは自分達の王様ぢやア無い。出る出る。」と言つて、皆な其所を出て、又た自分の巢に歸つて、矢ッ張り嘆いてゐます。それは甲乙兩國の合併條約が圓滿に行はれないからであります。そこで飼主の人間はいろ／＼考へた結果、一策を考へて甲も乙も、能く寝静まつてゐる真夜中に、そうツと甲と乙との蜂を一つの箱に入れて、そして噴霧器で

お酒を双方の蜂に振りかけます。そして双方を酔つ拂はせませす。

翌る朝になると甲の蜂も乙の蜂も、皆な同じやうに酔つばらつて、皆なひよろ／＼して、

「兄さん、今日は何だか身體が變ですネ。」

「さうだ、僕も何だか妙に思ふ。」

「今日は家内が二倍もあるやうに見えますネ。どうしたんでせう？」

「ねえ、どうも變だ。一體これは何といふ國でせう。」

「無論甲の國でせう？」

「だつて見知らぬ人達も居るやうですよ。」

「では此所は丙の國かも知れない。」

甲の蜂も乙の蜂も、そんな事を言つてゐるうちにやツぱり家來達と同じく、酒に酔つた王様が元氣よくお出ましになつて、麗かな朝日を全身に浴び乍ら朝露をお召しあがりになる。それを見た甲の家來達

も、乙の家來達も「あのお方が、吾々の王様に違ひない、吾々と同じやうにお酒の香ひがする。」と云つて心を合せて、せつせと働くやうになり、合併した兩國民は大變繁昌して行きます。それも農學士とか農會技手とかいふ人が考へたのでなく、田舎の爺さん婆アさん達の考へた事ですが、兎に角さうして双方を一旦生れ變らせなければ、別々の巢の蜂は、決して一つになつて働きません。所が人間といふ者はさうではありません。殿様が無くなると、大抵はちり／＼ばら／＼になつて了ひます。そして自分勝手に足利方になったり、楠方になったり、北條方になったり、新田方になつたりします。

蜜蜂が巢を作つてゐる時、いつも歩哨が巢の入口に立つてゐて、ビー、ビーと羽を鳴らし乍ら警戒してゐます。若し山蜂とか、他の悪い者が襲つて來ましたなら、彼等は猛然と其の敵に噛みつきます。噛みついただけで尙ほ力の及ばない時は、唯一つの鎗

を敵に刺しますが、鎗を敵に刺すと其のまゝ必ず自分も死んで了ふのです。彼等は身をもつて敵を防ぐのです。人間のやうに逃げたり隠れたり卑怯な振舞は決して致しません。

倅こゝに一つの問題があります。これだけ忠義で勇氣のある蜂、そして堅く自分の國を守る蜂でも、黙つて敵の國の蜂を自分の巢に入れてやる事があります。

歩哨兵が、ビー、ビーと羽を鳴らしてゐる時、向うから一疋の蜂が飛んで來ます。それは善く働く労働者の蜂です。朝疾くから、あちらの山、こちらの野と花粉を尋ねて、脚の和毛にみツちりと花粉をつけて歸ります。所が空腹で、眼が暈んで、自分の家と他所の家とを取違へて、他所の巢へ入つて行きます。其の時、歩哨兵は決して其の労働蜂を噛みも刺しも致しません。若し花粉も持たず、お腹も空いてゐない蜂が來たのだつたら、直ぐさま殺して了ひま

すが、労働して疲れた蜂だと見ると、それが敵であらうと他所の巢の者だらうと、黙つて見逃してやりません。所が其の労働蜂は中へ入つて、蜜を食べて、さて氣づいてみますと、これはしたり、他所の巢です。そこで大周章に周章で、自分の巢に歸りますが、其時も歩哨はそれを見逃してやりません。人間であつたら、働かないで、遊んで居る金持のする事は見逃しても、お腹の空いた労働者のした事は、一寸でも

悪い事があるとなか／＼容易に赦しません。此所に人間の労働者があつて、一日働いて、お腹が空いて、眼が暈んで、自分の家とお隣りの家とを取違へてお隣りへ入るとします。そして其所の臺所のお櫃の御飯を食べたとしましたらどうでせう。それを見つけた隣りの主人は黙つてゐるでせうか。「泥棒！」と叫んで、直ぐお巡りさんに引渡すのでは無いでせうか。私はさういふ事を考へますと、人間と蜂と、果してどちらが偉いか、矢ツ張り考へなければならぬと思ひます。



童謡

野口雨情選

(大人篇)

あまだれ

仙臺市 鈴木正五郎

こつちのあまだれ
つながりあまだれ
タラララ、ポツタリコ
こつちのあまだれ
つながりあまだれ

鳥瓜

千葉縣 石田 松風

お脊戸の小藪は
もう日がくれて
雀のお家によ
灯がついた

赤い提灯

まだ消えぬ
青い提灯
まだ消えぬ

雪の日

京都市 井上のぶを

コン、コン小雪の
降る朝は
タン、タン小狗は

嬉れしかろ

コン、コン小雪の
降る晩は

困るだらう
コン、コン小狐

つくし

茨城縣 軍司 龍川

ぼつかりあたかい
春日和
つくしの行列
どんと出た

梅

大分縣 小野 粹

お背戸の梅の木
花さいた

うぐひすないてる

ホツカラリ
ホツカラリ

お月さん

大阪府 名方 和郎

お月さん大きな
傘さした

お星さん傘なし
困るだらう

お月さん中へ
入れてやれ

雀の巢

東京市 蟹谷榮一郎

大寒小寒

乳草

臺北 武藤 穰子

お乳の出るそな
乳草が
おやぶの中に
生えてゐた

母ちやん無い子は
来てごらん

おちちがほしけりや
来てごらん

おちんをあげよと
ちんぐさが

おやぶの中に
生えてゐた

雀の巢
椽の頂上には
チユン〜〜

田舎

新潟市 土田 真治

廣いたんぼに
松ひとつ
暮の森には
もやか〜り
ねぐらへかへる
鳥もない

森の家

山口縣 佐野 操

木枯吹く夜だ
寒い夜だ

森の木の間に
灯が見えた

宿なし鼻が
啼く晩だ

チラツと赤い
灯が見えた

森のお家だ
夜の更けた

ナボリのお人形

横濱市 久保ひさし

ナボリのお人形
いたいた
見たればお目々が
潤んでた

かはいお目々に
ほろほろと
涙がをちそで
なりません

かはいさうにと
お母さんに
こつそり返へして
やりました

ぐる〜眼玉

東京市 松川 重雄

ぐる〜眼玉の兎さん
可愛い小供の番をおし
お山は緑でいつぼいだ
甘い大根あげませうよ



童謡

野口雨情選

(子供篇)

一つ星

山梨縣 市川 幸子

東の空に
ボツツリと
一つ 明星
光つてる
あの星まだ
夢みてる

子猫

群馬縣 細野原三郎

昨日家へ
かへる時
三本辻に
すてられた
子猫は今ごろ
何してる

冬

慶北 金英達

大きな
北の風
小さな
青い冷たい
冬の空

あかるい晩なら
がながなく

白い家

千葉県 長谷川ふで

寒い寒い寒い風
新道の砂は
まき上る
道のそばの家々は
砂にまかれた白い家

夜

静岡県 佐野 幸一

夜が来た
さむしい
夜が来た
人のとほらぬ
夜が来た

お月さん

仙臺市 小倉アツ子

お月さん来い
お月さん来い
おぶんお
するから
お月さん来い

風

茨城縣 高原 正

ぬかつた道に
風が吹く
ゆうべの風が
今日も吹く

雨

山梨縣 千ヶ崎英三

雨々ボロリ
雨ボロリ
高い木の葉から
ポロリと落ちた
雨ボロリ

をちさん

埼玉縣 中村 芳江

はたけの中でをちさんが
ざつくり／＼さくつてる
子どもがそばで
それみてる

乳兒

山梨縣 丸茂 商三

ほこをおぶつて出て來が
外は北風
寒い風

どこかのぼこも泣て居る

海の月

對馬國 木浦 柴次

大きな
寒いお月さん
小さな
涙のお屋さん
玄海灘を
照らしてる

小鳥

静岡県 大竹 政一

ほろ／＼ほろり
日暮れ頃
啼く鳥小鳥
ほろ／＼ほろり

店屋のちよらん

門司市 木登 正一

店屋のちよらん
フリーフリー
ぶらんこ
紅ちよらん
フリーフリー

白椿

仙臺市 大友 喜助

庫裏のこかげの
白つばき
姉さんお嫁に
行きまいた
何んだか淋しい
家の中

雨

茨城縣 高橋 三郎

雨が降る
雨が降る
さびしい道に
雨が降る
雨はぬか雨
こぬか雨
ちやのめの傘が
通ります

えんかは

静岡県 後藤ふじよ

ぬくとい
えんかはで
妹が一人で
ひなたぼっこ



詩年幼
選水牧山若

冬木立(賞)

山梨縣北巨摩郡
泉校 尊六

坂本サダホ

西空あかるい
うすい木立が
すきとほる

ばらの花

同人

利代さんの家の
菜畑のすみに
にく色の
八重のばら一つ
咲いてゐる
群、あとの三篇も皆よかつた。明るい水

彩畫の様な歌であつた。(秋水)

夕 暮(賞)

八幡市校光
長尾 町

波多野 剛男
(十四才)

町の日が暮れた
私の家には
電燈ついた
海の日が暮れた
小船はかへりを
急いでる

群、これも大人をまかす立派な「詩」である。(秋水)

二人のおばさん(賞)

山梨縣北巨摩郡
泉校 高一

浅川 増子

白いかさかぶつた
二人のおばさん
田の畦を通つて
山の方へ行つた
群、いなア、何といふ子供々々しい景色だらう。(秋水)

名古屋市
愛知高等学校

近藤 眞作

綴方

齋藤 佐次郎選

大根取り(賞)

山梨縣東山梨郡玉宮校 尊六

古屋 一明

今年は大根や菜の當り年で、この家の畠を見ても、大きなうねをして、太いうでをのばした様になつて居る。僕も昨日家の大根取りに手傳つた。まづ、一本引き抜つて、總身の力を腕にこめて、うんと引き上げた。どうして／＼抜けさうもない。父や兄さんの方を見ると、あまり苦勞しないで、すぼり／＼と引抜いてはついてゐる土をはらつてゐる。僕だつて抜けない事はあるまいと顔を赤くして

引張つた。どさり、尻もちをついた。よく見ると、大根を半分ばかり両手で握つて居る。父は「曲げて引張るから、折れるのだ。まだまだお前にはだめだ。七八本づゝ家へはこんだはうがよからう」と言はれた。自分でもまだ、だめだと思つた。

仔犬を打つた時(賞)

前橋市森小路三〇

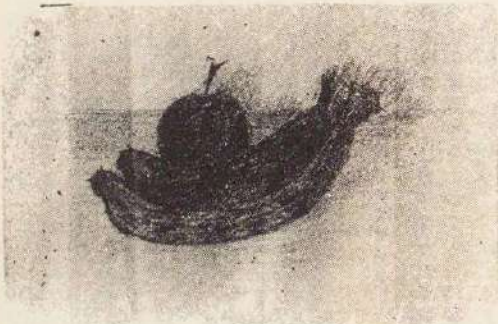
山本 正男

僕の家へいつもやつてくる仔犬がある。まる／＼と太つてゐて毛は茶色である。僕のかほを見るといつもビスケットをやるものだから、尾をちぎれると思ふほどふつてじやれつく。ほんたうにか愛らしい。僕がとぶと後を追ひながらじやれつくので、時々足や尾をふ

んで「キャン／＼」となかせる事がある。或日僕が、たいくつまぎれに空氣銃をもつて庭へ出て遊んでゐると、どこからはひつて來たのか、小犬が僕を見つけて、じやれつい

自由
畫も
賞)

東京
京橋
市區
安 池 (才三十)



て來た。僕は面白半分に、たまをいれず銃を仔犬の前へつき出した。仔犬は變なかほをしながら銃の口をのぞいてゐる。ひきがねを引いた。「パツ」といふ音に仔犬は驚いて後へさる。ひやうしに、べつたりしりもちをついた。僕はをかしさに「ぶツ」とふき出した。仔犬は不思議さうなかほをして銃の方へよつてくる。僕はまた銃を仔犬の前へつき出すと、仔犬は後すじやりをしながらたまり水のそばへくる。僕は水面めがけてひきがねをひいた。「パツ」といふ音とともに「パシヤツ」と、はね水が、仔犬にかゝつた。仔犬は驚いてとうとう逃げ出した。僕はますます面白くなつて、玉をこめてこんどは逃げてゆく所を射つた。

冬だのに
役場の池に
ふなが一匹上つてた
評、珍しくけさは暖かだ。(牧水)

柳の實

臺北旭校 武藤 珍子

柳の實が
とんでるよ
白くて
フワリ〜してて
クル〜まはつて
とんでるよ
雪つてあんなに
ふるんだらう
評、やばらかな歌よ。(牧水)

うちの雞

山梨縣北巨摩郡 坂本 正敏

巢からおりた雞
しもばしら立つた庭に
片足で立つて
向うを見た
評、面白い寫生だ。(牧水)

馬

山梨縣北巨摩郡 浅川 義弘

夜中に
べんじよにおきたら
馬が
さむしさうにないた

朝

東京府龜戸町 池浦 ハツイ

霜がをりた地面
東の空は
紅い

電氣屋さん

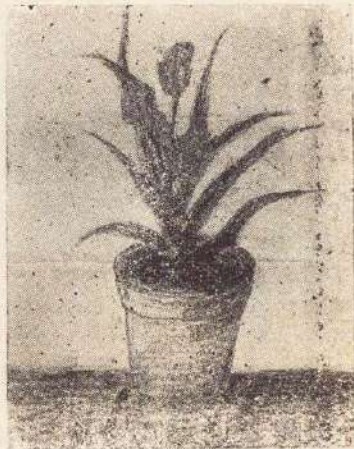
山口縣 田中善二郎

電氣屋さんが電信柱へ
登つたと思つたら
学校の外燈が
ぱつとついた

ゆびきり

廣島女學校 足利 富子

ゆびきりばつば



「バツ」といふ音、「キャン〜」といふけたましい、仔犬の叫聲が夕暮の空気をやぶつて、ものすごく、きこえた。「キャン〜」こゑはますます強くなつて行く。僕は何んともいへぬ氣持になつて家へとびこんだ。「たら〜」と流るゝ血」などと言ふ語があたまに浮んでくる。死にはしないだらう、かう思ふと僕はたまらなく

叔母さん

茨城縣多賀郡日立第四校高二

小野崎 一郎

「魚、魚はよござんすか。僕は本屋の中でだまつて聞いてゐた。何だか聞きなれたやうな聲である。はつと思つて外へで、みると、久慈濱へお嫁に行つた叔母さんだつた。グリーンとくさい臭がした。僕

は知らないふりをしてゐた。見つけたとみえて「おや何してきた」「え、少し用があつて」「早く大きくなつて仕事しろよ。お父さんは年取つてゐるから」「僕にいきあふ度に年中さう言ふのが例である。その度毎に一年に年二つ位とりたいた氣がする。魚だすからなア」「え、有難う。皮むき魚五匹ばかりくれた。ありやあの人只でくれた」な

豆腐屋さん

群馬縣勢多郡荒砥第二校等四

細野陣三郎

ど、さわいでゐる。暗くならないやうに早くネさやうなら」「さやうなら。」「魚、皮むき魚」といふ聲もだん〜細うなつた。薄ら冷めたい風がさつと吹きくる度に、街通は黄塵萬丈の穢を呈すので後向かすにはをられなかつた。僕はもう田圃へで、しまつた。



自由山 細野陣三郎
山路の秋
ギシ〜と豆腐を
かつぐてんびんばう
の音がきこえた。や
がて家へ来た。今日
は。豆腐はいかゞで
すか」と言ふ。父さ
んが「では二つもい
たゞくかな。油げは

お手々がいたい
「あしたもまたね」
ゆびきりした子
あしたも来るかしら

雨の日

英城縣水海道
校尋二 高木 正三
まどをあければ
つないだおうまがぬれてゐる

眞暗だ
ちやうちんの
ひかりが
みず／＼しい
葉の緑色を
照す

すゞめ

兵庫縣三原郡
堺校尋四 青木 晃吉
すゞめはぼく見たら
草にかくれた
見るのやめたら

また出てきた

ひよこ

鹿兒島市
山下校尋三 富田 次郎
ひよこに
何でもやると
おどろく

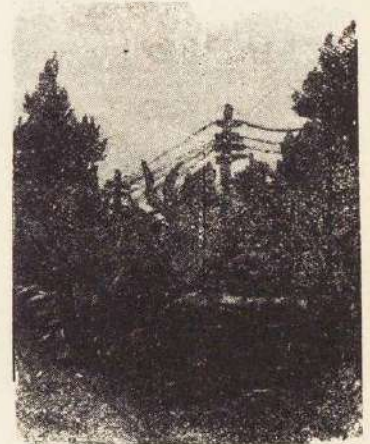
黒牛赤牛

香川縣木田郡
米上校尋六 池淵 淳一
黒牛赤牛どこの牛
赤牛小牛は僕の牛
大牛黒牛近所の牛
毎日山で出合ふ牛

さ

京都市
高徳校尋二 木村 和子

しろい／＼
まつしろいきりが
たくさんふつてゐる
むかうにみえるは
なにやいな



あるかい」と言ふと、豆腐屋さん
は氣毒さうな顔をして「もうみ
んな賣れてしまひました」と言ひ
ながら、箱の中をしらべて「あ、
三枚ありました」と言つた。それ
ではそれもいたゞくと父さんが
言つておあしをはらつた。「豆腐屋
さんお茶を一つばいのんで行きな
い」と言つたら「御ちそう様」と言
ひながらこしを下した。そしてお

自景
茶をのみながら父さ
んが「豆腐屋さんは
一日に何所まで賣り
に行くのだい」とき
くと「荒子から下さ
あ」父さんはおどろ
いたやうな顔をして
「それではよほどい
そがしからう」と言
つたら「え」と言つ

暖い日

日下部尋常高等小學校高一
市川 安子
すみ渡つた冬の天空には、一ち
ぎりの、雪もない。暖い冬の日、

私は日當りのよい縁がはで、勉強
して居りました。廣いお庭は暖か
です。えん側のはしの方では、妹
の文ちやんと、お隣のふさちやん
とで、手毬歌を歌ひながら、さも



自景
おもしろさうに、まりをついて居
ります。其のうちに、文ちやんが、
むかうを通るは、おいもやさん
おいもは、一俵幾らです
二十五銭に、まけてやる
いまちつと、まけなきや
ちやからかばん
などと、たのしさうに、歌ひなが
ら、まりをついておはせてゐる。
あちらの、おえん側では、暖いお
日様の光を、うけながら、家の難
は、どろ足のまゝ、えん側に、上
つて、一列にすつと並んで、さも
ぬくとさうに、目をふさいで、日
なたぼつこをしてゐる。私は、此
れを見ると、くやくしくなつちやつ
た。せつかく、今朝つめたい、思
ひをして、きれいにさふきんがけ
をしたのに、と、思ふと、くやくし
くなつて、いきなりとんでいつ

石川縣
川喜餘
山景
自景
高澤
平忠

雫

福井県大飯郡 武藤伸三郎
高濱校高一
松の葉の露
いやになつたか落ちて来た

野球

香川県木田郡 佐藤 清一
水上一校
野球に負けた八對二
昨日も今日も負けどほし
負けた野球がして見たい
明日が 明日が
待ち遠しい

一手橋

千葉県東葛飾郡 松本百合子
手賀校尋五
一本橋 渡ろ
そろ／＼渡ろ
まるきの一本橋
はだしになつて
手々ひいて渡ろ

犬のあくび

栃木縣栃木 君島八智郎
第一校尋五
いたづらをして
しばられたマリ(犬)が
たいくつさうにあくびをした

床屋さん

臺北市 國宗 督平
南門校
チョッキン／＼床屋さん
くしでなでつけチョツと切る
かみは花火とバツとちる
チョッキン／＼床屋さん

東宮殿下御成婚

福岡縣若松 絹江
山下町 杉枝 (十五才)
明日はめでたい
東宮殿下の御結婚
我等國民一同は
殿下へお祝申しあげ
明日はめでたい御結婚
祝へ祝へ我等國民

たきもの賣

山形縣 吉田よしゑ
山邊校尋五
私のばんちゃんか
たきものかつた
五錢まげらせて
かつた

一羽なしの雞を、おひはらつてしまつた。おひはらつたあとを見る
と、えん側は、とりのどろ足だら
け、しようがない。又さふさんが
けを初めた。

尾の長い猫

門司市清見町 出石 三雄

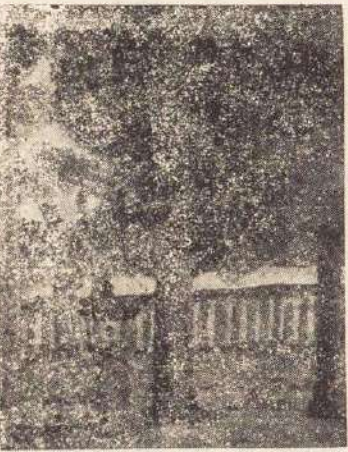
外では雨がしとしと降つてゐる夜だつた。僕が見さんと姉さんと一緒に
お茶の間で御飯を食べてゐた時、どこから来たか、襖の隙
から尾の長い小さな猫が入つて来た。猫の嫌ひな姉さんはびつくり
して飛び上つた。猫は餘程おながすいてゐると見えて、のび上つ
てお膳に足をかけて食物を探してゐた。兄さんが手のひらに御飯を
のせお膳の下に入れて、チョツ

一四二
くと呼ぶと、あわて、お膳の下に入つて行つた。尾がお膳につかへたらスツと下に下げた。「みつちやん。お願ひだからその猫を外に出してよ」と室の隅にさつきからお箸を持つた儘つ立つてゐた姉さんが氣味悪さうに云つた。僕はお膳の下に手を突込んで、猫の首玉をつかんで引出した。猫はさうやつて室の外に出される迄、もがきもしないでチツとしてゐた。寝る時姉さんは猫を洗面所に入れて戸をしつかりとめて寝た。次の日ねえやがその猫を山の下に捨てに行つた後で、洗面所の中を見ると、隅の方にチョツピリと小便がしてあつた。

汽車

山梨縣大月廣里東校尋六 杉本 幸好

私「梅ちゃん。ぼつぼがとまるから見べえなあ」といつて鐵管の上から汽車の來るのをまつてゐました。大せい來てあぶないやうでした。すると遠くの方から汽車の笛の音が聞えました。見に来た人達が口々に、
「それ來た汽車が。それあすこに見べえ」と言ひました。五六分たつと汽車が來ました。汽車はいつものよりのめく來るの
でした。汽車は私の前でびたりとまりました。土方や線路工夫等が汽車にとび乗つてせめんたるをおろしました。汽車からおろしきつたら車掌らしい人が笛をふきました。



自問社 由神 畫 市町 靜車 岡町 三田文 (才四十)

講演だより

唐津より大月まで

講師 沖野岩三郎

私は昨年十二月廿六日に東京を出て、山陰道に入り、九州唐津まで行き、歸途は中央線で山梨縣に入り、二月廿一日の午後漸くに歸京しました。此の間に私は二百三十五哩を踏破しましたが、私の今度の旅行は講演が目的でなく静かな所へ引籠つてみツしり筆を執りたかつたのです。

三日に、但馬の城の崎で童話に就ての講演會を致しました。其晩はひどい風で、雪が窓硝子にびゆうびゆう吹きつける寒い晩でした。けれども百二十三人の婦人會員、青年會員が集つて、私の話を二時間半みツしり聞いて呉れました。夫れが縁となつて、私が城の崎を出立します前の日、二月十一日に小學校の講堂で六百の子供さん達に一時間のお話をいたしました。

二月十四日には大阪の日本橋、愛生教會で會員の人達に對して三十年前の子供と今日の子供との比較研究をいたしました。二月十五日の午後宇治町の上林一雄さんのお宅へ行つて、其所の上林節子さんの作つた童話や童話を見せてもらひ、午後七時から宇治町の小學校で、青年の方々百五十名に對して童話と家庭教育との關係を話し、翌十六日は小學校の生徒さん達にお話をしました。二月十八日に京都を出立して、山梨縣の大月へ着いたのは十九日の午後三時でした。大月の小學校には桐の花社といふのがあつて、其の會員の方々は非常に童話童話

の研究を熱心によつてゐられます。桐の花社とは昨年來の約束だったので同社の仁科始さん、加藤幹雄さんや三枝秀行さん、小宮剛さん小宮公造さん達が、停車場へ迎へに来てゐて下さいました。其晩は鳥澤町から誌友の廣瀬俊さんも態にお出でになりました。十九日の午後七時半から、大月小學校の補習學校で青年の人達に話を十一時頃宿へ歸りまして、廿日の朝十時から、大月小學校の講堂で、廣里東小學、同西小學、猿橋小學、犬目小學、強瀬小學の生徒さん達千五百餘名にお話を致しました。尋常一年から高等科の二年までを一緒にして、一

時二十分間を最も緊張してしかも静かに愉快にお話が出来たのは嬉しうございました。生徒さん達も先生達も皆喜んで下さいました。午後二時から四時まで、小學校の先生達や、婦人會青年會の人達に對して、童話教育の事についてお話をしました。六時からは濱田旅館の二階で、桐の花社の會員や教育者の方々は、私と、同地の中學校長石塚末吉さんをお客として慰勞會を開いて下さいました。そして童話童話に関する、いろいろの意見や研究發表があり、神戸のサニテリアムで水谷央さんから戴いて來た、笹舟小舟の歌を練習して、十一時過に散會しました。

桐の花社の團員である廣瀬俊三さんは一年志願兵で入營中ですが、二十日の會へ列席する爲め東京から中隊長の許可を得て參會されました。其の熱心さには、一同が皆な驚かされてしまひました。廿一日の朝、桐の花社の人達にお別れして、東京へ歸りましたが途中鳥澤驛で、汽車が停りますと其所に、誌友の廣瀬俊さんが來て居られました。僕さんは俊三さんの弟さんで運送店を営んでゐられるのださうです。勇ましい労働服を着てゐられました。斯んな人達が、童話や童話に熱心になつて下さるので、喜ばしいではありませんか。



通信

自由畫選評

山本 鼎

▽高澤忠平君の繪はどけないいゝ繪です。そして近景中景遠景の調子がよく合つて居ます。三人の子供は寫生をして居るのでせう。棒杭や子供の影を映した水面もよくかけて居ます。たゞ遠山の線が少し他との工合が堅すぎましたね。

▽三浦美根子さんの「景色」物の姿勢なり形態なりの感じが力強く出て居ます。筆の味もよく、調子もありますが、色が一番いけません。もつとそれ／＼の色の變化を見て御覽なさい。自然の美しい灰色を見て御覽なさい。

幼年詩選評

若山 牧水

▽前號で個人組の投稿が少いと言いたところ、偶然にも今度はたいへん多かつた。佳いのもあつた。今後ますます多くなることを希望する。父兄たちも勤めて下さい。

今少し清新な子供々々しいものがほしい。

綴方選評

齋藤 佐次郎

▽今月の綴方の数は二ヶ月を一しよに集めた爲めに驚く程だつた。しかし、その割合にはいゝ作がなかつた。中で特に目をひいたのは二三の作だつた。それも、例月の比へると、さして上出来ともいへないやうに思ふ。

▽小野崎一郎さんの「叔母さん」は深い印象を残す作だ。こゝに書かれた事柄からさう感じるばかりではない。それともなつて、書き現し方が大膽力強いためである。しかし、こゝに書かれてあるだけで言葉が足りない

と思つた。その時の複雑な心持ちは、これだけでは十分に書き現し切れてゐない。

童話の選後に

野口 雨情

原稿の字は、上手に書かずともよいから、はつきりとわかりよく書いてないと選擇のとき大變困ります。皆様方の中には、一枚の洋紙や用箋やの裏と表へ書いたり、一枚の紙へ幾つもの童話を書いたりする悪い癖があります。

童話の選後に

齋藤 佐次郎

▽澤山に面白い作がありました。どれを推薦作にしてもいいか迷つてゐます。それで、推薦作の發表は次號まで延して、これまでの推薦後補作の中から一篇、左の作を選んで次號に

金の星誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜がございますから、御希望の方は本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。

編輯室より

(記者)

◇今月は紙面がない爲めに何も掛けないのが残念です。たゞ記者一同大元氣で働いてをりますことを皆様方に申し上げます。特に六月號のためには、非常に面白いお話ばかりを集めることが出来たので、發表のあかつきは、さぞ皆様から喜んでいただける事と、内心大に喜んでゐる次第でございます。

きやつきやつ物語

久米 絃一

久米氏の作はどれも拙いものがありませぬ。作者の力量を十分に認めることが出来ませぬ。この作は同氏の作中でも特に優れてゐたと思ひます。久米氏は「金の星」懸賞募集條説童話で二等當選の作者です。

自由畫掲載外佳作

前田 豊子(東京) 松波 春男(岐阜) 金丸 榮子(長崎) 長澤 吉男(東京) 波多野 國男(福岡) 西井 亮(不明) 森 敏野(不明) 小宮 武信(山梨) 大森 吉明(山梨) 後藤 静夫(岡山) 高尾 觀(神奈川) 長谷川 トリ(山梨) 高宮 喜美江(千葉) 青木 英五郎(奈良) 熊谷 兄也(長野) 高橋 大(岐阜) 吉田 文男(岐阜) 愛知 俊繁(岐阜) 葛西 ぼま(岐阜) 前田 孝四郎(東京) 七穂 カネ子(長崎) 向 トシエ(長崎) 太田 正(静岡) 岡添 信次郎(東京) 大谷 喜代子(北海道) 中島 幸雄(福岡) 高澤 忠平(岡山) 内田 秀一(埼玉) 榎 八郎(和歌山) 千ヶ崎 英三(山梨) 相原 秀雄(東京) 大崎 周英(新潟) 關地 禮子(朝鮮) 佐野 文一(静岡) 羽田 雅雄(山梨) 金子 きよ(横濱) 中村 英一(東京) 渡邊 敏(横濱)

幼年詩掲載外佳作

草場 喜代子(朝野) 高橋 たか(千葉) 近藤 真作(愛知) 萩原 運(香川) 平井 百合子(山梨) 安則 静子(山梨) 澤田 好慶(香川) 平井 八重子(山梨) 萩原 利雄(福岡) 松本 マキ(香川) 岡添 喜久子(東京) 戸村 静雄(山口) 笠原 イシ(山形) 森 敏郎(東京) 西村 耕太郎(兵庫)

綴方掲載外佳作

川野 重義(千葉) 藤原 正夫(埼玉) 佐藤 秋一(山梨) 深井 正二(秋田) 波多野 國男(福岡) 浦多 ふみ(福岡) 森川 恒彦(香川) 大島 一行(山梨) 中野 大(山梨) 海野 勝男(不明) 田中 實(兵庫) 井關 休四郎(長野) 井關 正子(長野) 宮崎 秀一(香川) 堀 竹三郎(長野) 山田 正胤(新潟) 古橋 讀文(長野) 小林 製装平(長野) 前田 孝四郎(東京) 永井 よしえ(京都) 岩倉 房子(千葉) 川野 重義(千葉) 野地 富美子(和歌山) 宮澤 健二郎(山梨) 藤田 米三郎(岐阜) 市川 盛作(不明) 戸村 静雄(山梨) 松川 さち子(静岡) 山本 光夫(山梨) 藤本 司郎(山梨) 藤本 司郎(山梨) 片岡 美穂(千葉) 中 輝雄(兵庫) 梅田 龍子(東京)

新しく出た本

◇をさなものがたり(島崎藤村先生著) 文壇の大家島崎藤村先生が、少年の讀物として書かれた本であります。はしがきの中に、「長いこの世の旅の間には、みんなに話したいと思ふかすかすの思ひ出があります。わたしはさういふお話を太郎や、次郎や、三郎や、それから末子にするつもりで、今度新たに一冊の小さな本に作りかえお話ししました。それがこの『をさなものがたり』です。この書には興味深く且つ藝術のほかにけいこき短かいお話が八十二篇集められてあります。四六判二〇五頁 定價金一圓五十錢 東京勉勵社 月刊研究社發行 振替東京二八六〇一)

家なき子(三宅房子先生譯述)

この書はフランスの作家マロの名著を三宅房子先生が、その明快でならかな筆で譯せられたもので、一人の可哀想なみなし兒の生涯を書いたものであります。この本を讀むものは誰でも涙の中に深い人生の教訓を學びたいものになつたもので、非常な英本でありました。この挿畫も同じく寺内英本でありました。この譯文も、記者は、この世界各國に譯された名作を何人にもお話ししますが、この譯文に、子女を有する日本の各家庭に、この健全に、興味深き物語の變遷をお話しするに、一冊の定價金一圓八十錢 東京外田五九三六五十一 定價金の星社發行 振替東京五九三六五十一

童話掲載外佳作

青柳 花明(群馬) 香西 義隆(香川) 田崎 夜雨(茨城) 米山 櫻(山梨) 澤井 喜代志(東京) 原金 登(東京) 吉川 三郎(東京) 高橋 三郎(茨城) 三村 精一(東京) 岡添 信次郎(東京) 松井 多門(静岡) 千ヶ崎 英三(山梨) 田尻 ゆきな(熊本) 中井 ひろし(和歌山) 菅 時三郎(大阪) 今泉 仁藏(福岡) 稲村 謙一(鳥取) 野坂 治(福岡) 梶田 俊治(愛知) 横田 雨浪(横濱) 野村 時樓(茨城) 倉田 眞一郎(三重) 青柳 一夫(神奈川) 田中 善三郎(山口) 林 功夫(三重) 松本 眞砂(山梨) 佐藤 よしむ(兵庫) 橋本 静江(朝鮮) 佐藤 よしむ(神奈川) 田口 松男(埼玉) 土田 眞治(新潟) 長田 六郎(東京)

童話佳作

三谷 公臣(京都) 野口 勇(鹿児島) 野路 丘君(朝鮮) 河野 敏雄(山梨) 戸塚 敏雄(山梨) 大村 磐山(山梨) 浦島 長英(鳥取) 谷口 長樹(三重) 田村 繁松(京都) 田中 興志雄(兵庫) 安永 千鶴(東京) 稲葉 泰一(宮城) 上羽 光子(廣島) 堀 竹三郎(長野) 吉松 しめ子(山口) 後藤 静夫(岡山) 高田 徹風(岡山) 近藤 真作(愛知) 近藤 廣直(東京) 竹濤 喜代(長野) 吉田 龜吉(埼玉) 宮下 佐八(長野) 杉森 正三郎(東京) 金澤 貫一(東京) 久保田 勳(横濱) 福永 英左衛門(東京) 小倉 旭宮(城) 出石 三雄(門司) 和田 弘(福岡) 稻村 謙一(鳥取) 橋原 良雄(東京) 石光 敬平(東京) 松本 昇平(東京) 佐野 操(山口) 山路 光太郎(山梨) 篠田 米三郎(岐阜) 笠井 露香(香川) 西村 肇(不明) 二階堂 美登里(福岡) 廣瀬 義正(新潟) 伊藤 誠二(東京) 中俣 美智治(長野) 藤田 米三郎(岐阜) 山田 明(東京) 中村 信行(愛知) 柴田 三郎(栃木) 遠山 正(山形) 岡崎 文一郎(大阪) 岡崎 信次郎(東京) 高橋 里枝(東京) 梅田 龍子(東京) 石丸 滿行(香川) 吉澤 泰一(群馬) 服部 福枝(東京) 寺本 正子(東京) 河野 俊夫(愛媛)

金の星新誌友名簿

土山 孝生(福井) 金子 政保(東京) 佐藤 小三郎(宮城) 渡瀨 侯(山梨) 齋藤 長一(秋田) 森田 達夫(北海道) 横田 克二郎(神奈川) 宇野 茂(埼玉) 林 功美(三重) 中戸 勇市(兵庫) 高阪 正美(富山) 長野 桂子(愛媛) 鄭 鉄(朝鮮) 安鐘 學朝(朝鮮) 鄭 和(朝鮮) 白石 菊一(福岡) 酒井 みき子(北海道) 窪田 新太郎(香川) 山崎 大介(愛知) 窪田 邦正(千葉) 久野 富代(北海道) 湯川 初江(長崎) 草野 幸一(福岡) 花田 一(北海道) 竹内 英夫(山梨) 石川 勇治(山梨) 東山 清一(岩手) 水野 力(和歌山) 小瀧 三四郎(佐賀) 成瀬 明春(宮城) 森本 高福(福岡) 石川 仁三(鹿児島) 高橋 ちよ(香森) 中島 清(大阪) 高野 龍子(福岡) 中川 虎雄(高知) 山田 初子(福岡) 中川 虎雄(高知) 安藤 鶴子(徳島) 久保 たけ子(秋田) 久保 たけ子(秋田) 柳田 利邦(和歌山) 岩野 たけ子(大阪) 戸川 剛太郎(佐賀) 及川 英愛(愛媛) 坂井 直一(茨城) 泉 六郎(栃木)



讀者だよ

▼雪に鎖されてゐた山深い甲斐の天地にも春が訪れて呉れました。梅が咲いて鶯が朗らかに唄つてゐます。神野先生をお迎へして幼い子供達の爲に面白いお話をして戴いたのも一年前の春でした。私は今あの當時の懐しい思ひ出に就つて涙含ましい感激に打たれながらペンを握つてゐます。今朝は登校の路すがら野原の石垣の間にヒヨコも可愛い野原の花が咲いてゐるのを見ました。可愛いすめれ！；あゝその草にも似て可愛い少年少女私はこの小さい愛の懐に優しい致子を抱いて童話と童話によつて溶化された子供の國の建設に努力しようと思つてゐます。金の星は實に私達子供の國の建設者にとつて唯一無二の方であると信じて

▼野口先生、私は先生の出した本の愛読者です。そして先生に對してなんとなく慕はしい感じを持つて居る一人です。私は今、初等教育にたづさばつてゐる者でありますが、子供その者でなければ味ふ

▼私は去年の一月から友人に言はれて『金の星』の愛読者となりました。まだ一度も投書していません。たから今日一ツ輪を描いて見ましたからどうぞ見て下さい。(長野 師範附屬校 高村功)

▼私は時々童話や童話を作つて居りますがまだ一度も何の雑誌にも投稿した事はありません。先日友人から貴社の『金の星』を買つたので一生懸命読んで見ました。全く純真な雑誌だと思ひました。今此所に随分貧しいものですが投稿させて頂きまして、こんな物でも掲載して戴きたいと思ひます。そして一そう奮發したいと思ひます。(東京府下大崎町 的場盛)

▼神野先生、先生のお話を聞きながら『金の星』の讀者の一員になりました。今度大月の本屋から毎月取る事にしました。童話童話、自由筆等々『金の星』にて買ひたいと思つて色々苦心してゐ

▼雪に鎖されてゐた山深い甲斐の天地にも春が訪れて呉れました。梅が咲いて鶯が朗らかに唄つてゐます。神野先生をお迎へして幼い子供達の爲に面白いお話をして戴いたのも一年前の春でした。私は今あの當時の懐しい思ひ出に就つて涙含ましい感激に打たれながらペンを握つてゐます。今朝は登校の路すがら野原の石垣の間にヒヨコも可愛い野原の花が咲いてゐるのを見ました。可愛いすめれ！；あゝその草にも似て可愛い少年少女私はこの小さい愛の懐に優しい致子を抱いて童話と童話によつて溶化された子供の國の建設に努力しようと思つてゐます。金の星は實に私達子供の國の建設者にとつて唯一無二の方であると信じて

▼野口先生、私は先生の出した本の愛読者です。そして先生に對してなんとなく慕はしい感じを持つて居る一人です。私は今、初等教育にたづさばつてゐる者でありますが、子供その者でなければ味ふ

▼私は去年の一月から友人に言はれて『金の星』の愛読者となりました。まだ一度も投書していません。たから今日一ツ輪を描いて見ましたからどうぞ見て下さい。(長野 師範附屬校 高村功)

▼私は時々童話や童話を作つて居りますがまだ一度も何の雑誌にも投稿した事はありません。先日友人から貴社の『金の星』を買つたので一生懸命読んで見ました。全く純真な雑誌だと思ひました。今此所に随分貧しいものですが投稿させて頂きまして、こんな物でも掲載して戴きたいと思ひます。そして一そう奮發したいと思ひます。(東京府下大崎町 的場盛)

▼神野先生、先生のお話を聞きながら『金の星』の讀者の一員になりました。今度大月の本屋から毎月取る事にしました。童話童話、自由筆等々『金の星』にて買ひたいと思つて色々苦心してゐ



金の星社 五月號

出版だより

『青い目の人形』 愈々發賣!!

野口雨情先生の傑作童話選集ともいふべき『青い目の人形』が出来ました。實にきれいな本です。先づ童話集として、装幀と體裁の上からだけでも、これ程美しい本はまたありません。金の星社の發行書として十分自信を持つことの出来る本です。ましてや、その内容にいたっては、雨情先生が全力を傾けたものだけに、雨情先生の著書としても、これ程に力のこもつてゐるものは、ないと先生自身もいつてをられます。またそれだけに大層な好評です。まだ本も出来ない内から、あちから

金の星社編

『名著大系』出来!!

金の星社の一事業である『世界少年少女名著大系』第二編の『ナポレオン物語』の方が先になつて發行になりました。『ロビンソン漂流記』の方は印刷所の都合で四月末になります。

出来上つたところを是非一度御覽下さい。寺内萬治郎畫伯の裝幀にかざられて立派な本となりました。最初は箱に入れない發定であ

りましたが、愛読者の方々からの希望もありましたので、特別上製の箱入りとして、定價を金九十錢に改正しました。總タロース金文字入りのこんな立派な本が、どうしてか安く發賣になつたかと書店から驚きの眼を以て眺められてゐる程の立派な本です。

世界的偉人ナポレオン。古代に於てはシーザー。ハンニバル。近代に於てはナポレオンと並び稱せられて、世界歴史のある限り語り傳へられる此の大偉人の生い立ちセント・ヘレナ島で死ぬまでの變化極りない一生をかいた、他に得がたい面白い本です。

少年諸君は、必ずや大英雄ナポレオンに對して大きなあこがれを抱いてをられるでせう。その英雄の傳記を知るためにも、是非一度読んで置かなければなりません。尙、三篇の『ドン・キホーテ』も

『家なき子』忽ち三版となる

三宅房子先生の努力になつた世界的名作『家なき子』は出版後ほんの僅かな日数であるのに、もはや第三版を發行するに至りました。しかも、其の三版ももう直きになりさうです。

『赤い靴』發賣!!

『金の星童話曲譜集』の第四輯『赤い靴』は四月十五日に發行になります。曲目は、山彦、朝鮮館屋、三月さん、姥捨山、眠り姫の子、赤い靴の六曲です。いづれも本居長世先生の名曲ぞろひであります。中でも『赤い靴』の曲は『青い目の人形』と共に津々浦々にまで唄はれてゐる名曲です。全部伴奏附で、裝幀は岡本錦一先生の苦心になつた美しいものです。

沖野岩三郎先生作 長篇 山六爺さん (近刊)

△定價金壹圓卅錢・送料十五錢▽

『父戀し』の前篇 『森の祈り』

(近日發行)

沖野岩三郎先生の名作として、大好評を以て迎へられた『父戀し』の前篇ともいふべき『森の祈り』が近日中に發行になります。二百二十頁餘の長篇物語りです。横断的少年少女の讀物として、これ程適當な本はないと信じます。涙をもつて讀ますにふさわしいと同時に、大きな人生の教訓を與へる作です。そしてまた、例によつて先生獨特の面白いお話です。

『金の星』の合本

- 第一輯 (絶版)
- 第二輯 金一圓八十錢 送料 十四錢
- (第五卷一號より同六號まで)
- 第三輯 金一圓五十錢 送料 十四錢
- (第五卷七號より同十一號まで)

小島政二郎先生譯述(キップリング原作) 『狼少年』(近刊)

『世界童話文學叢書』の第二篇として小島政二郎先生の一大苦心の書、狼少年を發行します。目下印刷中です。原作は世界的文豪キップリングの作になつたもので、狼に育てられた少年の不可思議極る物語りです。

一度この書を讀んだ者は、恐らく一生忘れ得ぬ事のない深い印象を受けるでせう。印度の大深森の中で、狼や虎や豺や猿などが、どんなに面白い物語を作つたか。その間に育つた少年モーグリ。冒険談ほどんに面白く、恐らく最後の頁を讀み終るまで、巻をおくことが出来ないであります。小島先生はこの書に就て次の如く述べてをられます。『原作者キップリングは此の本によつて初めて多數の讀者を得て、一流の作者の仲間入りをしたのだといふことである。これが若し本當なら、誠に尤ものお話だと思ふ。

私共の狭い讀書範圍と、耳學問とでいふことを許すならば、この本に匹敵するやうな小説は、キップリングが大人のために書いた『森』の小説の中には容易に見出し難い

武井武雄先生著並ニ畫 繪入 ぶう太郎鍛冶屋

- △三色版及一色刷畫三十枚入△定價金壹圓卅錢
- △四六判箱入三〇〇頁美本△送料十五錢

『金の星』でおなじみの武井武雄先生の最初の繪入童話集です。どんなに面白い本か、すぐにおわかりの事と思ひます。武井先生のお作の中で特に傑作ばかりを集め、それと先生が例の通り獨特の面白い、美しい挿畫を入れたのですから、一度手にしたら、はなせない本です。三百頁もあります。ずいぶん讀みがあります。それに三色版が二枚も入つてゐますし、其の外一頁大のきれいな畫が澤山に入つてゐる他に見られない本です。四月二十日頃發行になります。

懸賞創作募集

少年少女の創作

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕 課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したごとや諸君の好きなものを、諸君の好きなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齢)とおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるべく兼用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には、「金の星」特製の賞品を差上げます。次號(切は四月廿八日)の以後は次號へ廻る。發表は七月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の星社。

一般讀者の創作

童話……野口雨情先生選
話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕 童話は十五行以内、童謡は二十字語二百行以内、優秀な作品は、推薦または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五回、童謡には二回づつ、特選の場合は童話には拾回、童謡には五回づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價登録金四拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
半年分六冊(送料共)貳圓貳拾錢
一年分十二冊(送料共)四圓八十錢
但し新年號は特別號で五十錢です。から御注文の際は、この分だけ必ず加へてお申し込み下さい。

〔送〕 御注文は必ず前金で御申し込み下さい。送金は振替が一番便利で御座います。切手代用は(差金切手)一割増です。〔注〕 第何巻第何號よりと書いてください。住所姓名ははつきり書いてください。廣告料は御願會次第お答へ致します。

大正十三年四月九日印刷(納本) (毎月一回) 大正十三年五月一日發行 (一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 佐次郎
印刷所 東京市外田端三百五十一番地
發行所 東京市外田端三百五十一番地
電話 小石川五三三八七番

沖野岩三郎
生著

父戀し (五版)

▽定價金壹圓
▽送料十五錢

沖野先生の長編傑作童話。父の行方をたづね歩く姉と弟のははれにして、勇しい物語。

同

赤い猫 (五版)

▽定價金九十錢
▽送料十三錢

クス／＼笑はずには讀めない面白い／＼作であつて、しかも會い教訓を與へるものばかりです。課外讀本として最上の本です。

同

山六爺さん (近刊)

▽定價金壹圓
壹圓卅錢
▽送料十五錢

山の奥の／＼一軒家の山六爺さんが、狼や鹿や猪を相手に面白い／＼事をやる長篇物語。

人買船 (三版)

▽定價金六十錢
▽送料四錢

人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん

一つお星さん (三版)

▽定價金六十錢
▽送料四錢

一つお星さん、七つの子、鼯、雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬。

青い空 (三版)

▽定價金八十錢
▽送料六錢

青い空、燕、雨夜の傘、でん／＼虫、雀の酒盛り、呼ぶ鳥。

山彦 (新刊)

▽定價金八十錢
▽送料六錢

(目曲) 山彦、朝鮮館屋、三ヶ月さん、姥捨山、眠り龜の子、赤い靴。

金の童謡曲譜集

本居長世先生作曲
野口雨情先生作謠

第四輯 山彦 (新刊)

▽定價金八十錢
▽送料六錢

(目曲) 山彦、朝鮮館屋、三ヶ月さん、姥捨山、眠り龜の子、赤い靴。

東京市外田端三百五十一番地 星社の金 電話 小石川五三三八七番

世界少年少女 著名大系

第一篇
第二篇

ロビンソン漂流記 大森レオ物語

日本には世界の名著書を紹介した本が餘りありません。それが爲めに少年少女時代には非讀んで置かなければならない本も、遂に讀み得ないとは、何といふ嘆かばしい事ぞう。また僅かにあつても、餘りに高價であるか、或は餘りに御粗末な譯で、一般少年少女に推薦することが出来ない有様です。

金の星社はこの現状を悲しんで「世界少年少女名著大系」の出版に着手しました。本社の志すところは、安價にして、しかも内容装幀共に高雅にして充實せる書籍を發行する事にあります。世界の代表的名作は全部此の大系に網羅されますから、これを讀めば世界の名作はことごとくわかります。是非御受讀を待ちます。

◇寺内萬治郎畫伯裝幀 四六判總クロス美本 本文二百八十頁・挿畫十數葉入。本畫十數葉 本文百七十頁 送料十四錢

東田 京三 市五 外一 金の星社 振替東京五九五六番 電話小石川三五八七番



家なき子

三宅房子先生譯・寺内萬治郎畫伯裝幀・挿畫

・四六判箱入總クロス美本・本文二百八十頁・挿畫十數葉入。

◇定價 金壹圓八十錢・送料十五錢◇

▽「家なき子」は世界的の名作として、世界各国語に翻譯され、如何なる少年少女も是非一度は讀んで置かなければならない本として推薦されてゐるものです。

▽原作は佛國の文豪エクトル・マローの作になり、一人の孤兒の生涯を書いたものです。名家の家に生れながら、不思議な運命にもあそばされて、遂に旅役者に賣られ、村から村へ、さすらひ歩く哀れな物語りです。

▽また「家なき子」は一大教訓小説であります。主人公が悲しい身の上でありながら、一つ一つと人生を學んで行くあたり、讀者の涙をしばらせるだけでなく、また大きな教訓を與へます。歐米の各学校がそつせんして、本書を推薦してゐるのも、これが爲めに外なりません。

▽果せる哉、わが國に於ても、出版以來熱烈な歡迎を受け、驚くべき賣れ行きを呈してゐます。本書はまた、装幀の美しい點でも恐らく他にないといつて差支へないでせう。寺内萬治郎畫伯の苦心は美事に成功してゐます。金の星社はこれに使用するクロスを特に外國から取寄せました。

ライオンねりはみがき

いいにほひ！

きれいなチユーフ！

「わたしは大好きよ、大好きよ。」と

みち子さんも言ひました、

花子さんも言ひました、

美雄さんも言ひました。

